

パート 3

学術研究・基礎研究と研究費マネジメントの状況

3 学術研究・基礎研究と研究費マネジメントの状況についての自由記述の主な論点

3-1 学術研究・基礎研究の状況

本中項目に関連する自由記述の約 200 件から、大きく分けて以下の 6 つの論点が抽出された。

論点 3-1 将来を見据えた基礎研究がおろそかになっている。目先の役立つことに予算が回り、基礎研究の基盤向上に役立っていない。

論点 3-2 純粋な基礎研究は、見返りをすぐに期待しない投資である。経済力の減衰した現状では苦しいが、長い目で見た投資も国力のために必要である。

論点 3-3 基礎研究をせずに実用化研究ができる訳でないことを再認識する必要がある。

論点 3-4 企業が進めることが困難な基礎研究の追及を大学にやってもらいたい。役割分担が必要である。

論点 3-5 基礎研究における若手研究者の養成や若手研究者への研究資金の配分が不十分である。

論点 3-6 基礎研究と応用研究をつなぐ人材や両者を埋め合わせる研究が必要である。

論点 3-1 将来を見据えた基礎研究がおろそかになっている。目先の役立つことに予算が回り、基礎研究の基盤向上に役立っていない。(自由記述件数: 35 件)

- 基礎分野への配分が少ない。すでに成果を出した研究者にしか予算が分配されていない。そのように選ぶとどうしても年齢の高い研究者に多額の資金が配分されることになり、発表する雑誌のグレードは高いが、基礎研究としての新規性は少ないように感じる。(大学, 第 1G, 保健, 研究員・助教クラス, 男性)
- 基礎研究に与えられる資金があまりに少なく危惧している。基礎的なことを深く理解するまで研究し、それによって応用できるものを生み出す、という道筋を考えると、基礎研究費が少なくなれば、世の中に役立つものの数も必然的に減っていく。若手研究者で独立したポジションを得た人に対する資金も不足しているように思う。大きな研究室の偉い教授の下で働く助教と同じ種類の資金(科研費若手研究, JST さきがけ, 財団等)の他に、特別にスタートアップ資金を準備する必要がある。本来、それは大学が担保するべきものだが、日本の現状を考えると、文科省や学振が管理するほうが上手くいくかもしれない。(公的研究機関, 主任研究員・准教授クラス, 女性)
- あまたのプロジェクトや、集中的な研究費の配分は、目先のことに役立っても、日本の基礎研究の基盤向上には役立っていない。(大学, 部長・教授等クラス, 男性)
- 基礎研究は短期間に成果に結び付けるようなテーマは極めて少ないと思われる。これに対して研究費の配分は、近い将来の成果に重きを置いての配分になっておりこの辺にギャップがあると感じる。長い目で見て効果が出るテーマをいかに見分け、資源配分を行うかが肝要であるが難しい。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

論点 3-2 純粋な基礎研究は、見返りをすぐに期待しない投資である。経済力の減衰した現状では苦しいが、長い目で見た投資も国力のために必要である。(自由記述件数: 6 件)

- 数ある基礎研究の中で実際に社会に実装されるのは僅かだと思います。しかし、そういった実装され役に立つ研究を生み出すためには沢山の基礎研究が必要だと思います。直ぐに役に立つ応用研究はもちろん大切で、これに研究費を配分して貰いたいと思いますが、役に立つ「種」「芽」である基礎研究にも予算

を配して貰いたいと思います。また、数学や理論物理学のように、「それがわかるようになっても将来役に立つようにならない、直接に生活や人生を豊かにする訳ではない」研究もあります。寧ろ日本はそういった研究に強いところもあります。これらは、純粋に真理を追求学問なのだろうと思います。これらの研究が進むことは、単に人類のものの見え方の見晴らしがよくなるだけかもしれませんが、そういった自然科学のエッセンスだけ取り出したような学問も大事にして欲しいと願っております。それは知的好奇心だけに基づいた学問で、人がものを勉強したい、研究したい、という気持ちに最も近い学問だと思うからです。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 科学技術に関する政府予算全額の多少が問題なのではない。予算全額は国の状況によって変化するのは当然である。しかし近年、純粋な基礎研究のための研究費を取得するのが極めて困難になっている。これは、日本の経済力の減衰が原因であるという他に、政府・マスコミ他が基礎研究の重要性を理解していないためであると考えられる。政府・マスコミ他が考える基礎研究というもの、比較的近い将来役に立つことにつながる基礎研究のことである。しかし、実際はどの研究が将来役に立つことにつながるかは予測不可能なのである。逆に言えば、予測可能な研究は大した研究ではないといえる。研究成果は、旧ソ連の計画経済のように計画できるものではない。その意味で、役に立つことを前提に基礎研究を考えるのは間違っている。純粋な基礎研究は、見返りをすぐに期待しない投資である。経済力の減衰した現状では苦しいが、長い目で見た投資も国力のために必要である。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)

論点 3-3 基礎研究をせずに実用化研究ができる訳でないことを再認識する必要がある。(自由記述件数:8件)

- 現在、基礎研究の成果としてノーベル賞につながっている研究は主として1990年代前後に研究予算が厚く配分された成果である。最近では実用化研究ばかりが叫ばれ、基礎研究をろくにしていないようなテーマを直ぐに実用化研究として多くの予算を配分する傾向が見られるが、基礎研究をせずに実用化研究ができる訳でないことを再認識する必要がある(中国は最近、どの分野でも基礎研究と実用化研究を並行して進めており、中国に追い越されている分野が多々ある)。(公的研究機関,社長・学長等クラス,女性)
- 残念ながら、国内の研究者が国内で他国に劣らない成果を出すための環境・資金ともに不十分である。日本の産業においてもその技術開発力は、近隣諸国よりも遅れを取り始める事態を迎えている。多くの著名な研究者が提唱している通り、基礎研究の基盤なくして、技術開発の進展はないと思われる。現在の状況が続けば、10年後には日本の研究力は、さらに遅れをとると危惧される。従って、日本全体でより、基礎研究の裾野を広げ、より将来性の高い夢のある研究環境とすることは、喫緊の課題である。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,男性)

論点 3-4 企業が進めることが困難な基礎研究の追及を大学にやってもらいたい。役割分担が必要である。(自由記述件数:10件)

- すぐに役立つ研究は、公的研究機関や企業がやればいいため、大学での基礎研究に研究資金を当てるべきです。(公的研究機関,部長・教授等クラス,男性)
- 大学の研究と企業の乖離が激しいと感じる。この原因は、大学の研究者が社会ニーズを得る機会に恵まれない点と、企業側の大学への期待の低さ(大学のこれまでのスタンスが招いている可能性もあるが)と考えられる。企業には、企業内では利潤追求の観点から進めることが困難な基礎研究の追求について、大学に依頼し、それを物質的・情動的・資金的に支えてもらいたいと思う。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)

論点 3-5 基礎研究における若手研究者の養成や若手研究者への研究資金の配分が不十分である。(自由記述件数:7件)

- 基礎研究分野の若手研究者の養成環境が全く不十分である。この問題の解決には、大学や公的機関の努力はもちろんであるが、国家としての予算増額が必須であると考ええる。(大学,第 1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 私の場合は、雇用が秋採用であったために科研費のスタートアップに応募できませんでした。また、若手Bをいただきましたが、他の科研費と重複受給できないために、分析機器などはなかなか購入できない状況にあります。若手の応募可能な科研費の制限の緩和をしていただけると助かります。(大学,第 3G,理学, 研究員・助教クラス,男性)

論点 3-6 基礎研究と応用研究をつなぐ人材や両者を埋め合わせる研究が必要である。(自由記述件数:11件)

- 基礎研究の重要性は大学で認識されある程度の対応ができています。イノベーションにつなげる研究者が少ない。それを指導できる人材の育成が必要だと思う。(大学,第 4G,社長・学長等クラス,男性)
- 基礎研究を実用にまで持ち上げられる人材層の不足を懸念します。イノベーションにうまくつなげられていない優れた基礎研究も多いのではないかと想像します。官主導の行き過ぎた産学連携が最近散見されることも気になっています。両方の問題に共通して、第 2 ステージの研究活動を促進する必要があるのではないかと思います。(大学,第 1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 幾つかの国研における一部の分野では、必要な人材が不足している。特に研究開発成果をビジネスとして市場へ展開するまでの役割を担うべき人材(プロジェクトマネジメント)の欠如は著しい。基礎研究ができる人材も必要であるが、それだけで、技術立国がかなうとは思えない。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- イノベーションのためには、産官学の連携が重要であることは確かだが、イノベーションにつながる成果がなかなか出ないことについて、もっぱら大学の研究者の意識の低さに問題があるとする見方は間違っている。イノベーションに繋がるか否かの目利きは、企業側にこそ求められるものであり、大学の研究者にそうしたものを期待すべきではない。企業側がイノベーションのシーズとなる研究成果を探しやすくする観点から、大学側の研究成果が見えにくいといった問題を改善していくこと、その上で、共同研究などを行いやすくするためのリーズナブルな経費負担のしくみに改めていくことが実質的な産学連携につながると思う。(大学,第 4G,社長・学長等クラス,男性)

(その他の自由記述)

- 基礎科学も応用科学も重要という考えや、研究者の置かれている状況について、国民の理解が得られれば、研究費の額が大幅に増加しなくても、研究活動がしやすくなるのでは、と考えています。クラウドファンディング型研究予算のプラットフォームやホームページ、手続き等を公的機関が準備して頂けると、研究活動の幅が広がると思います。(大学,第 3G,農学,研究員・助教クラス,男性)

3-2 研究費マネジメントの状況

本中項目に関連する自由記述の約 150 件から、大きく分けて以下の 6 つの論点が抽出された。

論点 3-7 申請書・報告書作成の研究者負担は大きく、多くの時間が取られる。

論点 3-8 公募型資金のピアレビューが、一部の研究者に集中しており、大きな負担になっている。

論点 3-9 各資金配分機関は、比較的短期間での成果を求め、すでに結果の出ている研究課題に配分が集中している。研究の芽には投資されず、多様性が減少している。

論点 3-10 現時点では役に立つか分からない研究のサポートこそが政府特有の役目。産業応用に近い研究予算は企業や財団から資金を投入してもらえばよい。

論点 3-11 長期的な視野を持った資金配分が必要。若手研究者が長期にわたって大きな目標に取り組める枠組みがあるとよい。

論点 3-12 AMED が JST や NEDO でこれまでやっていた事業や分野(バイオ、医療機器等)をカバーしきれていない。各資金配分機関の役割分担における境界領域への配慮が必要である。

論点 3-7 申請書・報告書作成の研究者負担は大きく、多くの時間が取られる。(自由記述件数:29 件)

- 公募型予算に採択されればされるほど、事務処理が予算ごとに違って大変複雑となると同時に、(ほとんど同様な)書類を書いたり、(ほとんど同様な)研究会議に出席せねばならず、本来の研究をする時間が削られていく。(大学,第 3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 公的研究費にかかる手続きが煩雑で、その管理に非常な労力を要していると感じます。省庁ごとにルールの詳細が統一されていないのも大きな負担と感じます。研究意欲を削ぐ要因にもなりかねず、柔軟な運用の枠組みが求められます。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 公募型研究費の申請書では、特に業績リストなどは IT 技術を駆使して、もっと手間を省ける。(大学,第 2G,部長・教授等クラス,男性)

論点 3-8 公募型資金のピアレビューが、一部の研究者に集中しており、大きな負担になっている。(自由記述件数:7 件)

- ボランティアに近い形のピアレビューによる(助成金の)審査は、有力な研究者にとって負担になっており、大きな損失になっている可能性があるように思われる。(大学,第 2G,部長・教授等クラス,男性)
- 現在の科研費の審査員は大学教員がほとんどであり、年末・年度末の多忙な時期に集中するので、審査員の負担を軽減する必要がある。例えば、工学系では、企業の技術担当役員相当の人達に A4で 2 ページ程度の要約申請書に基づき、予審査をしてもらい、将来性が高いと判断された申請についてだけ、大学教員による詳細審査をすることも考えてよいと思う。申請者が申請書作成に費やす負担を削減する必要はない。税金で研究させてもらうのであるから、それ相当の努力をすべきである。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)

論点 3-9 各資金配分機関は、比較的短期間での成果を求め、すでに結果の出ている研究課題に配分が集中している。研究の芽には投資されず、多様性が減少している。(自由記述件数:7 件)

- 学術的研究を推進すべき資金配分機関が、比較的短期間での成果を求め社会展開の可能性を提案段階から書かせるようなやり方は、基礎研究の多様性を著しく損なう結果につながる。将来のイノベーション

ンの種を芽にもならない段階で摘み取るような資金配分の仕方はすぐにでもやめるべき。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)

- 資金配分機関(JST・AMED・NEDO 等)は, 将来有望な研究開発テーマの発掘や戦略的な資金配分等, それぞれの役割に応じた機能を十分に果たしているといえるが, 研究者が新たな課題を積極的に探索し, 挑戦するなどの, 研究の多様性確保に関しては寄与できていない。(大学, 第 4G, 工学, 主任研究員・准教授クラス, 男性)
- JST, AMED, NEDO 等に関しては多様性は激減している。欧米が先行する新技術の開発に追いつくためのプログラムが多いと感じる。UK では 24 時間, 365 日, いつでも web 上から科研費のような研究資金の申請が可能と聞く。採用も学术论文のように, 評価者とやりとりして決定される。予算についても, 自分の給与も含めて人件費への活用自由度が高い。博士院生や若手研究者, および研究補助員・技術補助員の継続的雇用を想定した研究費マネジメントが重要だが, 現状はかなり厳しい。(大学, 第 3G, 主任研究員・准教授クラス, 男性)

論点 3-10 現時点では役に立つかわからない研究のサポートこそが政府特有の役目。産業応用に近い研究予算は企業や財団から資金を投入してもらえばよい。(自由記述件数: 4 件)

- トップダウン方式による公募型研究では, かなり偏ったテーマ設定のために応募数が少ない場合もあり, 資金配分機関の役割に疑問が持たれる場合がある。また, 現段階で判断する「将来有望な研究開発テーマ」のサポートは, 民間からの資金提供が受けやすいと思われるので, 政府はそのパイプ役に努めればよいのではないかと。一方で, 役に立つかわからない研究のサポートこそが政府特有の役目であり, 大型資金を集中的に配分するよりも広く浅くサポートすることが重要と考えられる。(大学, 第 3G, 保健, 主任研究員・准教授クラス, 男性)
- 全体的な研究資金が少なく, ビッグラボ(世界的な研究結果を出し, 産業応用もある程度近く, 人も充足しているラボ)と呼ばれるところに資金が集中しているように見受けられる。国がビッグラボに資金を集中させるべきではなく, 企業, 財団などがそういったところに資金を投入すれば win-win になると思われる。(大学, 第 3G, 保健, 研究員・助教クラス, 男性)

論点 3-11 長期的な視野を持った資金配分が必要。若手研究者が長期にわたって大きな目標に取り組める枠組みがあるとよい。(自由記述件数: 7 件)

- 資金配分機関は, 世界の後追いではなく, 世界をリードするグランドデザインを持って, 日本の基礎研究の特徴を活かした応用展開や, 将来の社会を見据えたニーズからのシーズ育成など, 単発の研究領域ではなく, 長期ビジョンを持って基礎研究を推進し, 最終的には社会へ還元するまで繋げる継続性を構築することが望ましい。そのためには, 抽象的ではなく, 具体的かつ実効的なロードマップや将来ビジョンを形成する必要があると考える。また, 資金配分機関は, 長期ビジョンに応じた各研究領域に適切な PD やアドバイザーを選択する必要があると思われます。企業的なセンスも時には大切ですが, 長期ビジョンの基礎研究にはマッチしない場合があると思います。また, 領域の評価, PD やアドバイザーの評価を研究者からヒアリングするなどして, マネジメント側と研究実施者の双方の評価を行い, 国費を使った研究に双方が責任を持つことが理想だと思います。(大学, 第 3G, 部長・教授等クラス, 男性)
- 公募型研究費では期間内にある程度の成果が求められることが多く, 達成が容易である小さな目標を設定しがちになるように感じる。特に, 若いほうが斬新なアイデアが出せることを思うと, まだ大きな成果が出ていない若手研究者であっても, 長い時間をかけて大きな目標に取り組めるような枠組みがあると良い。(大学, 第 2G, 工学, 主任研究員・准教授クラス, 男性)

論点 3-12 AMED が JST や NEDO でこれまでやっていた事業や分野(バイオ、医療機器等)をカバーしきれしていない。各資金配分機関の役割分担における境界領域への配慮が必要である。(自由記述件数:8件)

- AMED の設立によって JST や NEDO で生命科学,バイオ,医療に関する予算配分を中止したが,現在の AMED が JST や NEDO でこれまでやっていた事業をカバーできているとは到底考えられない.厚労科研と似たような事業ばかり実施しており,そのような予算には臨床医の参加や臨床研究の実施を計画していない限り採択されない.これでは,基礎研究がイノベーションに繋がることは不可能である.設立の趣旨と事業内容を見つめ直し,事業内容を考え直していただきたい.(大学,第 3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 今後の超高齢社会において,医療機器やヘルスケア機器の役割はますます重要となることは明らかである.しかし,これらの分野は JST と AMED の役割分担により,そのはざままで抜け落ちてしまっている.今後これらの境界分野への配慮は必要であろう.(大学,第 4G,工学,部長・教授等クラス,男性)

(その他の自由記述)

- 最近は科研費申請がオンライン化したので,申請書の作成は以前と比べて格段に負担が軽減したと思う.(大学,第 2G,理学,研究員・助教クラス,男性)

Q302. 科学研究費助成事業は、研究者が新たな課題を積極的に探索し、挑戦することに十分に寄与していると思いますか。

回答者グループ	2016年度調査											各年の指数					指数の変化					
	分からない	6点尺度回答者数(人)						回答者合計(人)	指数	第4四分点	中央値	第3四分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最新年
		1	2	3	4	5	6															
大学・公的研究機関グループ	19	100	293	344	512	554	147	1,950	5.6	3.8	5.8	7.3	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学等	7	82	263	280	429	471	123	1,648	5.6	3.7	5.8	7.3	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
公的研究機関	12	18	30	64	83	83	24	302	5.7	4.0	5.8	7.3	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
インバウンジョン施設グループ	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大企業	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業・大学発ベンチャー	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学発ベンチャー	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
橋渡し等	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
性別	17	88	258	289	451	511	134	1,731	5.7	3.8	5.9	7.4	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
男性	2	12	35	55	61	43	13	219	5.2	3.6	5.2	6.7	5.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
女性	0	6	20	31	49	66	9	181	5.9	4.4	6.1	7.4	5.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-
社長・役員・学長等クラス	5	28	88	121	173	213	47	670	5.8	4.0	5.9	7.4	5.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
部長・教授クラス	6	32	96	111	167	160	56	622	5.6	3.7	5.7	7.3	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主任研究員、准教授クラス	6	34	87	76	119	112	31	459	5.2	3.2	5.5	7.1	5.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
研究員、助教クラス	2	0	2	5	4	3	4	18	6.2	4.2	5.8	8.1	6.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	3	38	112	119	155	185	44	653	5.4	3.5	5.6	7.3	5.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任用あり	16	62	181	225	357	369	103	1,297	5.7	3.9	5.8	7.3	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任期なし	1	4	13	28	32	41	3	121	5.7	4.1	5.8	7.2	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
学長・機関長等	2	4	18	23	46	59	12	162	6.1	4.7	6.3	7.5	6.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マネジメント実務	15	84	241	262	396	408	117	1,508	5.5	3.7	5.7	7.3	5.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
現場研究者	1	8	21	31	38	46	15	159	5.7	3.9	5.9	7.4	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大規模PIの研究責任者	4	56	178	190	304	357	103	1,188	5.7	3.9	5.9	7.4	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
国立大学等	0	7	17	14	24	31	6	99	5.5	3.4	5.8	7.3	5.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
私立大学	3	19	68	76	101	84	14	362	5.1	3.4	5.3	6.8	5.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学グループ	0	15	38	38	72	76	26	265	5.8	3.9	6.0	7.5	5.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第1グループ	1	13	59	70	92	113	32	379	5.7	3.9	5.9	7.4	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第2グループ	2	27	67	73	119	99	20	405	5.3	3.5	5.5	7.0	5.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第3グループ	2	26	92	91	123	167	37	536	5.6	3.6	5.8	7.4	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第4グループ	0	12	34	38	48	56	20	208	5.6	3.6	5.7	7.4	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
理学	2	19	67	67	116	137	38	444	5.8	4.0	6.0	7.4	5.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
工学	0	6	28	27	47	52	13	173	5.7	3.9	5.9	7.4	5.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
農学	2	34	85	83	110	93	23	428	5.0	3.1	5.2	6.8	5.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
保健	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
あり(過去3年間)	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学・公的研究機関の 知財活用(企業等)	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし(分からない)	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
全回答者(属性無回答を含む)	19	100	293	344	512	554	147	1,950	5.6	3.8	5.8	7.3	5.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)～6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)～10.0ポイント(十分)となる。

Q303. 我が国において、将来的なイノベーションの源としての基礎研究の多様性は、十分に確保されていると思いますか。

回答者グループ	2016年度調査											各年の指数					指数の変化					
	分らない	6点尺度回答者数(人)						回答者合計(人)	指数	第1四分点	中央値	第3四分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最新年
		1	2	3	4	5	6															
大学・公的研究機関グループ	53	338	656	461	299	137	25	1,916	3.3	2.0	3.2	4.9	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学等	38	278	552	406	249	114	18	1,617	3.3	2.0	3.3	4.9	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
公的研究機関	15	60	104	55	50	23	7	299	3.3	1.9	3.1	5.2	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イノベーション俯瞰グループ	44	75	219	146	84	49	6	579	3.4	2.2	3.3	4.9	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大企業	10	16	75	53	31	12	1	188	3.5	2.4	3.4	4.9	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業・大学発ベンチャー	19	21	49	39	15	7	3	134	3.2	2.1	3.2	4.6	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業	12	8	22	22	9	2	1	64	3.3	2.3	3.5	4.7	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学発ベンチャー	7	13	27	17	6	5	2	70	3.1	1.9	3.0	4.6	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
橋渡し等	15	38	95	54	38	30	2	257	3.5	2.1	3.3	5.3	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
男性	78	361	789	558	349	171	28	2,256	3.3	2.1	3.3	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
女性	19	52	86	49	34	15	3	239	3.0	1.8	3.0	4.7	3.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
社長・役員、学長等クラス	23	54	161	125	60	18	2	420	3.2	2.2	3.3	4.7	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
部長、教授クラス	21	140	343	214	144	70	10	921	3.3	2.1	3.2	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主任研究員、准教授クラス	23	128	203	155	104	56	13	659	3.4	2.0	3.3	5.1	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
研究員、助教クラス	25	88	147	102	67	39	5	448	3.3	1.9	3.2	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	5	3	21	11	8	3	1	47	3.6	2.4	3.3	5.1	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任期あり	35	145	289	215	119	58	10	836	3.2	2.0	3.2	4.8	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任期なし	62	268	586	392	264	128	21	1,659	3.4	2.1	3.3	5.0	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
業務内容別	0	19	44	37	18	4	0	122	3.1	2.1	3.3	4.6	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
学長・機関長等	5	14	63	43	29	9	1	159	3.5	2.3	3.4	5.0	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マネジメント実務	46	280	490	346	224	114	23	1,477	3.3	2.0	3.2	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
現場研究者	2	25	59	35	28	10	1	158	3.3	2.1	3.2	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大規模PIの研究責任者	19	219	397	265	180	96	16	1,173	3.3	2.0	3.2	5.0	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
国立大学等	8	15	30	29	11	6	0	91	3.2	2.1	3.4	4.7	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
私立大学	11	44	125	113	58	12	2	354	3.3	2.3	3.5	4.8	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学グループ	3	57	79	47	48	27	4	262	3.4	1.8	3.2	5.5	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第1グループ	9	57	134	99	64	12	5	371	3.2	2.1	3.3	4.8	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第2グループ	11	83	133	101	40	36	3	396	3.1	1.9	3.1	4.7	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第3グループ	14	73	185	147	80	35	4	524	3.4	2.2	3.4	4.9	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第4グループ	2	49	65	36	39	15	2	206	3.1	1.7	3.1	5.2	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
理学	13	72	141	98	80	35	7	433	3.5	2.1	3.4	5.3	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
工学	0	33	59	40	23	18	0	173	3.2	2.0	3.2	4.9	3.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
農学	18	76	141	126	37	26	6	412	3.1	2.0	3.2	4.6	3.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
保健	32	61	190	120	73	40	5	489	3.4	2.2	3.3	4.9	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
産学官連携活動あり(過去3年間)	12	14	29	26	11	9	1	90	3.4	2.2	3.5	4.9	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし	15	28	88	72	31	14	3	236	3.4	2.3	3.4	4.7	3.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学・公的研究機関の知財活用(企業等)	23	21	65	44	29	16	1	176	3.5	2.3	3.4	5.1	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし/分からない	97	413	875	607	383	186	31	2,495	3.3	2.1	3.3	4.9	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
全回答者(属性無回答を含む)																						

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)~6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)~10.0ポイント(十分)となる。

Q304. 我が国の基礎研究について、国際的に突出した成果が十分に生み出されていると思いませんか。

回答者グループ	2016年度調査											各年の指数					指数の変化					
	分らない	6点尺度回答者数(人)						回答者合計(人)	指数	第1四分点	中央値	第3四分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最新年
		1	2	3	4	5	6															
大学・公的研究機関グループ	66	121	412	492	509	331	38	1,903	4.7	3.1	4.8	6.3	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
大学等	49	98	346	407	436	288	31	1,606	4.7	3.1	4.8	6.4	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
公的研究機関	17	23	66	85	73	43	7	297	4.5	3.0	4.5	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
イノベーション/企業グループ	37	27	158	157	151	76	17	586	4.5	2.9	4.5	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
大企業	8	8	59	45	57	28	3	190	4.3	2.8	4.4	5.9	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
中小企業・大学発ベンチャー	15	8	33	43	22	23	9	138	4.7	3.0	4.4	6.2	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
中小企業	7	3	15	26	11	8	6	69	4.7	3.3	4.4	6.2	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
大学発ベンチャー	8	5	18	17	11	15	3	69	4.6	2.8	4.5	6.8	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
橋渡し等	14	11	66	69	72	35	5	258	4.5	3.0	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
男性	83	126	509	587	604	374	51	2,251	4.7	3.1	4.7	6.3	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
女性	20	22	61	62	56	33	4	238	4.2	2.7	4.3	6.0	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
社長・役員、学長等クラス	21	20	113	118	100	65	6	422	4.5	2.9	4.4	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
部長、教授クラス	31	49	211	239	241	149	22	911	4.6	3.1	4.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
主任研究員、准教授クラス	28	47	140	167	180	102	18	654	4.6	3.1	4.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
研究員、助教クラス	18	31	93	110	128	84	9	455	4.7	3.1	4.9	6.4	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他	5	1	13	15	11	7	0	47	4.4	3.0	4.4	5.9	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
任期あり	37	53	195	214	212	144	16	834	4.6	3.0	4.6	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
任期なし	66	95	375	435	448	263	39	1,655	4.6	3.1	4.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
学長・機関長等	1	8	22	37	32	22	0	121	4.6	3.3	4.7	6.2	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
マネジメント実務	9	8	32	42	43	28	2	155	4.7	3.3	4.8	6.3	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
現場研究者	52	92	318	379	399	249	34	1,471	4.7	3.1	4.8	6.3	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
大規模PIの研究責任者	4	13	40	34	35	32	2	156	4.5	2.8	4.6	6.4	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
国立大学等	24	73	241	288	319	220	27	1,168	4.8	3.2	4.9	6.4	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
私立大学	7	3	30	21	23	14	1	92	4.4	2.8	4.4	6.1	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
私立大学	18	22	75	99	94	54	3	347	4.5	3.1	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
第1グループ	2	23	52	57	76	46	9	263	4.7	3.0	5.0	6.4	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
第2グループ	8	13	76	100	113	63	7	372	4.8	3.4	5.0	6.3	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
第3グループ	18	24	90	105	95	66	9	389	4.6	3.0	4.6	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
第4グループ	19	33	115	134	136	96	5	519	4.6	3.1	4.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
理学	2	13	42	51	59	35	6	206	4.8	3.2	4.9	6.4	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
工学	13	30	94	99	127	72	11	433	4.7	3.1	4.9	6.3	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
農学	9	11	31	46	41	34	1	164	4.7	3.3	4.8	6.4	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
保健	14	22	91	121	110	63	9	416	4.6	3.2	4.6	6.2	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
あり(過去3年間)	28	19	131	134	126	69	14	493	4.6	3.0	4.5	6.1	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
なし	9	8	27	23	25	7	3	93	4.1	2.6	4.2	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	
あり(過去3年間)	15	12	73	72	50	22	7	236	4.2	2.7	4.1	5.7	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
なし(分からない)	17	9	45	48	49	26	5	182	4.6	3.0	4.6	6.2	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	
全回答者(属性無回答を含む)	103	148	570	649	660	407	55	2,489	4.6	3.1	4.7	6.3	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)~6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)~10.0ポイント(十分)となる。

Q305. 基礎研究をはじめとするとする我が国の研究開発の成果はイノベーションに十分につながっていると思いますか。

回答者グループ	2016年度調査											各年の指数					指数の変化					
	分らない	6点尺度回答者数(人)						回答者合計(人)	指数	第1四分点	中央値	第3四分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最新年
		1	2	3	4	5	6															
大学・公的研究機関グループ	127	128	406	543	485	246	34	1,842	4.5	3.0	4.5	6.0	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学等	99	99	337	451	428	216	25	1,556	4.5	3.1	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
公的研究機関	28	29	69	92	57	30	9	286	4.1	2.7	4.1	5.7	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イノベーション俯瞰グループ	31	49	226	158	104	54	1	592	3.6	2.4	3.6	5.2	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大企業	7	9	81	53	31	17	0	191	3.6	2.5	3.5	5.0	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業・大学発ベンチャー	12	20	47	37	26	10	1	141	3.5	2.2	3.5	5.1	3.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
中小企業	6	10	20	20	13	6	1	70	3.7	2.3	3.8	5.3	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学発ベンチャー	6	10	27	17	13	4	0	71	3.3	2.1	3.2	4.9	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
橋渡し等	12	20	98	68	47	27	0	260	3.7	2.4	3.6	5.3	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
男性	134	160	567	640	531	270	32	2,200	4.3	2.8	4.3	5.9	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
女性	24	17	65	61	58	30	3	234	4.2	2.7	4.3	5.9	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
社長・役員、学長等クラス	16	36	142	128	85	35	1	427	3.7	2.5	3.8	5.3	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
部長、教授クラス	47	56	253	256	218	104	8	895	4.2	2.8	4.2	5.8	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
主任研究員、准教授クラス	49	52	134	179	162	90	16	633	4.5	3.0	4.5	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
研究員、助教クラス	41	29	87	124	116	67	9	432	4.6	3.2	4.7	6.2	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	5	4	16	14	8	4	1	47	3.8	2.5	3.8	5.3	3.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
雇用形態	57	69	216	232	188	99	10	814	4.2	2.7	4.2	5.8	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任期あり	101	108	416	469	401	201	25	1,620	4.3	2.9	4.3	5.9	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
任期なし	2	7	37	47	22	7	0	120	3.8	2.7	3.9	5.0	3.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
業務内容別	10	5	47	49	35	16	2	154	4.2	2.9	4.2	5.7	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
学長・機関長等	110	98	294	395	386	212	28	1,413	4.6	3.1	4.7	6.2	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マネジメント実務	5	18	28	52	42	11	4	155	4.2	2.9	4.3	5.7	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
現場研究者	65	75	247	326	293	165	21	1,127	4.5	3.1	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大規模PIの研究責任者	10	4	23	24	29	8	1	89	4.4	3.0	4.5	5.9	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
国立大学等	24	20	67	102	106	43	3	341	4.6	3.3	4.7	6.0	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
私立大学	13	22	54	63	65	43	5	252	4.5	2.9	4.7	6.3	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第1グループ	25	17	77	115	102	38	6	355	4.5	3.2	4.5	5.9	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第2グループ	26	26	84	110	101	52	8	381	4.5	3.0	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第3グループ	31	32	107	145	144	74	5	507	4.5	3.1	4.6	6.1	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
第4グループ	18	12	33	45	69	25	6	190	4.8	3.4	5.1	6.3	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
理学	20	30	79	113	120	74	10	426	4.7	3.3	4.9	6.4	4.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
工学	20	10	31	46	45	21	0	153	4.5	3.2	4.6	6.0	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
農学	26	25	98	114	103	59	5	404	4.4	3.0	4.5	6.1	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
保健	22	44	190	131	85	48	1	499	3.6	2.4	3.5	5.2	3.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
産学官連携活動あり(過去3年間)	9	5	36	27	19	6	0	93	3.7	2.5	3.7	5.2	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし	9	22	113	54	37	15	1	242	3.3	2.2	3.1	4.8	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大学・公的研究機関の知財活用(企業等)	14	16	55	61	38	15	0	185	3.8	2.6	3.9	5.3	3.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-
なし/分からない	158	177	632	701	589	300	35	2,434	4.3	2.8	4.3	5.9	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-
全回答者(属性無回答を含む)																						

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)～6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)～10.0ポイント(十分)となる。

Q306. 資金配分機関(IST・AMED・NEDO等)は、将来有望な研究開発テーマの発掘や戦略的な資金配分等、それぞれの役割に忠じた機能を十分に果たしていると思いますか。

回答者グループ	2016年度調査													各年の指数					指数の変化				
	分らない	6点尺度回答者数(人)						回答者合計(人)	指数	第4四分点	中央値	第3四分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最新年	
		1	2	3	4	5	6																
大学・公的研究機関グループ	231	183	418	479	440	200	18	1,738	4.1	2.7	4.3	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大学等	185	153	353	410	371	168	15	1,470	4.1	2.7	4.3	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
公的研究機関	46	30	65	69	32	3	3	268	4.1	2.6	4.3	5.9	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イノベーション推進グループ	60	36	136	158	155	72	6	563	4.4	3.0	4.5	6.0	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大企業	28	2	37	59	51	20	1	170	4.6	3.4	4.6	6.0	4.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中小企業・大学発ベンチャー	19	13	41	35	30	13	2	134	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
中小企業	16	4	15	20	14	6	1	60	4.2	2.9	4.3	5.7	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大学発ベンチャー	3	9	26	15	16	7	1	74	3.7	2.3	3.6	5.6	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
橋渡し等	13	21	58	64	74	39	3	259	4.5	2.9	4.6	6.2	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
男性	240	200	493	586	545	246	24	2,094	4.2	2.8	4.3	5.9	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
女性	51	19	61	51	50	26	0	207	4.0	2.6	4.1	5.8	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
社長・役員・学長等クラス	31	34	87	130	120	37	4	412	4.2	3.0	4.4	5.8	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
部長・教授クラス	83	88	213	243	205	103	7	859	4.1	2.7	4.2	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
主任研究員・准教授クラス	83	59	159	157	143	72	9	599	4.1	2.6	4.2	5.9	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
研究員・助教クラス	90	36	86	94	111	52	4	383	4.4	2.8	4.6	6.1	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他	4	2	9	13	16	8	0	48	4.8	3.5	5.0	6.3	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
任期あり	88	65	160	235	210	108	5	783	4.4	3.0	4.5	6.0	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
任期なし	203	154	394	402	385	164	19	1,518	4.1	2.6	4.2	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
学長・機関長等	2	10	21	42	38	9	0	120	4.3	3.3	4.5	5.7	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マネジメント実務	14	8	27	54	43	16	2	150	4.5	3.4	4.6	5.9	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
現場研究者	209	147	330	359	322	144	12	1,314	4.0	2.6	4.2	5.8	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
大規模PIの研究責任者	6	18	40	24	37	31	4	154	4.5	2.5	4.7	6.5	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
国立大学等	121	114	284	278	274	129	12	1,071	4.1	2.6	4.3	5.9	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
私立大学	14	10	21	21	21	10	2	85	4.1	2.6	4.2	5.9	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
私立大学	50	29	68	111	77	29	1	315	4.1	2.9	4.2	5.6	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
第1グループ	29	33	57	60	52	31	3	236	4.0	2.4	4.1	5.9	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
第2グループ	34	31	90	90	86	45	4	346	4.2	2.7	4.3	5.9	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
第3グループ	47	34	96	97	99	33	1	360	4.0	2.6	4.2	5.7	4.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
第4グループ	64	48	97	150	118	55	6	474	4.2	2.9	4.4	5.9	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
理学	49	20	45	35	41	17	1	159	3.9	2.4	4.0	5.8	3.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
工学	44	35	82	106	113	59	7	402	4.5	3.0	4.7	6.2	4.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
農学	23	23	30	45	39	13	0	150	3.9	2.5	4.1	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
保健	46	44	119	112	73	33	3	384	3.7	2.4	3.8	5.3	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
あり(過去3年間)	40	27	119	136	136	59	4	481	4.4	3.0	4.5	6.0	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
なし	20	9	17	22	19	13	2	82	4.4	2.8	4.5	6.2	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
あり(過去3年間)	24	13	60	63	68	20	3	227	4.3	2.9	4.4	5.8	4.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
なし(分からない)	31	8	39	56	40	23	2	168	4.4	3.1	4.4	6.0	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
全回答者(属性無回答を含む)	291	219	554	637	595	272	24	2,301	4.2	2.7	4.3	5.9	4.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)~6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)~10.0ポイント(十分)となる。

Q307. 政府の公募型研究費やその体系は、優れた研究に対して、研究の発展段階に応じ、継続性を保ちつつ支援することが十分にできていると思いませんか。

回答者グループ	2016年度調査											各年の指数					指数の変化					
	6点尺度回答者数(人)						回答者 合計(人)	指数	第1四 分点	中央値	第3四 分点	2016	2017	2018	2019	2020	16→17	17→18	18→19	19→20	16→最 新年	
	分 か ら な い	1	2	3	4	5																6
回答者グループ	大学・公的研究機関グループ	174	195	490	493	426	132	19	1,755	3.8	2.5	4.0	5.6	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	大学等	214	158	422	409	360	117	15	1,481	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	公的研究機関	40	37	68	84	66	15	4	274	3.8	2.4	4.0	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	イノベーション・ベンチャー	67	46	161	163	133	49	4	556	4.0	2.6	4.1	5.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	
	大企業	32	3	51	55	43	13	1	166	4.2	2.9	4.2	5.6	4.2	-	-	-	-	-	-	-	
	中小企業・大学発ベンチャー	22	13	41	38	24	14	1	131	3.8	2.5	3.8	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	中小企業	18	2	16	23	10	6	1	58	4.2	3.0	4.1	5.4	4.2	-	-	-	-	-	-	-	
	大学発ベンチャー	4	11	25	15	14	8	0	73	3.5	2.2	3.4	5.4	3.5	-	-	-	-	-	-	-	
	橋渡し等	13	30	69	70	66	22	2	259	3.9	2.5	4.1	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	男性	231	212	590	604	510	167	20	2,103	3.9	2.6	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
性別	女性	50	29	61	52	49	14	3	208	3.7	2.3	3.8	5.4	3.7	-	-	-	-	-	-	-	
	社長・役員・学長等クラス	39	34	119	128	101	21	1	404	3.8	2.6	4.0	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	部長・教授クラス	67	91	266	248	200	67	3	875	3.8	2.5	3.9	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	主任研究員・准教授クラス	88	73	160	162	136	52	11	594	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	研究員・助教クラス	84	41	94	107	104	35	8	389	4.1	2.7	4.3	5.8	4.1	-	-	-	-	-	-	-	
	その他	3	2	12	11	18	6	0	49	4.6	3.1	4.9	6.1	4.6	-	-	-	-	-	-	-	
	任期あり	97	69	207	230	192	67	9	774	4.0	2.7	4.1	5.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	
	任期なし	184	172	444	426	367	114	14	1,537	3.8	2.5	3.9	5.5	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	学長・機関長等	0	12	37	40	32	1	0	122	3.6	2.5	3.8	5.1	3.6	-	-	-	-	-	-	-	
	マネジメント実務	10	9	42	52	39	10	2	154	4.1	2.8	4.2	5.5	4.1	-	-	-	-	-	-	-	
大学の業務内容別	現場研究者	199	150	364	371	318	105	16	1,324	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	大規模PIの研究責任者	5	24	47	30	37	16	1	155	3.7	2.2	3.7	5.7	3.7	-	-	-	-	-	-	-	
	国立大学等	115	125	315	277	263	85	12	1,077	3.8	2.4	3.9	5.6	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	公立大学	12	9	25	25	18	8	2	87	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	私立大学	47	24	83	107	79	24	1	318	4.0	2.8	4.1	5.5	4.0	-	-	-	-	-	-	-	
	第1グループ	17	36	59	71	63	17	2	248	3.8	2.4	4.0	5.5	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	第2グループ	38	29	112	76	93	31	1	342	3.9	2.5	4.0	5.7	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	第3グループ	46	40	99	112	85	23	2	361	3.8	2.5	4.0	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	第4グループ	65	42	139	132	110	42	8	473	4.0	2.6	4.0	5.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	
	理学	39	29	47	40	39	13	1	169	3.6	2.1	3.7	5.5	3.6	-	-	-	-	-	-	-	
大学部局分野	工学	44	34	97	117	105	42	7	402	4.2	2.8	4.3	5.8	4.2	-	-	-	-	-	-	-	
	農学	21	22	46	35	38	10	1	152	3.6	2.2	3.7	5.5	3.6	-	-	-	-	-	-	-	
	保健	51	34	117	109	90	26	3	379	3.8	2.5	3.9	5.4	3.8	-	-	-	-	-	-	-	
	あり(過去3年間)	48	37	136	141	115	41	3	473	4.0	2.7	4.1	5.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	
	なし	19	9	25	22	18	8	1	83	3.9	2.5	3.9	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	あり(過去3年間)	25	14	72	70	53	15	2	226	3.9	2.7	4.0	5.4	3.9	-	-	-	-	-	-	-	
	なし(分からない)	36	10	40	56	36	21	0	163	4.2	2.9	4.3	5.8	4.2	-	-	-	-	-	-	-	
	全回答者(属性無回答を含む)	281	241	651	656	559	181	23	2,311	3.9	2.5	4.0	5.6	3.9	-	-	-	-	-	-	-	-

注1: 回答者数は、分からないを除いた数を示している。

注2: 指数とは、6段階評価(1(不十分)～6(十分))からの回答を、1→0ポイント、2→2ポイント、3→4ポイント、4→6ポイント、5→8ポイント、6→10ポイントに変換し、その合計値を有効回答者数で除したものである。指数の範囲は0.0ポイント(不十分)～10.0ポイント(十分)となる。

Q309. 学術研究・基礎研究と研究費マネジメントの状況について、ご意見をご自由にお書きください

○多様な研究サポート制度を社会のニーズも考慮しつつ展開していると思うが人材の育成状況等も考慮した長期的な取り組みがより望ましい。○「国際的に突出した成果」を、激しい国際競争に勝つことによって得た成果と、国際的に独創的な試みによって得た成果に分けて考えるべきである。後者に関しては、多様性を広く確保すべきと考える。○科研費のシステムは、それ自体を長く継続することで研究者に「自律的研究」意識を植え付けることに成功している。一方そのようにして行われる基礎研究シーズが、イノベーションや国民の利益という「出口」につながる仕組みがどうしても貧弱。○基礎研究をイノベーションと結びつけて評価する視点には、近視眼的なものを感じてしまう。○比較的短期間で成果を出せる研究に、研究費配分を含めて偏りがあると感じざるを得ない。○期限を定めた短期的な研究に対してはある程度サポートされていると考えられるが、心理学・教育学・医学等の領域で必要な長期縦断研究に対する支援はきわめて乏しいと言わざるを得ない。○AMED関連の予算については、応募・採択から実施までの余裕が無く、短いものと採択から1年半で終了というものもある。このような流れでは、腰を据えた研究というのは難しいと思う。また補正予算・調整費などの名目で年度の途中に追加配分があるが、このような場当たり的な配分をしていると、使いもしない機器の購入や科学的妥当性のない研究に資金が流れる原因となる。また上記の様に研究期間が短いため、評価側の仕組みを見直す必要がある。○出口指向、グループ型の大型財源が存在感を増しているのに対して、小規模で、基礎的な研究を支援するJSTの存在感が低下していると感じる。科学技術の基礎体力強化や将来へ人材育成という面もあり、バランス良く研究支援を進める必要がある。○研究費マネジメントについて、科研費等の公募型研究費に関する書類を作成する際の負担が大きい。(大学,第1G,社長・学長等クラス,男性)

2 柔軟性に乏しいシステムとなっている。(大学,第1G,社長・学長等クラス,男性)

3 人文社会科学系の研究の抜本的な国際化を進める上では、現状の日本での評価を柱とした審査体制そのものからはみでた研究をすくうカテゴリーや評価方法の新設が必要だ。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

4 前と同じ： 科研費には特別推進など大型研究は不要。基盤Aまでいい。ただし、新学術領域研究のような大型グループ研究は日本の特定分野の進展には必要。大型の個人ベースの研究はJSTに任せればいい。科研費は薄く広くが基本。将来の芽を育むように、若手中心に、採択率を50%程度に。それら研究で出てきた尖った研究をJSTで支援すればいい。JSPSとJST, NEDO, AMEDの連携、情報交換がなされているのだろうか？(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

5 配分機関間の、担当領域をめぐる縄張り争い(健康と医療の線引きなど)のようなものにまきこまれ、大変な目にあいました。領域のために研究しているのではなく、世の中のためにやっているのだから、そのような争いのとばっちりや研究者に与えないでください。審査する側の不勉強が目立つことがあり、それではやる気をそがれ、また、公平性も担保できてないと思います。審査の質ももっと問われるべきだと思います。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

6 評価疲れ、評価者のレベルの低さ、マッチポンプ的な評価と資金配分など、いつまでやっているのかと感じます(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

7 現時点で競争的資金の金額が大きくなりすぎている。競争的資金の目標は、世界で既に遅れたもののが目標になる事が多々あり時代遅れの感がすることがある。新学術,NEDO, CRESTなどでそのような事をしばしば体験している。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

8 近年科研費データベースが完備された結果、予算をめぐる人間関係があぶりだせるようになっている。すでに役目を終わった研究領域で無尽のような形で科研費が分配されているという見苦しい現実が浮かび上がる。具体的には、特定の年に科研費がゼロにならないように、研究代表者として応募した新規申請がNGとなった場合のリスク回避として、分担者として別の研究者が代表者となっている科研費に分担者として加わることが当たり前になっている領域がある。このような領域は概してイノベーションとは距離のある領域で、若手の独創的なテーマを取り上げるためには、このような行為は慎むべきであり、審査委員の良識が求められる。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

9 わが国の学術研究・基礎研究は極めてレベルが高く、外部資金さえ獲得すれば研究環境も整う。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

10 研究資金マネジメントに掛かる事務作業が紙ベース(紙形態の電子ファイル)で、さらにファンド毎に異なり、無駄な作業が多すぎ。また、運営機関毎の慣習で不要な書類作業を要求され、研究時間が削られる。研究するなら予算を取らない方がましという状況が生まれている。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

11 科研費等にかんする審査の負担は著しく大きいと言わざるを得ない。この解決は審査委員の大幅な増加以外にないと考えている。現状で約7000人のところを、20000人でいどにする必要があるのではないか。また、申請システムがバラバラで、研究申請をするための、無駄時間が多い。書式を含め政府系外部研究資金申請の統一化、簡略化が望まれる。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

12 今日の研究費マネジメントは、科研費レベルでは公正に行われていると実感しているが、JSTやNEDOの配分研究費の審査に関しては、明らかに審査員とのコネが重要である場合が多く、マネジメントができていないとは全く思えない。また、この国の未来の産業やイノベーションを担う人材を育成するための大事な研究費が、困っている企業の研究開発現場に流れているだけの場合も非常に多いと感じている。半導体産業をはじめ、この国の産業を停滞させた人達が予算獲得テーマを選ぶ側に多数居るのも非常に疑問である。若い人材が、魅力あるテーマを提案して、やる気にみち溢れて予算申請しても、古い現実主義の企業人たちにダメ出しされ、潰されてしまうのが現状多いと感じている。結局、定年間際の60代くらいの教授陣の定年延長予算を獲得させる方向に進んでいるだけで、若手教員としてはイノベーションへのチャレンジの機会もなく、大変残念であるとしか言いようがない。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

13 自分への反省も含めて申し上げると、今のトップ研究者は、「論文を書くために研究をする」という状態に陥りやすい。「本当に重要な研究」のアイデアがあっても、5年程度は成果を出せないプランであれば、実行不可能である。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)

- 14 新規性が高い研究領域に対する積極的な資金配分のシステムが存在しないことが、我が国の世界的リーダーシップを削いでいる。かなり世界的に評価が高まり、領域が確立しないと、資金配分がなされない。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)
- 15 選択と集中はほどほどにすべき。将来有望な研究テーマを誰かが見抜けるというのは大きな勘違いです。将来の見えない取り組みを多数行う中で、ごく少数の大成功例が生まれる。取り組む側としてはそれほどリスクだからこそ、国の予算で国の研究者が研究する意義があるのであって、そうでなければ、企業がやればすむ。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)
- 16 外部資金への応募額に対して採択額が少ないと不足分の工面に苦慮し、研究実施内容の縮小を余儀なくされて大きな支障を来す。半ば出来レース的な様相も伺えるような外部資金もあったり、ある特定の著名研究者に資金が集中したりして、公平性と機会均等の点で必ずしも健全とは言えない。(大学,第1G,部長・教授等クラス,男性)
- 17 イノベーションイノベーションとうるさく、目に見える結果がすぐに出る研究しか採択されなくなっている。政府系の公募型研究費に採択されると研究費には恵まれるが、成果報告(報告書作成など)を頻繁に要求されるため研究どころではなくなる。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 18 JSTの研究者支援の体制は大変素晴らしいと思います。神エクセルやワードの罫線を無くすなど、改革を継続していただきたいです。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 19 応用がすぐに期待できるものに支援が偏りつつあるように感じます。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 20 事務部の効率化(人件費削減)の下に、結果として教員に係る雑務が増大している。研究費マネジメントについては、本項目でのアンケートとは全く逆の方向に進んでいる。一部の国プロに関しては、PDの意向以上に監督組織(例えば、ImPACTの場合はCSTI)の意向が強すぎるため、事実上意味を成していないケースがある。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 21 NEDOなどの競争的資金は、成果を心配するあまり、こまめに成果報告を求め、マネージメントの担当者がその作成に多くの労力を要している。予算を与えたあとは、相手を信頼し、成果が出るのをまつというスタンスが必要だと思う。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 22 NEDO等、競争的資金の研究費の使い方ルールが年度毎に変化することがあり、非常に困ったことがある。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 23 基礎研究を実用にまで持ち上げられる人材層の不足を懸念します。イノベーションにうまくつなげられていない優れた基礎研究も多いのではないかと想像します。官主導の行き過ぎた産学連携が最近散見されることも気になっています。両方の問題に共通して、第2ステージの研究活動を促進する必要があるのではないかと思います。(大学,第1G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 24 学術研究と、技術や応用につながる開発研究の区別があいまいであり、真の学術研究がおろそかにされている。将来の科学技術を担うのは学術研究であり、それを理解した上での「学術研究の振興」が重要である。(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 25 基礎研究の発展のためには欧米並みに予算を措置する必要がある。(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 26 日本の学術分野における大きな問題の1つとして、すべてのことを研究者が行わなければならないことがあると思う。研究、機関の運営、教育、研究費マネジメント等、弱い分業体制が築けないと、今後ますます研究者が疲弊してしまう可能性があることを懸念する。(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 27 研究費の競争的な配分が必要であることは理解できるが、一方で、(たとえ比較的少額でも)安定的な研究費があると非常に助かるとおもう。(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 28 研究費を継続して獲得しつづけるために、時間が囚われすぎる傾向が強くなってきているので、JSTやAMEDにも科研費を補完するような、部分的にうすく広く長期にカバーすることで、継続的に研究をサポートする工夫も取り入れることを今後考慮してはどうだろうか？(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 29 すぐに目に見えて世の中の役に立つ分野は重要であるが、そうでない分野に対して目配りが必要だ。(大学,第1G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 30 大型予算への偏りが過大であると思う。基盤などの予算を拡充すべきだと感じる。(大学,第1G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 31 JST, AMED, NEDOなど産業界と近い資金(特に大型のもの)はそれなりにあるように見えますが、基礎科学分野で大きなプロジェクトを行おうとすると科研費以外に存在せず、しかも上限がかなり小さくなってしまっています。このため、科研費でできないサイズをやろうとするといきなり概算要求までいかざるを得ません。また、現在の基礎科学研究はtenure研究者が減っているにも拘わらず、大型化しており、任期付き研究者を雇用して進めざるを得ません。現在の科研費のサイズではそのための費用を十分に手当てができていないように見受けられます。(大学,第1G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 32 基礎研究の中にも重要な研究とそうでないものがあると思うが、論文発表をかなり機械的に行うことができる体制になっていると、成果が見込まれるために研究費が当たりやすい。その結果、ますます同じような研究結果が産出されるように思う。このような状況では、良い基礎研究が進まないのではないかと危惧する。(大学,第1G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 33 現代的な要請に応える研究にとびつかなくとも、じっくりと基礎的な研究をできる基盤が必要。(大学,第1G,理学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 34 研究費の審査システムが年長者に有利にできています。不採用理由をもっと明確に教えて欲しい。欧米のように、不明瞭な不採用理由や審査員の勘違いに反論できるシステムが必要。(大学,第1G,理学,研究員・助教クラス,男性)

基礎研究に対する投資が十分かは該当しないのでわからない。一方で、基礎研究からイノベーションにつなげる応用研究もあり評価されていないと感じる。問題解決を目指す工学分野は基礎と応用研究両方が重要となるが、応用研究の成果は論文数で評価することが難しい。逆に社会ニーズにこたえる応用研究を行わず、個人の関心という名の下に論文文化しやすいテーマを選び基礎研究で業績を増やすことに疑問を感じる。こうした問題を防ぐには応用研究の評価体制、またはフライングホーファーのような実施体制を別途構築すべきと感じる。(大学,第1G,理学,研究員・助教クラス,男性)

科研費の審査は一部の研究者に負担が偏っている。この原因は簡単で、一度に100件もの申請書を審査する必要があるから他に他ならない。より多くの審査員を確保して、一度に最大10件以内に抑えるようにすれば負担はかなり軽減できるし、一件当たりの審査にも集中して取り組むことができる。若手Sを再開すべきである。(分野にもよるが筆者の専門である物性物理学を例にとる)ポストクを終えたばかりの実験研究者が0から研究室を立ち上げようとする、少なくとも5年で1億円のスタートアップ資金が必要である。この額をかき集めるためには、若手A(最長4年で満額3000万円だが実際は7割掛けしかこないの2000万強)に通って、タイミングよく応募できるJSTさきがけ(3年半で3000万円程度であったと記憶)がありかつそれに通って、新学術の分担(4年半で3000万程度)に引き入れてもらうという神がかり的な状況でもなお足りない。そういう現状では、若手の(とはいえずでに自立するだけの経験と能力のある)研究者すでに実績があって資金が潤沢にある教授のもとでその研究室でできる範囲で研究せざるを得ない。これでは急成長している分野の研究者の受け皿がなく、日本の実験研究が国際的競争から致命的に遅れてしまいかねない。その意味では、長期的スパンでは講座制を廃止し、助教は全てテニュアトラック(潤沢なスタートアップ資金を与えることが大前提)として独立した研究室を運営しているアメリカのような制度に変えていくことが望ましいと考える。(大学,第1G,理学,研究員・助教クラス,男性)

科研費以外の研究費は、現在の社会問題解決などの目先の金銭的利益につながるものしか考えていない。これらの研究をする場合は、科研費と科研費以外の研究費と複数の資金源を得られるが、将来的に人類を豊かにする基礎科学の研究費は科研費に限られている。基礎科学を支えると問題解決型の研究費をもっと棲み分け他方が基礎科学の発展につながるかと考えられる。(大学,第1G,理学,研究員・助教クラス,男性)

出口を見据えることは重要だが、普遍的なメカニズムの解明なしには科学技術の発展は不可能である。応用発展できそうな分野だけでなく、多様でかつ優れた基礎科学分野をカバーできる研究開発テーマ発掘や戦略的な資金配分を望む。(大学,第1G,理学,研究員・助教クラス,女性)

基礎研究費が減っている中で、科学研究費等の競争的資金のサポートには大変感謝している。競争的資金を獲得し続けるためには、成果を出し、成果を少なくとも学術界に継続的に発信する必要があり、研究活動に良い意味で緊張感を与えている。(大学,第1G,工学,部長・教授等クラス,男性)

20年前に比べると科学研究費を始めとする研究費の使用に関わる研究者の負担は大きく軽減されたと感じる。関係各位のご努力に深く感謝したい。(大学,第1G,工学,部長・教授等クラス,男性)

イノベーションばかりが強調されているように思う。実は学術は知的インフラであると考えている。インフラの上にアイデアの実装があり、インテグレーションがある。科研は研究を多様に展開できる、たいへん重要な研究資金である。ただし、ここ5年ほど、十分な予算を獲得できなかった。そのアイデアを応用型にして、企業やNEDOから資金獲得する等の工夫をしてきたので、問3-03は個人的に低い点となった。ただし開発目標が明確なテーマの競争的資金は、あとが続かなかったり、最初から出口での成果を担保するためのステージゲートで非常に不安感をともなう状況が続く。各セクターはそれなりにベストを尽くしているのであろうが、現場でのマネジメントの負担はたいへん重くなっている。(大学,第1G,工学,部長・教授等クラス,男性)

マネジメントを担当する人材の適切な選抜方法・育成に関して、さらなる検討が必要である。学長に関して、教員選挙は必ずしも最適な方法とは言えない。(大学,第1G,工学,部長・教授等クラス,男性)

大型予算の充実よりも、比較的中型、小型の予算をより多く確保し、より多くの研究者に配分した方が、優れた研究成果が生まれる確率が上昇するはず。そうした制度設計をしたほうがよいと思います。(大学,第1G,工学,部長・教授等クラス,男性)

毎年研究資金獲得や報告書作成のために費やされるエネルギーは膨大であり、著しく研究進展をさまたげている。また、外部資金においても、各プロジェクトにおいて成果重視の傾向が強く、深い基盤のもとにプロジェクトを進行することに支障がある(プロジェクト開始して1年後に中間評価が厳格に行われる場合もある)。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

研究分野による偏りが大きいと感じる。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

多くの研究者が科研費申請書を書くのに費やす時間と採択率の低さを鑑みた時、非常に多くの時間が無駄になっているように思う。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

予算書類は、毎回似たような内容を似たようなフォーマットで大量に書かされる。それだけで研究者は疲弊してしまう。同じ情報は二度と書かせない、などの工夫が必要なのではないか？また、仕方の無いことかもしれないが、研究費に余裕がある研究室がある一方、優れた研究成果を挙げていても研究費に切迫している研究室もあり、どうにかならないかと感じる。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

何を持って「優れた研究」とするのかによって大きく異なると思います。基礎研究として「優れた」内容に対して支援できているかといえ、そうではないように感じます。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

研究費マネジメントはずいぶん洗練されてきていると思う。イノベーションの源としての基礎研究の多様性は大事な視点だが、基礎研究はもっと広範囲にとらえないと危険だと思う。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

e-rad にエフォートや研究費が登録されているが、それがどのように活用されているのかが明らかではない。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 51 イノベーションにつながる研究成果を研究者に求めていることが、身近な成果追求とそれを満たすであろう研究課題への資金集中を招いていると考えられる。将来的なイノベーションの源となる研究開発成果を求めるのであれば、基礎研究への資金配分を増やすべきと思われる。(大学,第1G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 52 資金配分機関(JST・AMED・NEDO等)の方針に沿った提案が採択されるのは当然ですが、その方針そのものが誤っていた場合に何の責任も負っていないように感じます(そもそも誤っていたことを認めないのかもしれませんが)。また、類似テーマに対して配分機関が複数ある現在の状況は非効率的と言わざるを得ませんし、偏った資金配分を生み、さらにそれが研究費不正につながっているのではないかと感じます。(大学,第1G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 53 科研費審査などでは審査員の平均点が高いこと、つまり平均的に良い点がつくことが要求されるが、新規の研究では審査員の点数が上下に割れることも多いと思われる。この観点から、平均点での審査とは別の審査が存在しても良いように思います。例えば、米国のファンドでは、平均点は悪くとも、一部の審査員の評価が顕著に良ければ採択を決められるファンドなどもあります。(大学,第1G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 54 近年の科学技術関連の著名な賞の日本人の受賞に見られるように、基礎研究を重視した政策、特に公募型研究費システムの継続ならび充実が望ましい。(大学,第1G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 55 一見してアウトプットの分かりやすい基礎研究に対しては、さきがけやCRESTなどによって十分な資金が配分されていると思うが、基礎研究の多様性を確保する上で重要となる”より基礎的な研究”に対しては、科学研究費助成事業(科研費)しか期待できないのが現状です。より基礎的な研究に対して充実した資金配分が可能となる制度改革を強く望みます。(大学,第1G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 56 PD次第という感じがする。幅広い知識と知的好奇心を持ち、多様な分野の若手研究者を拾い上げるPD、PMがいれば、自分に近い身近な分野の研究者を中心に派閥をつくるPD、PMもいる。身近な例で両方を見た/経験したので、配分機関の問題やテーマの問題というよりは人選の問題のように感じる。(大学,第1G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 57 書類仕事ばかりが多くなり、まったく効果的でない。このままでは日本は滅ぶ。(大学,第1G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 58 大型研究費をもらっています。それはたいへんありがたいことですが、そのための事務手続きが煩雑で研究してる暇がないというもあります。(大学,第1G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 59 分野によって異なると思うが、自分の周辺分野に限って言えば比較的研究の自由度が高く、研究費取得もさほど困難ではない。所属機関ではきめ細やかな公募情報提供や、関係する事務処理作業等のサポート体制も充実しているため、研究プロジェクトの立ち上げやその資金調達・運営にかかる部分での負担や苦労はあまりない。(大学,第1G,農学,研究員・助教クラス,女性)
- 60 トランスレーショナルな研究に重点が移り、特定のグループのみが潤沢な資金を得ている印象がある。基礎研究についても大型の資金配分制度が必要である。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 61 まだ十分とは言えないがAMEDにより産学イノベーションに向けた研究誘導はうまくいっていると考えられる。再生やIPSに偏りすぎた面は正す必要があると思われるが実地応用をめざす研究を推進するという立場はこれからも貫いていく方針でよいのではないかと。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 62 海外に伍するだけの支援にならない。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 63 AMED の仕組みはイノベーションを阻害しているとしかしいようがない。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 64 欧米追従、硬直性、利権体質などを減らす方向に進めるべき。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 65 基礎研究の種類も色々あると思う。応用につながる基礎研究も重要だが、基礎研究はそれだけではない。211で書いた通り、純粋な基礎研究の価値は政府・マスコミ他によって理解されていないと思う。例えば、301の質問のように、研究者の内在的動機に基づく研究が現代的な要請にマッチする必要があると考えられている。これは、すでに純粋な基礎研究ではない。内在的動機を捻じ曲げないと研究費が取れない状況になっている。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 66 研究者が新たな課題に挑戦する体制は、以前よりも厳しくなっており、出口の見える課題や成果の期待される研究しか行なわれない状況になっている。そのため本当にイノベーションに繋がる研究が少なくなっている。AMEDは資金配分の方法が変わっただけで、NIHのような誰もが行かないような研究を支援していく体制となっていない。JSTやNEDOなどもテーマが限定されており、研究者が新たに提案するような研究を支援する体制ではない。確かにこれらによりテーマ選定された課題に対しては、ある程度の研究進展は期待できると考えているが、資金配分においてあまりにその傾向が強いように感じる。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 67 国として基礎研究にもっと十分に研究費を支援すべきで、採択率を60%くらいにまで、研究費は1件年額最低1000万円くらいまで上げてほしい。ピアレビューによる科研費審査が行われているが、5年のうち4年審査員となるなど負担が大きすぎ、毎年、正月もない。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 68 AMEDを典型として、研究費の配分が成果主義に偏り過ぎており、我が国の研究レベルの低下を強く懸念する。昨今、本邦のノーベル賞受賞者が増加しているが、彼らの研究成果は、基礎研究への研究費配分が十分だったバブル期(およびその直後)に生まれた成果であって、現在の研究成果ではない。我が国において、基礎研究の成果が実用化につながらないのは、アカデミアと産業界との連携の悪さや、研究成果を実用化につなげる制度設計の不備が主原因であるから、応用研究の研究費を増額することが問題解決につながるとは到底考えられない。それどころか、応用研究重視のために基礎研究の研究費が減額されるようでは、本邦の科学技術レベルは大きく低下することは必定である。社会構造や産業構造、制度設計を大きく改変しつつ、基礎研究費を増額していくことこそ、科学技術立国たる我が国の正しい方向性であると考えられる。(大学,第1G,保健,部長・教授等クラス,男性)

- 今の社会のニーズに対しての予算配分なのかもしれませんが、特定分野へ募集が偏っていると感じます。万遍なくとまで行かなくても、より広い分野への資金分配も必要かと思えます。申請書作成の負担は常々感じますが、税金などから資金をいただいている以上、ある程度はやむをえないかとも思っています。また、審査員の方が度々審査に当たっているのを見るにつけ、ある一定の任期はあるものの、その間本来の研究、教育にかけられる時間とエフォートがかなり圧縮されているであろうことは想像に難くありません。誰でもいいというわけではありませんが、審査員もより多くの人員で手分けできればよいと思います。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 69 大型研究費の分配には偏りが生じていると思われる。新学術領域研究の主旨はわかるが、結局このような研究費を獲得する研究者は同じ分野の研究において基盤研究費やAMED,NEDO等の研究費を取得しており、結果として、研究費の分配に偏りが生じてくるのではないか。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 70 申請書のフォーマットの頻繁な変更や、記載事項の増加は、研究者の負担を大きく増加させている。申請書は可能な限り統一すべき。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 71 一部の研究室に研究費が集中しすぎる傾向があると思います。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 72 資金配分機関(JST・AMED・NEDO等)の役割は大変重要ですので、審査能力を高めるために、JST・AMED・NEDO等が、より積極的に実績のある研究者を雇用するべきだと思います。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 73 近年、選択と集中の考え方の基、ある特定の分野に巨額の研究費が分配される傾向にあります。研究者独自の興味に基づく基盤研究を拡充させ、多分野の科学技術の裾野を広げるにより、独創性のある質の高い研究につながると考えます。(大学,第1G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 74 AMEDに移行しても、研究業績に関わらず同じ研究者が漫然と採択され、以前と同様に新進気鋭の若手研究者が参入しにくい状況が続いている。(大学,第1G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 75 基礎分野への配分が少ない。すでに成果を出した研究者にしか予算が分配されていない。そのように選ぶとどうしても年齢の高い研究者に多額の資金が配分されることになり、発表する雑誌のグレードは高いが、基礎研究としての新規性は少ないように感じる。(大学,第1G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 76 科研費の基盤研究Cの重複制限がきつすぎます。現状では基盤研究Cだけでは特に若手研究者が研究室を主宰するのは難しく、萌芽研究にも出せないで研究資金の獲得に苦慮しています。(基盤研究Bに出せば良いのではという考え方もありますが旧帝大の教授クラスも出す費目ですので若手が取得するのは難しいです)(大学,第1G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 77 政府の研究費に関する施策は継続性がなく、支援が短期的であり、長期的な基礎研究がしにくい。(大学,第1G,保健,研究員・助教クラス,女性)
- 78 競争的大型研究資金の場合、事業終了後の大学の負担が大きい。事業終了後の一定期間、フォローアップ経費等の激変緩和措置が必要だと思う。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 79 競争的外部資金の種類が過多となり、その応募やマネジメントに多大な時間と労力が使われている。もっと整理し、研究者の研究時間を確保することが重要であると考え。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 80 定額の中での基礎、応用の配分を考えるか、更なる増加を見越して考えるかでやり方が違うはず。後者で考え、前者で実行されている。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 81 研究費の多くがポストク雇用費に回されている現状では、研究費の継続性が重要だが、十分考慮されているとはいえない。せめてAward Yearを設定して開始時期を調整する様な配慮を考えていただきたい。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 82 基礎研究費への投資をさらに増やすべき。応用研究や開発研究に対する研究資金は潤沢とまでも言えないが、企業等の研究費を含めて考えるとある程度満たされていると考える。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 83 基礎研究なくして革新的なイノベーション創出はありえません。この意味で、研究者の自由な発想に基づく研究を支援する科学研究費の果たしている役割は大きいと思います。研究の多様性を確保し、その中から芽吹いた萌芽的研究を育て、社会実装につなげていく段階的な支援体制が必要です。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 84 イノベーション／応用研究と基盤的学術研究の配分比率が悪い。基盤的学術研究に25%を充てるべき。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 85 多様な研究費制度が整えられていることは理解しているが、それぞれの目的、評価基準(応用への展開可能性など)が十分には伝えられていないため、応募することすら諦めている研究者が大半ではないのか。また、応用指向性の高いプロジェクトの場合は、各省庁の研究機関ですら成し得ない先進的な研究開発を、短期間で達成することが求められる状況であり、逆に、大学における研究資力と時間を奪い取っている。少ない研究費で、大学教員、研究者を、ある意味で搾取している面がある。これは、資金提供側の企画の問題と、審査員の理解不足の問題であると感じている。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 86 基礎研究の担い手として博士後期課程学生はますます重要になってくると考える。彼らに、特別研究員並みの給与を支払い、研究に没頭する環境を構築することが、イノベーションの創出においても重要と考える。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 87 定額の中で基礎と応用の配分を考えるのと、増額の中で配分を考えるのでは考え方がまったく異なる。しかし現在は、後者で企画して、前者で実行されている。(大学,第2G,社長・学長等クラス,男性)
- 88

- 基礎研究に対する目利きというのは大変に難しいことである。助成額は小さくても、ある程度、幅広く配分する制度を維持することが大切であると思われる。運営費交付金、ついで科研費がこれに当たる。ところが、運営費交付金の目減りが続いており、目先のイノベーションを目標としない基礎研究は厳しい状況にあると思われる。10～50年先を考えた科学技術政策も大切である。また、ボランティアに近い形のピアレビューによる(助成金の)審査は、有力な研究者にとって負担になっており、大きな損失になっている可能性があるように思われる。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 99 政府の研究費の継続性の考慮は最近始まったばかりで定着しているとは言えない。私大の研究マネジメントとして独自の継続支援策をとっているものの、若手研究者の件費に関しては金の切れ目が縁の切れ目となっているのが現状である。基礎研究分野では特にこの傾向が強い。若手への継続的な支援という観点も考慮して上記301-308の制度設計を進めていただきたい。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 100 問303について:運営交付金の減少を止めないといけない。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 101 学術研究・基礎研究の予算といえども、年度ごとの管理となっている。ある程度、年度をまたがった運用もなされるようにはなっているが、3年程度ではなく、5-10年レベルでの運用の検討がこのまじいのではないか。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 102 科研費は総合的に見て、最も上手く機能している研究助成と思われる。良い仕組みはもっと評価されるべきで、予算規模の拡充を強く希望する。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 103 研究者相互のピアレビューによる科学研究費助成事業は、挑戦的で多様性のある基礎研究を推進する上で、効果的な事業になっていると思う。政府の大型の公募型研究費よりは、科学研究費助成の金額を増やした方が将来のイノベーションに繋がるような基礎研究が促進されるのではないか。政府主導の大型の公募型研究費は、短期での成果を求める傾向が強いので、既の実績のある研究にしか向いておらず、新たなイノベーションを生み出すような挑戦的な研究促進には貢献していない。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 104 科研費の審査の質は幅が広く、レベルに達していないような申請が採択されている一方、新しい成果が期待されるような申請が不採択となっており、日本内の仲間内の研究が多く採択されている気がする。採択されてもジャーナル論文につながらず、国際会議論文レベルでとどまっている成果が多く、資金を提供しても、国際的な評価が上がっていないように思える。申請書作成が上手な研究者に資金が集中しており、それは今でも改善はされていないので、資金の集中を排除すべきである。科研費の大型予算では研究進捗評価・事後評価が適切に行われているように思えるが、JSTのCRESTやさがしかけをはじめ他の研究支援では、領域総括の評価にもつながるので、大甘の評価が散見される。問題は、そのような曖昧な評価のために、大型研究費採択者がさらに別の大型研究費をさらっていくところである。要請研究・戦略研究は額が大きいので、評価も厳密にすべきである。領域総括の評価も含めて。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 105 分野別の配分を一度見直す必要があるのではないか。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 106 資金配分機関は資金の用途について、あまりにも形式的に用途の制限を行いつぎではないか。例えば、最近、ある補助金では、その補助金で雇用した技術支援員のオフィスの鍵(数千円)でさえ支払えなかった。もし、すすめている事業の目的にかなっているものであれば、合算使用なども含めてもっと柔軟に対応すべきである。公募型研究費の申請書では、特に業績リストなどはIT技術を駆使して、もっと手間を省ける。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 107 基礎研究の中には長い期間かかるものもあるが、そのような研究を(途中結果があまりでなくても)継続的にサポートできるしくみも検討できないだろうか。(大学,第2G,部長・教授等クラス,男性)
- 108 何が役に立つ研究であるかは後になってみないとわからないため、JSTなどが役に立つ研究を見分けられるという仮定そのものが間違っているのではないか?その金を科研費に回して各研究者の発想に任せて色々な方向に研究を進めさせるべきではないか?(大学,第2G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 109 この状況が非常に遅れている、乃至は混乱している。建前と現実が大きく遊離おり、科学研究費の非効果的運用となっている。これは欧米各国との最も大きな違いと考えられる。(大学,第2G,その他,男性)
- 110 イノベーションの掛け声の下で短期的な成果が優先され、長期的視点が不可欠な基礎研究への取組が軽視されている様に思われる。若手研究者の新しい着想が望まれるが、PDや任期付きのポストなど将来への不安から、挑戦することを避ける傾向がある。海外の研究機関への留学を望んでいても、将来への不安から渡航を躊躇うと言った意見を聞く。競争的資金の申請書や報告書の作成等の作業は増える一方で、この類いの負担軽減には至っていない。結果的に、論文発表件数や海外との共同研究の減少など研究力と教育力の低下になっている。(大学,第2G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 111 JST・AMED・NEDO等が採択した研究プロジェクトのなかに、未熟な開発研究を「基礎研究」と称したものが目につく。資金配分機関がめざす開発研究の進展に寄与しない弊害に加えて「基礎研究とは未熟な開発研究のことである」という誤解をこれから申請しようとする若手研究者に与える弊害が大きい。(大学,第2G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 112 CREST等の優れた研究成果を発展的につなげる十分な研究費が整備されていない。A-STEPの基盤研究発展型版のような研究費枠。(大学,第2G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 113 問3-01,02,03,04,05について、現代的な要請を押し付けられていて、基礎研究の多様性が奪われている。(大学,第2G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 114 大学等への交付金が減少し続ける中、研究遂行のためには外部資金が必須になっている。そのため、研究者は申請件数を可能な限り増やさざるを得ず、申請書を作成する側、審査の側、いずれの負担も大きくなっている。研究のための基盤的経費を拡充することで、比較的小規模な研究については必ずしも外部資金に頼る必要性を無くし、より研究に専念できる環境を望む。(大学,第2G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 106 研究者個人の興味による新規研究の創出のためには結果に左右されない資金提供も必要であると感じている。ただ、これに関して公的競争資金の充当は厳しいので基盤的経費の増額を考えて欲しい。(大学,第2G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 107 出口を求めることのない研究費,基礎研究への研究費を増やすべき。(大学,第2G,理学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 108 近年科学研究費に関しては重複申請が困難になって来ており,広く分配する観点からは非常に良いことだと思う反面,一つの研究課題に絞って申請する必要があるため,複数課題申請,単一課題受理といった制度が増えると良い(大学,第2G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 109 自分自身はJSTやNEDOといった機関から資金援助を受けたことはないが,同じ専攻内で資金援助を受けた研究者の状況を見ると,格段に成果が上がったようには見えなかった。色々な制約があって有効活用できなかったのかも知れないが,最近では科研費申請がオンライン化したので,申請書の作成は以前と比べて格段に負担が軽減したと思う。(大学,第2G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 110 日本の研究者は,世界的に見ると比較的独特的な研究を行っていると感じるが,個々の研究者でみると皆似通った研究を行っているように見える。つまり,他の国の研究とは異なるが,日本の他の研究者と同じような研究を行っていると感じている。これもまた若手研究者が指導者の研究をそのまま継続することが多いことの表れであろうと思う。イノベーションの源としての基礎研究の多様性は,したがって低いと感じる。指導者の研究を継続することに問題がないことは,挑戦的な研究を行うインセンティブも少ないことを意味する。実際に採用に際しては業績の新規性はさほど特別視されない。博打のような研究を行うと将来が危ぶまれるため,これは当然の結果と思われる。挑戦的な研究を行うインセンティブを与える政策が今後は望まれるだろう。(大学,第2G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 111 基礎研究においても,特定の分野に資金配分機関の資金や人材が集中しているように見受けられる。(大学,第2G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 112 イノベーションにつながる基礎研究の価値を,基礎研究の段階から正しく評価するのは非常に難しいことだと思います。この点で,価値が既に十分にひろく理解されている研究に重点的に投資することで研究を推進させることと,研究の多様性を確保することの間にはある種のトレードオフがあると思いますが,現在は前者に大きく傾いているように感じています。(大学,第2G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 113 申請報告フォーマット差異からくるの煩雑さ。特に,業績やエフオートは自動化してもらいたい(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 114 基礎研究に対する支援が少ない。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 115 研究費に採択されると,それに伴う事務作業等も増大する。リサーチアドミニストレータなどの育成が急務と考える。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 116 それぞれの研究費は猛烈に使いにくく,事務に忙殺されて研究の時間が制限される。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 117 最近,日本の研究者がノーベル賞を受賞した研究が実際に行われた時代と比較すると基礎研究に対する予算比率が大きく減少しているように感じる。公募型研究はミッションが明確であるため,分野が合わなければ申請できない場合も多く,研究期間が総じて短い傾向にあるので,目先の小さな成果のみを追求する傾向が強い。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 118 現状の研究者に審査を依頼する方式ではなく,継続的に審査を専門に行うことができる人材(学位持ち)を確保すべきである。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 119 本当の意味での目利きがない。一方でURAの導入により,戦略的に研究費獲得の動きが出てきたのは良いこと。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 120 JST-CRESTについては,最近募集分野の幅が狭まってきているように感じられます。まだ基礎研究の段階ですから,どのような可能性があるかわかりませんので,募集分野の,あるいは募集分野内での多様性の確保は重要であると考えます。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 121 競争的資金が増えたことや,公募制教員採用の普及などの近年の変動要因は,若手研究者が短期的に研究成果を得ることを要請し,将来的なイノベーション源としての基礎研究の多様性や継続性の阻害要因となってきたと考える。自律性や独立性を重んじた教育によって,個が確立した研究者の育成が喫緊の課題であり,これは単なる研究費マネジメントの改善で達成できず,各大学ごとに異なる教育・研究現場での問題点の抽出とカスタマイズした対策が必要であることを強調したい。なお,自由な研究・教育の実施は,実施者の方にも十分な成果を得る責任が伴うことは当然であることを申し添える。(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 122 競争的の不十分は充実してきているしかし小型のものをもっと整備する必要がある(大学,第2G,工学,部長・教授等クラス,女性)
- 123 研究費マネジメントは問題だらけである。研究目的の枠に当てはめて行う資金配分機関はもう少し減らしても良い。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 124 科研費の挑戦的研究(萌芽)を,チャレンジングなテーマのスタートアップと考えるのであれば,期間は2年間,研究費は300万円,連続採択不可と限定して,多くの研究者に資金が行き渡るようにし,現在の挑戦的研究(開拓)の1つ手前に,もう1つ挑戦的研究のレベルを設定し,そこには,挑戦的研究(萌芽)やその他萌芽的な研究の実施内容と今後の可能性を記述する欄を設けることで,審査資料としながら,挑戦的研究を段階的に支えていけばよいと考える。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 125 近年は日本人がノーベル賞を連続して受賞するなど、日本の基礎研究は進んでいるような印象を与える事例が続いているが、実情を見ると、科研費など比較的短期間に成果を求められる場合が多く、研究者は予算を獲得しやすい分野へと研究の手を広げざるを得ず、基礎研究というよりはむしろ応用研究を行っていることが多いと思われる。このような状況が続くと、日本国内でいわば「流行の研究分野」が出来上がるだけで、国際的に評価されるような真の基礎研究は行われなくなり、近い将来、日本からはノーベル賞受賞者などは出なくなるであろう。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 126 基礎研究ではポストドクを雇用できる額の研究費を獲得することが困難だと感じています。応用に直結しないような基礎研究についても人材を投資できる研究費があるとよいと思います。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 127 資金配分機関によるテーマ特化型の支援が効果が発揮するためには、特定領域に限らず基礎研究を広く支援する科研費や運営費がある程度確保されている状況が前提となる。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 128 公募型研究費では期間内にある程度の成果が求められることが多く、達成が容易である小さな目標を設定しがちになるように感じる。特に、若いほうが斬新なアイデアが出せることを思うと、まだ大きな成果が出ていない若手研究者であっても、長い時間をかけて大きな目標に取り組めるような枠組みがあると良い。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 129 成果がわかりやすいものへの資金が集中している。予算申請書は審査員が短時間で読みやすいものにするためになっている。「わかりやすいポンチ絵」が蔓延している。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 130 校費等の基礎的研究費が不十分であるため、外部資金を獲得するための応用研究への比重が大きくなっており、それができない研究者は十分な研究・教育ができない現状が進んでいる。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 131 研究費マネジメントに関して、事務手続きが煩雑な印象である。必要な書類および手続きが多すぎ、繁文縟礼な状態で本来の研究のために使用する時間を圧迫していると感じることがある。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 132 問3-05について、イノベーションに基礎研究が繋がるためには数十年の時間がかかる。数年程度で変わる政府が求める「現代的な要請」のために、学術研究の方針が左右されることは我が国の未来に有効なものになるとは考えられない。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 133 大型予算は一部有名研究大学,研究室に偏っている印象が強いです。(大学,第2G,工学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 134 イノベティブであるかどうかは結果でしか判断できず、これまで公的資金ではなく、自己資金による研究投資の成果が結果的にイノベーションにつながったことが多いのではないだろうか？公的資金の申請において、将来有望であるか否かは現状、事前の予備的な成果が求められており、若手(年齢ではなく研究費獲得実績が少ない)研究者にとっては大きな敷居となっている。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 135 学術研究,基礎研究は大部分が「今後研究が発展するのか現時点ではわからない」研究である。従って、あらゆる研究を進めること、「多様性のある投資」が今後の研究の発展のために重要となる。多様な研究を進めるためには、1. 科研費等の研究予算を増やすこと、2. 公募する研究の課題数を増やすこと、3. 多くの研究者を採択するようにする(同じ研究者への重複を出来るだけ避ける)こと4. 不要な申請を無理にさせない(研究職を科研費等の申請数で評価しない)ことが必要となると考えられる。1. が最も重要ではあるが、予算の増額が無理であっても、2. は大型予算を基盤B,C,若手A,Bなどに振り分けることで数を増やせる。また、3. 4. は制度の整備は必要であるが、予算に関わらず対応が可能と思われる。特に4. は予算の必要のない研究(数学,文学等ではそういった分野も有り得る)への不要な配分を防ぐために重要であると考えられる。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 136 多くのプロジェクト等でアドバイザー等が多く配置されているが、あまり有効な意見を頂くことは少なく削減を行った方が、双方にとっても利益になると思われる。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 137 最終的な出口のマネジメントが研究者に任されているのが現状の問題かと思います。研究成果を営利段階まで持って行く専門機関(ベンチャー請負機関のようなもの)を広く活躍させることも手かかと思えます。特に、イノベーションとするならば失敗も受入可能となる資金体制が必要ですが、日本では民間における体制は小さなもので有り、政府によるサポートが肝要かと思われま。予算を投入した場合、失敗したとしても、資金流動性の増進が可能ですので、資金流動性増加対策と考えて実施することもありかと思えます。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 138 「我が国の基礎研究について、国際的に突出した成果が十分に生み出されている」と思いますが、大学が独法化する前の研究環境によって、実を結んだわけであって、今のやり方だと、10年後には日本は科学先進国ではなくなるはず。実際に、この10年で日本の論文生産数は他国比べて減ってわけだから。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 139 研究費が採択されやすい研究,短期的に成果が出る研究をせざるを得ない状況にあり,基礎研究や挑戦的研究を遂行しづらい状況である。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 140 科研費のフォーマットはもうちょっと使いやすくないのか。ページの細かな制限,項目の細分化の中止をするだけでもだいぶ書きやすくなる。正直なところ民間助成金のほうがよっぽど柔軟で、そちらばかり応募してしまう。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 141 プロジェクト研究に資金が集中しすぎているために、自分で研究設定をすることのできる若手、中堅が減っている。早急に、対処しなければ大学運営が未熟な研究者によって行われる時代がすぐに訪れる。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 142 今の基礎研究は昔のよき時代の成果,今後の基礎研究は衰退すると思う(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,男性)

- 143 自分たちの様な理系の研究に関しては、随分運用させて頂いていると感じている。しかし、得た資金の使い方等には言い訳の出来ないことが多くあり(目的外使用や資金の吸い上げ等)なかなか問題は消化出来ていない。職業柄、文系の研究者の方と交流することも増えてきたが、文系の研究に関しては、圧倒的な資金不足に悩まされている様な状況は聞き受ける。文系研究に比べると金銭的には優遇されていると感じるが、実質のところは計り知れないと感じている。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,女性)
- 144 現状のシステムでは、採択される課題が「今流行っている研究」に大きく偏っていて、今後重要性が増すかもしれない研究や、成果が出るまでに10年単位で時間がかかる研究に、十分な予算が回っていないと感じる。この状態が続くようであれば、「今の流行」が終わるやいなや、我が国の科学技術は、他のアジアの国々などに後れをとることが危惧される。現在の研究費で、現在の研究からは飛躍した次の研究の予備的検討など、現在の研究以外の研究をすることは、厳密に言えば目的外使用となる。かつての運営交付金など、執行目的の自由度が高い研究費が配分されない現状では、現場でどれだけ革新的な発見が行われたとしても、そこから申請書を提出して、採択され、交付を待って、やっと研究を始められることになるため、即時性の高い研究を行うことがシステム上、困難であり、我が国の科学技術の発展を妨げていると思う。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,女性)
- 145 研究は、かならずしも現代的な要請に応える必要はないのではないのでしょうか。ノーベル賞をもらった研究者の方々も、長い間、同じ研究を続けて、投資してもらえたからこそ達成できたものもあると思います。実質的な利を得るための研究であれば、企業の研究所が担えるのではと思います。誰も注目してこなかった研究が、突然輝きを放つことがあるように、学術の世界では、全てが現代的な要請というゴールのある研究である必要はないと考えます。(大学,第2G,工学,研究員・助教クラス,女性)
- 146 すでに成果がでている研究者ばかりにお金が行っている。成果主義になっており、基礎的な研究、萌芽的な研究ができなくなっている。研究の底上げもできていないので、日本の基礎研究は衰退し続けることが危惧される。(大学,第2G,農学,社長・学長等クラス,男性)
- 147 本来基礎的な学術研究はその出口がはっきり明言できないところから始まる。そのような研究に対し、進捗の段階ごとに成果を確認しつつ発展させるステージゲート制が、真の研究発展に寄与するとはとても考えられない。資金配分機関(JST・AMED・NEDO等)は、基礎研究ではなく技術開発という観点での研究支援であり、ある意味、ある程度以上の開発段階は企業に移管してしまえるはずである。より広く科学技術の発展という長期的視点に立てば、ボトムアップ的に研究テーマを提言し展開できる科研費を増額し、採択率を上げることの方が急務である。(大学,第2G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 148 大型外部資金を獲得すると、マネジメントに忙殺され、PIは研究にほとんどタッチできなくなる。サポートスタッフの割り当てや、業務のスリム化、弾力化(自由裁量の拡大)が必要である。(大学,第2G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 149 研究者が外部資金に頼らざるをえず、外部資金に応募者が殺到するあるいは極度な選抜が学内で行われる状況を改善する必要がある。また、研究助成についても、産業を進展させる等経済的側面が強調されすぎている。いずれも学問の発展を大きく妨げている。(大学,第2G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 150 報告書および報告会は、論文の発表をもってかえることはできないでしょうか？ 報告書、各省庁同じようなことを何回も書かせられるので、この労力は、論文に向けられた方がより建設的な気がします。他省庁の研究費に多いのですが期間中に、報告書の提出も変な話です。期間が終わってからの報告書が普通と思います。(大学,第2G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 151 ここでいう基礎研究であるが、問いにこみじくも表れているように、イノベーションの源、イノベーションにつながるものを指している。基礎研究は、イノベーションとは異なる土俵にあるものだと思っており、だからこそ科学による社会の大きな変革をもたらされて来た。イノベーションの源となるものを社会実装研究の基礎を示しているものだと考えている。(大学,第2G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 152 308. 研究グラントによっては、相当面倒な報告書等を四半期ごとに書かせるものがある。事務作業ばかりで研究に使う時間を相当削られる。全ての報告書がそうであるが、同じ情報(特に論文リスト)を書かせるものは、フォーマットが異なる等で意味もなく面倒。文献や出版物はDOIなど共通する番号等があるのだから、いちいちテキストで書かせないで欲しい。今はないかもしれないが、科研費でもページ数や年号などを1枠1枠書かせるものがあつたように記憶している。報告書でなくても、似たようなものばかり作らされている。国内で統一できないものか。(大学,第2G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 153 基礎研究に対して、すぐに目に見える成果を求めべきではない。一見無駄に見えるような研究でも、今後、どこかでそれが役立つ時が来るはずである。少なくとも基礎研究とはそのようなものであるはずである。すぐに目に見える成果ばかりを求めてしまうと、研究のすそ野が小さくなり、先細りするであろう。山を高くしたければ、すそ野は大きくすべきである。(大学,第2G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 154 基礎研究を支援する研究費は科学研究費のみであり、その他の省庁が募集する研究費は実用化を前提としており、基礎研究にはつながりにくく、比較的大きな研究組織を組まなければ採択されにくい。研究分野も限られており選択と集中が見て取れる。これでは基礎研究の多様性が大きくなるはずがない。(大学,第2G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 155 前年成果に基づいて、研究費を前年年間5千万円以上、総額で獲得した研究者には、専属事務員(秘書兼)を配置するなどの、研究者の研究費マネジメント軽減の方策が必要だと思われる。でなければ、研究費のマネジメントに多大な時間を費やされて、研究に時間をさけない。また、大学等組織は、組織運営や教育を免除するなどの柔軟な対応が必要。(大学,第2G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 156 その時々々の社会情勢に応じて研究が公募されるのは理解できますが、その結果がどのように社会に還元されているのかわかりにくい。もちろん、ホームページ等に掲載されていますが、それがその後どうなったのかについて追跡すべきではないでしょうか。大きな研究の後に派生型の研究が続くことがあります。その研究費の規模は本当に必要なものに基づいて算出されているのかわかりにくい。(大学,第2G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 157 産業への応用に視点が置かれた研究が増えて喜ばしいとは思う一方で、研究開始の時点で直接応用に結びつけられない純粋な基礎研究への研究費支援は少なくなっているように感じる。また、流行の研究に資金が集まりやすく、基礎研究の多様性は減少している。国際的に評価される成果は多数得られているが、完全に独創的であると感ぜられる突出した成果は少ないのではないかと、基礎研究の裾野を広く保つような研究費の支援が必要であると考えている。(大学,第2G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 158 先にも書きましたが、最近業績が上がっていても昇進できない若手研究者が増加していると思います。最近では職階によらずプロジェクトの採択が決まっている例が多くなっているような気がしますので、この傾向が続けば良いと思っています。(大学,第2G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 159 多くの研究費が2~5年程度を研究期間として設定しており、その期間内での一定の成果が求められているが、研究の中には長期間の基礎研究の末に価値が見いだされるものも多くある。短期的な成果も重要だと思うが、もっと長期的な視点で研究できるような制度もある程度確保されないと、今後の日本の基礎研究は衰退していくと思う。(大学,第2G,農学,研究員・助教クラス,女性)
- 160 研究資金制度によって異なるが、PDは高名または影響力のある学者が就任するお飾りの要素が高く、POやPC (coordinator) は能力不足の方々が多感に感じる。(大学,第2G,保健,社長・学長等クラス,男性)
- 161 問3に関して、研究費の申請に極めて多くのエフォートを費やし、疲弊している時がある。申請者と評価者の負担を軽減するためにも、申請書の分量を減らすなどの工夫が必要ではないかと考えられる。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 162 研究者が独創的な研究に集中できる時間を多く確保できるよう、申請書の作成やレビューに要する時間が増えないような工夫をするべき。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 163 ノーベル賞のみならず我が国における研究活動の成功事例を精査すれば、「選択と集中」をはじめとする昨今の施策は早急な見直しが必要であることを理解できるのではないかと。生命科学を蝕む研究不正の問題も、この10年以上放置することを通じて、研究費マネジメントに大きな影響を与えている。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 164 電子申請になり申請者の負担はかなり軽減されて来ている。一方で申請件数が増えているから審査員の負担は増大している。しかるべく人数を増やして拘束時間に見合う報酬を与えるべき。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 165 目利きができる先生が少ないと思います。資金配分の役割を担う先生が自分の関連グループを優遇することが多いのが日本の現状ではないでしょうか。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 166 資金配分機関は、将来有望な研究開発テーマの発掘より過去の実績を重視している傾向があるように感じられます。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 167 昨今、誇張された内容の申請が高い評価を得やすい点に気になる。地道だが、有望な研究を発掘することが、JSPS以外の資金配分機関には求められる。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 168 革新性・挑戦性は、萌芽のうちは評価しにくく、科研費においても萌芽研究の要項が変わるなど、新しいアイデアを活かす機会が失われつつある。重要な研究に大きな予算を組むのも大事だが、革新性／挑戦性を求めるなら、萌芽のような取りやすい研究費を増やすことが求められるのではないかと。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 169 戦略的な資金配分について、戦略策定の時点で不公平感がある。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 170 研究費マネジメントについてはどのようなことが行われているか不明のため答えられない。学術研究・基礎研究の状況については、1つの(または偏った)価値観からの評価が重くなればなるほど、研究の多様性(未来の研究の種)は失われると考える。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 171 基礎研究分野は一般的には時間のかかる分野であると思われるが、任期制や基礎研究をないがしろにする傾向が時代の変化として見受けられ、十分に研究が行えない環境にあると思われる。基礎研究の土台がなくなると、何も生み出すことができなくなる可能性を秘めているので、基礎研究に対する評価を上げるべきである。(大学,第2G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 172 本調査アンケートも含めて、多くの時間を研究申請その他の手続きに費やしており、事務との連携により研究・教育に当てる時間のさらなる確保が必要である。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 173 全ての研究費申請書や報告書において、申請者・審査員の負担が大きいのが問題。書類作成に割かれる時間が大きい。マネジメント、書類作成、実験実施者などのすべてを一人ならびに少数で行う環境がほとんどなので、負担はかなり大きいと感じる。ステージゲート制は研究進捗には必要であるが、実質的負担がかなり大きく、再生医療研究などのどうしても時間の必要な研究は、深刻な状況になることが多い。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 174 科研費制度は、支援期間が短いという点を除いて非常に優れている。しかし新たに始まった政府からのテーマ指定研究では、審査員が不適切なケース(高名な研究者ではあるがその分野の専門家ではない)がしばしば見受けられる。そのせいか、内容ではなく研究者の名前で研究費が割り当てられているのではないかと邪推してしまうようなケースもある。日本の研究者は人数的にどうしても裾野が狭いので、テーマによっては海外から専門家を呼んで審査に入ってもらおうのが良いと思う。イノベーションについては、単に目利きの人材が政府側に不足していることが原因だと感じる。NIHなどのように、博士課程を修了した人が科学政策に関わってほしい。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 175 萌芽研究に対する支援を拡大して頂きたい。研究テーマとしての魅力・独自性・将来性のみで審査される公募型研究費が増えることを望む。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,女性)

- 176 日本での論文の質より、量が重要視されがちである傾向は絶対的に改革すべき点だと思います。例えば、impact factor 2点を毎年報告するのは良く、5年かけて20点1本は過小評価を受ける状況で、正当な評価ができていません。海外とほぼ真逆の絶対的差を感じるポイントです。これは、研究の面白さを傷つけ、世界に通用する人材育成の妨げや、将来性のある研究者が大きな成果を狙うのを躊躇する環境そのものです。大型研究費は、PD自身の関係者を中心に採択が偏る傾向がある印象ももっています。それ自体で、挑戦性、多様性に障害を来し、国際的競争力を下げているかと考えます。日本は、本来もっとleading的な研究力をもっているが、十分に発揮する能力を自ら損なっているように感じます。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,女性)
- 177 各種のトップダウン型の研究費は、分野・課題の選択や審査の方法等で問題が多い。科研費として、ボトムアップ型の研究費にすべきである。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 178 プレアワード、ポストアワードとも、研究費マネジメント業務の煩雑さにより研究者の時間が大きく持っていかれている状況があります。申請書作成の書式から、研究者ファーストではない。改善を強く希望します。また質の高い事務系リサーチアドミニストレーター、研究関連のサイエンティスト、生物統計学者、システムレビューの専門家、プロポーザルのライターなどを育成し、活用する仕組みを大学内に作ってほしいです。これらを全部やっていると本業の研究データの解析までなかなか行きつきません。(大学,第2G,保健,部長・教授等クラス,女性)
- 179 研究資金プログラム(文科科研)の制度は見直すべき点が多くあると思う。特に、新学術領域のような大型グループ研究は存在意義よりは弊害が多く、廃止を検討したほうがよいと思う。AMEDのPD PO,文科科研の政策に関わる先生方は、現役を引退した世代ばかりであり、世界の現状を把握した研究費配分や、研究費配分システムを構築しているとは思えない事が多い。経験に基づく知恵は必要だが、現状は弊害も多く、思い切って年齢制限(上限)を設けて良いのではないかと思う。特に今後、団塊の世代が研究費、政策決定に関与し続けることで、科学研究の健全な発展や、後進の育成に遅れが出る懸念がある。この世代が研究費を獲得している割合を集計するなど、客観的な検証が必要であり、弊害が出る前に対策を取るべきと思う。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,女性)
- 180 AMEDに応募しようと思うのですが、ちょうど良いテーマがなく、出せなかったことがありました。循環器疾患でも生活習慣などにかかわるものではなく、難病になるようなものもあるので、もう少し間口を広げていただくと可能性が広がる気がします。(大学,第2G,保健,研究員・助教クラス,女性)
- 181 プログラム・ディレクターのような目利き人材の充実が求められる。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 182 企業とすぐに直結しない基礎研究への研究費配分が減っていることが心配。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 183 科研費のおおくり化をさらに促進すべきである。産業界からの審査委員をもっと増やすべきである。また、産業界への予算配分を増加して、企業から大学への基礎研究の有効な共同研究を増加させるべきである。そして、新しい基礎研究の多様性を確保するため、挑戦・総合・融合・国際に拘る領域の予算を増加すべきである。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 184 研究業績のデータの信憑性の確認等を事前にチェックしていただく審査員の負担軽減につながると考えている。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 185 研究者の内在的動機に基づく研究(学術研究)は、必ずしも現代的な要請(挑戦性,総合性,融合性及び国際性)に十分に応えるように行われる必要はなく、むしろもっと自由な研究環境を如何に整備するかが重要と考えられる。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 186 真摯な研究者であればあるほど、「挑戦性」、「総合性」、「融合性」、「国際性」のある研究を行おうとしているが、実際には何を持って「現代的な要請に込めている」とするかが曖昧模糊であったり、いわゆる「社会的要請」が優位に立ち、むしろ研究者が「現代的な要請」に込めることを妨げているのが現実ではないだろうか。資金配分機関は「現代的な要請」を掲げているにも関わらず、社会的還元を求めすぎており、「現代的な要請」に込める学術研究に資金を配分する機関が実質上、存在していない。科学研究費は「現代的な要請」に込めるための研究費助成であるはずだが、申請の際に社会に与える影響を示す必要があり、採択における評価においても大きな割合を占めるように設計されており、矛盾をかかえている。「現代的な要請」に研究者全体が込めるためにも、より多くの研究者に一定額の研究費を配分するべきである。また、大学としての研究支援において、研究者の研究を支えるための資金が少なく、結果として研究者の研究時間を奪うことになっているため、間接的な研究費マネジメントが必要となっている。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 187 日本の基礎研究のレベルおよび内在的な能力は高いが、公的研究費は即戦力的なファンドが多く、このままでは基礎研究が衰退の危機にある。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 188 基礎研究に取り組む時間的余裕と金銭的余裕がなくなっていることに加え、独創的な発想力と研究推進の爆発力を持つ人材が減少している(小粒の研究者が多くなってきた)ため、基礎研究で他国を圧倒する成果を得る可能性は年々低くなってきているように思う。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 189 基礎研究がイノベーションに結びつくまでの谷間が深すぎる。研究費のマネジメントだけで解決出来る問題ではないと思う。(大学,第3G,社長・学長等クラス,男性)
- 190 実用化や応用の研究においては、上記の資金配分機関は、テーマの発掘や戦略的予算において十分に機能していると考えられるが、学術研究や純粋な基礎研究の推進には、あまり貢献しえないのではないかと危惧します。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 191 競争的研究費の獲得には短期的成果を明確に提示する必要があり、若手研究者はこの状況に過剰に対応した結果として、長期的視野に基づく研究を発想する余裕を失っているように感じる。一方、長期的視野に基づく研究提案については優劣の判断に困難があることから、研究者の自由な発想に基づく学術研究・基礎研究の実施には広く基盤的研究費が配分される必要があり、集中と多様性のバランスをとることに苦慮している。多様性に向けて、もう少し資金的余裕があればと感じている。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)

- 192 ・申請→評価→報告と、各書類作りが非常に負担ではないか。それを専用に扱う人(例:URA,非常勤職員)が必要となるが、現状では十分に配置されているとは言えない。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 193 応用研究に偏りつつある。もっと基礎研究が必要。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 194 基礎研究分野に対して、公募型研究費の獲得が難しい状況にある。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 195 イノベーションを生み出すには、独創的であるがリスクの高い研究テーマに対しても一定の割合で研究支援を行うことが必要であろう。そのためには、独創的な研究を見極める人材育成と確保が不可欠である。それを怠ると研究費マネジメントの成果をあげることができないと考えている。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 196 学術研究・基礎研究は、目標値が論文数に陥ることが多い。論文を投稿し刊行されることは、手段であり目標値ではないように考える。研究の目標や基礎研究により達成するビジョンがなく、基礎研究のための基礎研究の数が顕著になってきているのではないか。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 197 ポストアワードのマイクロマネジメント,期限付きポストの自転車操業で,研究リーダーが忙殺されます。一方で80対20の法則のように,蚊帳の外で傍観している生産性の低い職業的研究者がマジョリティとして存在し,大きな重しになっている。国立大学には経営の観点で欠落している,生産性が低い部門を縮小・解散する判断ができず,採算が取れない部分の存在が国立大学そのものを疲弊させ,凋落への道を突き進んでいる。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 198 資金配分機関は,世界の後追いではなく,世界をリードするグランドデザインを持って,日本の基礎研究の特徴を活かした応用展開や,将来の社会を見据えたニーズからのシーズ育成など,単発の研究領域ではなく,長期ビジョンを持って基礎研究を推進し,最終的には社会へ還元するまで繋げる継続性を構築することが望ましい。そのためには,抽象的ではなく,具体的かつ実効的なロードマップや将来ビジョンを形成する必要があると考える。また,資金配分機関は,長期ビジョンに応じた各研究領域に適切なPDやアドバイザーを選択する必要があると思われます。企業的なセンスも時には大切ですが,長期ビジョンの基礎研究にはマッチしない場合があると思います。また,領域の評価,PDやアドバイザーの評価を研究者からヒアリングするなどして,マネジメント側と研究実施者の双方の評価を行い,国費を使った研究に双方が責任を持つことが理想だと思います。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 199 熱心かつ真摯な大学教員は学術研究・基礎研究,研究費マネジメントを維持するために,日々の激務に追われている。しかしながら,一定の能力を身につけるには経験が不可欠であるため,優秀かつ真面目な若手教員(ここでは40代までを指す)に対してはサポートを行う必要がある。(大学,第3G,部長・教授等クラス,男性)
- 200 JST, AMED, NEDO等に関しては多様性は激減している。欧米が先行する新技術の開発に追いつくためのプログラムが多いと感じる。UKでは24時間,365日,いつでもweb上から科研費のような研究資金の申請が可能と聞く。採用も学術論文のように,評価者とやりとりして決定される。予算についても,自分の給与も含めて人件費への活用自由度が高い。博士院生や若手研究者,および研究補助員・技術補助員の継続的雇用を想定した研究費マネジメントが重要だが,現状はかなり厳しい。(大学,第3G,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 201 国際的に通じる研究を強化するためには,海外研究職歴を優遇した助成金の推進を望む。また現在,海外で研究を行っている日本人との共同研究も積極的に推進してほしい。基本的に若い頃に長期海外を経験した研究者は,日本の大学機関に戻れなかったり,同年齢より遅れた立場になっており,比較的冷遇の状態となっている。そのため,海外に在留している研究者もいるという現状。そのマイナス面を埋めるために,積極的な海外経験研究者の優遇を望む。優遇できれば,新たな若手研究者の長期海外研究の拡充にもつながると考える。(大学,第3G,研究員・助教クラス,男性)
- 202 大型プロジェクトの採択に関し,資金配分機関の間での調整が弱いと思われる。重複する研究内容に対する設備費・人件費の申請などをチェックする体制が必要ではないか。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 203 我が国は最近,ノーベル賞の受賞頻度が高まり,我が国の研究費マネジメントに一定の正当性が認められてきたかに思われるが,これまで受賞した研究はおそらく10~20年あるいはそれ以前のマネジメントの下で研究を続けてきた方々の成果とも言える。最近の研究費配分法として,当初よりイノベーションをねらう一極集中型が増額され,広く研究発掘をねらう萌芽研究(挑戦的研究-萌芽)は減額されていると思われる。今年度の科研費申請より,萌芽型申請のスタイルが増えたことは評価できる。しかし一方で従来の萌芽研究(挑戦的研究-萌芽)の規模が縮小され,挑戦的研究-開拓への申請は基盤AやSの採択者の重複申請は許されるが,基盤BやCとの重複申請はできないものとなっている。富める研究者にのみ大型の挑戦的研究が許されることになった。多様な研究者の多様な独創性を開花させるためには,挑戦的研究-開拓の自由な申請が認められるべきである。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 204 プロジェクト志向の研究に多大な研究費を投資しすぎている。もっと目標をしばらない,基礎的な学術・個人研究費を拡充すべきである。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 205 科研費では,総合性,融合性,学際性を重視した研究に特化した新学術領域研究があるが,専門分野での先進的な研究に対する公募研究は共通の基盤研究・挑戦的萌芽研究しかなかった。融合・学際研究はあつていいが,そればかり推進し,専門分野での先進研究に対する研究予算が相対的に減少することは問題である。また,JST, AMED, NEDOなど,短期的視点で「役に立つ」研究に大きな予算が与えられていて,真に独創的・基礎的な研究には少ないので,研究者は「役に立つ」研究をやらざるを得ず,我が国の独創的サイエンスの進展を阻害している。これでは現役世代からノーベル賞は期待できない。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 206 大学が戦略的に外部資金を調達させているような現実において,直益的でない将来を見据えた基礎研究は,どうしても疎かにされてしまう。個々の大学の工夫では,基礎研究を推進するのは不可能な状況にある。国全体として余裕を持った援助がないと,衰退するばかりである。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 207 相変わらず,予算の配分は実績をあげた人が中心で,これから実績をあげそうな人には予算がほとんど届いていない。そのため,リスクを恐れず,将来化けそうな研究の芽を育てている研究者が激減している。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)

- 208 JSTもNEDOもその他の大型競争的資金も配分の仕方(選定)やテーマ設定が不透明であり、一度政府が徹底調査すべきだと思う。いずれにせよ実用化、製品化、応用研究に偏りすぎていて、しかも短期間で端的な成果を求めるあまり、不正(研究不正や不正経理など)がなくなるのと思う。挑戦的な研究を真に期待するのであれば、長い目で継続的に支援し、すべての研究費が必ずしも想定された期間内に成果につながらないことを認めなければ、真の研究は無理であろう。例えば科研費のトップに君臨する特別推進研究を受給して、ノーベル賞を取った研究者はいないと言われている。よく言われる日本人の評価下手も大きな一因であろうが。(大学,第3G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 209 JST・AMEDとNEDOの違いは?学振とJST・AMEDの違いは?(大学,第3G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 210 基礎研究の成果は世界的に十分にあげられている。ただしこれは過去の積み重ねが今生きているに過ぎない。すでに蓄積部分は使い果たしたのが実情と思う。今後、「イノベーションにつながった基礎研究」と呼ばれるものはなくなり、例えばノーベル賞の受賞者が何年も出ない、という時代がすぐそこに来ている。そもそも「画期的だがリスクが高い」という概念が基礎研究を発展させるものではない。新しい研究を発想するにはあまりに重い負担が色々な面から覆いかぶさってきている環境の打破が必要で、予算の額の問題ではない。(大学,第3G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 211 短期的な成果を追い求める競争的資金では、時間のかかる基礎研究はほとんど不可能であることはすでに基礎研究に従事している研究者の間では十分共有されている事実だと思われまます。(大学,第3G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 212 基礎研究でも、その成果が目に見える形で「役に立つ」ことを期待されるような申請書を書くことが求められ、かつその項目が審査の対象となっており、真の基礎研究を育むような状況でない。(大学,第3G,理学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 213 研究者は、現代的な要請に応える(ように見える)ために課題をひねり出している、と言えます。それは必要に迫られてのことであり、実際は斬新な課題に挑戦しているわけではない、というのが個人的な印象です。(大学,第3G,理学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 214 応用志向の研究、著名グループによる研究に大型予算がつきやすく、基礎研究が軽視されている。(大学,第3G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 215 一部の研究者に研究費が集中しているのは問題。研究内容ではなく派閥で研究費の割り当てが決まっているように見える。(大学,第3G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 216 学術研究・基礎研究は研究成果そのものを評価することが比較的難しい上に、十分な成果を上げるのに時間がかかるため、十分に研究費を獲得して継続していくことが難しくなっているように強く感じる。(大学,第3G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 217 先に述べた若手の不十分な研究環境にも関わらず、最先端の課題に果敢に取り組んでいる若手は多数存在し、顕著な成果が生み出されていると考えます。しかしながら、概して「国際的に話題になっている分野・トピック」へ集中する傾向が感じられ、10年、20年かけて将来芽が出る独自性の強い研究が十分に育っているかは、やや心許なく感じます。(なぜなら、「目立つ」成果を出さなければ若手は職を維持しにくい状況が長らく続いているからです。)若手世代の一見した「華々しさ」は、こうした話題になりやすい(=将来の職に繋がりがやすい)トピックへの傾斜の結果としてそう見えているだけかもしれませんが、十分な多様性が確保されているかどうかは断言できません。私が周囲で見聞している範囲では、既に成果を積んだ優秀な若手〜中堅研究者には継続的に科研費が配分されており、研究を十分補助していると考えます。従って科研費は、今後も大筋現在の規模・方式で存在する事が望ましいと考えます。(大学,第3G,理学,研究員・助教クラス,男性)
- 218 各大学や研究機関からの研究費の支給が激減した結果、公募型の研究費に応募が集中し、研究費がとりづらくなりつつあるように思う。また、どのような研究やアイデアがイノベーションにつながるかは最初の段階ではわからないため、そのような基礎研究の成長を促すためには、広く研究費を配分する必要がある。そのような政策が維持されてきたことにより、近年のノーベル賞受賞につながってきた。一方で、これまで述べたような、研究人材の枯渇、研究費の枯渇、研究時間の減少により、今後はイノベーションに繋がるような成果が減少するようになると思われる。(大学,第3G,理学,研究員・助教クラス,女性)
- 219 ベースの研究費を確保したうえで、競争的資金であってほしい。全体額が同じで、ベースを減らして競争的の方に持っていくのは長い目でみて得策とは思えない。研究資金を取ることが良い研究のような感覚が生まれているように思える。(大学,第3G,工学,社長・学長等クラス,男性)
- 220 研究者個人々の業績評価を基準とした研究費配分の制度導入を望む。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 221 科研費の充実(特に大型ではない種目)が、基礎研究のすそ野を広げるために最も重要と考える。開発・応用型の予算に関しても、大型研究予算獲得後は、比較的長期のフォローアップ(予算規模は小さくてもよい)が、研究効率を高めるものと考ええる。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 222 多様性の確保を維持するのが戦略的に重要です。近隣諸国のような新興国にはない日本の良さがここにあります。したがって、研究の多様性の確保に、研究者の裁量で使える基盤教育研究費が重要だと思います。ただし、大学にばらまくと真っ先に削るのと研究教育に関心が低い先生方もいるので、研究成果のアウトプットや大学院生の数をもとに、研究者に直接交付したと思います。研究費配分については、次世代の戦力となる大学院生の教育支援の視点が抜けていると思います。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 223 問3-8について、公募型予算に採択されればされるほど、事務処理が予算ごとに違っていて大変複雑となると同時に、(ほとんど同様な)書類を書いたり、(ほとんど同様な)研究会議に出席せねばならず、本来の研究をする時間が削られていく。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)

- 224 制度の問題ではないが、法人化と同時に進行した「検索」の進化、すなわち研究のグローバル化が学術研究の様相を変えた。「ランキング」によって研究分野が動いてゆくの、長期的にみるとオリジナリティーは欠如してゆく。地方大学で以前は当たり前だったガラパゴス的な研究は絶滅するだろう。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 225 優れた研究者への研究費の集中が不合理かどうかは判断できないが、集まりすぎている。イノベーションやオリジナルなアイデアの生産性を高めるためには、過去のごとく、広く浅く継続的な研究費の獲得が可能なる仕組みも必要と言える。(大学,第3G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 226 所属機関にもマネジメントを担当する人員や環境が配置・設置されているが、研究費のマッチング(紹介)が主であるように感じており、基礎研究との結びつきまでは、お互いに考慮していないと思います。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 227 ・(1)若手から中堅世代がもうワンステップ上がるための、(2)基礎研究が応用へ一歩踏み出すための、資金的サポートがあると良いと感じる。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 228 近頃は応用研究が割割的に増えている印象がある。また最近では研究費についても多様なテーマが取り上げられていることも感じられるが、研究費マネジメントは研究時間マネジメントと一緒に初めて効果を発揮する。研究費のみでは決して良い研究が出来るわけではなく、必ず研究時間も必須となるため、政府系の研究費についてはその点も考慮した研究プロジェクト創設と推進をお願いしたい。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 229 研究は成果が出るかわからないから研究なのであって、ある程度の質を満たしている以上のことは誰にも確たる予測はできない。薄く広く採択すべきではないか。予算総額が限られているというのであれば、投下予算に対し設備が必要などで成果が相対的に出にくい分野が優先度が下がることも、国策としてやむを得ない。競争的研究費については、連続的に研究費を獲得できる仕組みを整備すべき。重複応募が可能な研究費を廃し、その分で先行して前年度重複応募を可能にしてはどうか。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 230 一部の研究者に莫大な研究費が投入されているが、それに見合うだけの成果が出ているとは全く思えない。基礎的あるいは挑戦的な研究をしたいと熱望している、コンスタントに業績を出している研究者(若手とかは関係なく)に満遍なく研究費が行き渡るようにして欲しい。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 231 政府のトップダウン式の研究経費割合が膨張している。研究者の潜在的能力に信用を置き、基盤的研究費(科研費)の割合をもっと増やすべき。科研費成果を発展させる形で開発型の研究(領域)を募集することで科研費の意義が深化すると思われる。RAはトップダウン式の予算申請の援助に傾注し過ぎる傾向にある。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 232 大学での昇進は学術論文の執筆が必須であり、外部資金を多く取得しても昇進を左右することはない。しかし、研究を継続するには研究費が必要であり、研究費の取得が容易な共同研究もせざるを得ない。そのジレンマをいつも感じている。研究を推進できる外部資金を容易に取得できるようになれば、場つなぎの研究をすることなく本来の研究に専念できると思う。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 233 予算申請で提案した研究について、その達成度がほとんど評価されていないのは大きな問題だと考える。研究計画の終了後、数年間の追跡調査を行うなどして、少なくとも申請書に記載された研究内容を遂行している形跡(論文・学会発表など)が全くない場合、次の予算獲得の際にペナルティを与える制度が必要だと考える。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 234 JSTなど一部の機関の公募研究では、社会的なニーズをくみ取って新しい研究課題の公募を行い、チャレンジしている印象はうける。ただ、同じメンバーが、繰り返し研究費を採択している(代表者や申請する枠を変えてグループで予算を確保する)印象もある。社会に求められる研究課題の抽出が、不足していると思う。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 235 現在では予算獲得が研究者にとっての最優先課題であることから、研究課題を設定するうえで「論文になるかどうか?」と、「応用に直結するか?」の2項目が重要視される。そのため、不可能と思われるような挑戦的課題や、一見何の役に立たないような基礎的課題は忌避される。特に若手研究者にとって予算獲得実績は研究内容よりも分野外の評価委員に理解されやすいため、如何に獲得しやすい研究課題を選択できるかが若手にとっての研究能力とみなされる風潮がある。以上のように研究費に縛られた状況で自由な発想で挑戦的・基盤的研究課題に取り組もうとすることは実績の無い若手研究者にとって自殺行為である。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 236 基礎研究をとりまく状況は厳しいと感じている。応用可能かどうかが最重視されているように思う。最近では学生でも研究テーマについて説明すると「それは何に役立つのですか?」という質問をする。これも重要な視点であるが、それよりも学問として面白い、楽しいといったことを感じられるような視点ももてるような研究、それをどうどうと話すことができ、を支援するようなシステムになってほしいと思う。(大学,第3G,工学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 237 最近は何の資金でも結果や社会実装が求められ、学問の発展と社会還元との切り分けがされていない。基礎研究をおろそかにする体制はいずれ応用研究のイノベーションの枯渇につながり、ノーベル賞受賞者が出ていない韓国と同じ末路になることが危惧される。(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 238 そもそも学術研究に対する予算がほとんど無い(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 239 現在、基盤研究費が非常に少ないため(自分の場合、年間10万円程度)、科研費その他の競争的基金が無ければ、何もできない状況になります。公募的研究費は応募しても通るかわからないので、安全策をとると「応募できそうな公募的研究費には片っ端から応募する」という戦略になりますが、これはとても無駄です。(1)各々の公募的研究費に対して違う文章を作る必要があるため、数か月は書類作成だけでつぶれます。(2)「公募研究費が0だと何もできないから応募する」という動機なので、2つ以上通ってしまうと予算が余ります(今年度私はこの状況です)。「公募基金に通らなかった場合に何もできなくなる」というのが本質的な問題なので「何も応募しなくても最低限の研究は可能である。それ以上が必要ならば応募する」という形を目指してほしいです。(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)

- 240 研究費が一部の研究者に過度に集中していることが危惧される(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 私の分野においては、5年~10年のスパンで国際的に「流行」する研究対象が有り、いわゆる現代的な要請とは、こうした「誰もが目指している」研究が対象になりやすい。一方、私自身はこうした「流行」にはあまり関心がなく、一定の関連性は保ちつつも(そうしないと研究費が獲得できない)、自身のこれまでの研究の経緯・論理的整合性や、20年先のビジョンで研究を企画している。現代的な要請に答える研究に重点的に支援する制度は、社会的に説明しやすく、また正論でもあるが、同時に将来的に開花するであろう基礎研究分野への支援も考えて欲しい。(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 241
- 242 将来有望な研究開発テーマの発掘や戦略的な資金配分を専断的に実施する機関や組織体制が必要と思われます。研究開発テーマの評価が研究実績の評価に置き換わっているケースが多くなりつつあるように感じます。(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 243 日本が近年コンスタントにノーベル賞受賞者を輩出している点からすると、日本の基礎研究が評価され、イノベーションに十分につながっていると考えます。しかし、この成果の多くは、研究費が今より潤沢であったと言われる2、30年前に発表された成果に対して評価されたものであり、逆に今から2、30年後には鳴かず飛ばずになる気がしてなりません。(大学,第3G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 244 科研費の基盤研究の実施期間を最長10年(5年目に中間審査など)にすれば、独創的な研究の発展を継続的に支援できると思う。(大学,第3G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 245 各省庁などの公的予算の方向性が同じで有り、分野による棲み分けがなくなりつつあるように感じる。(大学,第3G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 246 科学研究費の制度は、我が国の研究力を維持する上で不可欠であり、審査も適切に行われていると思う。今後も、それぞれの専門分野を尊重した審査・配分を維持し、さらなる拡充が行われることを強く願っている。我が国の基礎研究の多様性や能力は高く、その結果がノーベル賞などに反映されていると思う。しかしながら、これらの優れた成果は、我が国において、かつて基礎研究に対して研究費が十分に配分されていた時代の結果で有り、現在のように応用研究や短期に成果を求められる研究のみが優遇されている状態が続くと、我が国の基礎研究力の低下が起ることと思う。(大学,第3G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 247 極めて優れたと認識された研究を除き、研究の継続性はあまり保たれていない様に思われる。評価は厳正に行われる必要があるが、申請手続きはできるだけ無駄を省いて負担を取り除く事が肝要と思われる。1つのアイデアだが、若手向けには初めて応募する研究者は全て採用し、研究業績に応じて以後の助成を決定するというような研究費制度を新設しても良いかと考える。(大学,第3G,農学,部長・教授等クラス,女性)
- 248 一定研究者への予算の集中を緩和していただきたい。科研費の採点は比較的平等であるといわれるが、それでも有名な先生に低い点をつけにくく、結果として有力大学に集中する傾向にある。多くのプロジェクトで仲間内研究者を評価委員に指名し、自分がプロジェクト実施者になったときのために、評価が甘くなる事例も多い。成功をおさめていないプロジェクトの継続やテーマ替えによる継続も多い。その成果をだすのに本当に1億円必要か、よく吟味していただきたい。同じ1億円を500万円20人に支給した方が研究の多様性は保てることもある。本当に優れた研究に対しては、しっかり投資すればよい。(大学,第3G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 249 国としての研究成果を挙げるには、現在成果が上がっている研究だけでなく、より多くの研究に投資することが必要。また、研究資金だけでなく、研究者が研究に取り組める環境作りが重要。(大学,第3G,農学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 250 科研費について、若手研究の取得回数制限(2回)というのは辛い。また、基盤研究CとBの間にもうワンクッションの値段設定の種目があると助かる。また、若手こそ萌芽的な研究を発想・実行できると思うので、若手向け萌芽種目があつたほうがいいのではないかと。(大学,第3G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 251 研究業績の少ない若手研究者向けの支援や、博打的な要素の強い研究に対する支援も強化してほしい。(大学,第3G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 252 学生が内発的な研究を行える資金の確保が必須。(大学,第3G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 253 すぐに役立つ研究に対して、研究費がつきやすくなるのはある意味、仕方の無いことかもしれませんが、その代わり、学術研究・基礎研究は公的機関がしっかりとバックアップする体制が必要かと思えます。例えば、国民に伝わりやすい内容の研究は、クラウドファンディング型公募を用意して、そこで浮いた予算に関しては、国民に伝わりにくい学術研究・基礎研究(特に研究者個人の興味や好奇心から派生した内容)に対して、科研費や運営交付金などの形でバックアップし、多様性を確保する、といった体制です。(大学,第3G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 254 文部科研費は本邦の多様な基礎研究費に相当貢献していると思えますし、そのシステムも年々改善されていると思えます。また開発研究(AMEDなど)もかなり改善されており、公正な評価がだんだん進んでいると思えます。ただ一番の問題は、AMED大型研究費にしる期間が短い(3年)ということです。これでは基盤となる人材もグラントで雇用できませんし、常に研究費申請書や短絡的評価に煩わされます。中間評価は適宜必要ですが、採択期間は大型研究ならAMEDも5年間を基本とすべきです。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 255 すでに確立した研究分野に資金が集中し、今後、発展する可能性のある基礎研究や萌芽的研究への資金が減ってきているのが心配である。挑戦的萌芽研究(開拓)などいい取り組みであると思うが、若手中堅が出す可能性のある基盤B等と重複制限がかかっているため、両方おちるリスクを考えると申請するのが難しい。逆に基盤Aとは重複制限がかかっていないのは疑問である。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)

- 特にAMEDの出口指向型の方針は危なさを感じます。このままの形ですと少なくともAMED研究では壊滅的な結果になるように危惧しています。もし企業連携でグラントをつけるのであれば、公募形式ではなく、常に受け付けて、予算をつけるかどうか審議するようなシステムの方がまだましです。いつ出るかわからない、どういふマイルストーンかも解らない公募計画に踊らされています。AMEDこそマイルストーンをしっかりと持つべきだと思います。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- かつてのiPS細胞の研究は、選択と集中を行ってその対象から生まれたのではなく、裾野から生まれた研究である。この例からわかるように、次世代の革新的な研究や技術を育てるためには、研究費配分における行き過ぎた選択と集中はやめたほうが良い。研究の裾野を広げ、広く支援する必要があると考える。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- GDP世界3位の大国ではありますが、国が主導する研究費配分は極めてお粗末です。アメリカのNIHグラントは基本的に一種類ですが、一件とればスタッフの雇用から試薬代など、複数のプロジェクトを執行するのに十分です。我が国のように多数の小型研究費をとるのは、研究においては極めて非効率です。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 資金配分機関間で重複があり、効率が悪い面がある。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 短期的目標が中心となり基礎研究が育ちにくい(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 基礎研究をより重視した方策が望まれる(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 研究の多様性を担保するために、高額の研究費を減らして、多くの研究者に必要な最低限の研究費が充填できるように採択率を上げる必要がある。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- JST/AMED/NEDOなどはもっぱら出口志向で、実用化の道筋が見えないと門前払いというのが一般の理解です。また、継続的な支援もあるようですが、第三者的にみると途中で落とすに落とせなくて情性で支援をされているように思います。評価は難しいのですが、華々しく始まったプロジェクトで、最終はひっそりと終わられるものに関して、POなどはきちんと責任をとられておられるのでしょうか？そのくらいの覚悟はお持ちいただきたいと、なかなか採択されないものとしては思っております。(大学,第3G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 問3-03,05のイノベーションの意味がよくわかりません。社会的な制度の革新のことを指しているのでしょうか？新技術のことでしょうか？定義をはっきりさせて質問してください。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 一定の成果を出している研究者には、コンスタントに研究費が行き渡るような仕組みを作った方がよいのではないかと思います。たとえば、これまで基盤Bを獲得してきた研究者が、成果が出てきたから基盤Aに挑戦したら採択されず、研究費がゼロになるケースがあります。これは研究費獲得を「博打(バクチ)」にしてしまいます。そうではなく、一定の成果が出ている研究者には最低限の研究費が保証されるようにし、さらに上の研究費が申請できるようにすべきではないかということです。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 脚光を浴びている分野や先の見える(結果がほぼ間違いなく期待される)研究には十分に分配されていると思われるが、まだ脚光を浴びていない分野、先が見えない分野、特に基礎研究分野の研究資金が先細りしているのではないかと感じる。そのため、挑戦的な研究をするにも、先ず脚光を浴びているか、結果がほぼ間違いなく期待される研究を元に競争的資金を獲得しなければならない状況であり、それがかえって挑戦的でリスクの高い研究を進めることの壁になっているようにも思える。つまり、十分に実績があり、資金の豊富な研究者のみが挑戦的な研究を進めることが可能であるくらいがあり、結果、研究テーマが集約されて研究の多様性が少なくなっていると感じる。重点化の弊害？(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 研究者が新たな課題を積極的に探索し、挑戦することを書くことと科研費は獲得しにくい。ある程度見通しのある研究でないと獲得できないので、独創的な研究では立ち上げの予算が必要となる。予算をゲットするまでが大変である。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- トップダウン方式による公募型研究では、かなり偏ったテーマ設定のために応募数が少ない場合もあり、資金配分機関の役割に疑問が持たれる場合がある。また、現段階で判断する「将来有望な研究開発テーマ」のサポートは、民間からの資金提供が受けやすいと思われるので、政府はそのパイプ役に努めればよいのではないかと？一方で、役に立つかわからない研究のサポートこそが政府特有の役目であり、大型資金を集中的に配分するよりも広く浅くサポートすることが重要と考えられる。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 「分からない」にはつなげなかったが、設問文の「イノベーション」というカタカナ言葉に曖昧さを感じる。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- トップダウン形式のAMEDの研究課題とその採択課題を見ると、やはり、文科省の研究分類の中で応用研究にあたる部門への支援が少ないように感じます。基礎研究には比較的分厚なお金がついていると思いますが、そこで出てきたシーズに対して社会還元を目指す研究に対しては、AMEDでも研究費が取れていない様に感じます。いわゆる死の谷に責任をもつ研究者が少ないこと(これは先端研究ではないのでインパクトファクターが高い雑誌では通らない事も関係していると思われます)、応用研究に対しては科研費がとりづらいこと、出口がしっかり見えているものでないとお金がつかないことなどが重なり、社会還元に必要な応用研究に対する研究力が日本は足りないと感じます。国の対策を是非お願いしたいと願っております！(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 年度の切れ目が研究費の切れ目となることから、次年度の予算が不透明なまま計画を立てる、という状況になっています。そのため、研究費採択の確率が決して高くなく、次年度の予算確保の必要性から、過剰な研究費への応募につながっています。基盤研究費の拡充によって軽減できると思います。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 公募型研究費が上手く機能しているとはあまり思いません。実質、若手に対しては、その若手研究者が独立した(する)時の環境整備の補助となっている場合が多いと感じます。ある特定の人に多額の研究費を投入するよりは、多くの人にある程度行き渡るような基盤的研究費を増額した方が意味があるのではないかと感じます。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 273 将来を考えた時に、基礎研究への十分な研究費分配が必要である。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 274 現在の科研費審査は実績(ネームバリューなど)が伴わないと挑戦的研究は採択されないように思います。研究費が取れないと大変なので、皆無難な申請書になるか研究費が潤沢な間に裏テーマとして行っています。研究者が片手間に点を付てるので形式的にならざるを得ません。あと過去の研究費獲得額だけが評価され、額に見合った成果を出したかどうかの評価が甘いように思います。基礎研究をやる場合実用化までは考えずにやる人が多いので、目利きの人がいるとよいと思いますが、それによって成果発表が長期に制限されるのは基礎研究者にとって不都合なので、特許申請の仕組み自体を改善した方がよいと思います。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 275 短期間で成果を出さなければならないような募集が多く、そのような募集に合わせたテーマでなければ研究費が取得できない状況があり、中途半端な研究になっていると実感している。本当に自分が行いたい研究で申請ができるのは、もっと業績を出さなければならないと痛感しており、業績の積み上げが十分ではない私のような研究者にとっては、本来行いたくない結果がすぐに出るような研究で申請書を作成する必要があり、毎年頭を悩ませている。(大学,第3G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 276 基礎研究とは言いつつも、研究計画書では研究成果によって何が見込まれるか記述する必要があり、結局何に利用できるかが審査の対象になる。純粋に科学的な好奇心で行う研究がもっと研究費を取りやすくなるようにして欲しい。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 277 他の先生と話していても、より内在的動機に基づく研究を行いたいのが、予算が無くなるとは研究どころではなくなくなってしまったため、仕方なく今までの研究を継続しているという話もよく聞く。よって、学術研究・基礎研究に対して科研費の寄与が今以上に必要で、かつあるべきであると思う。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 278 近年の傾向として、資金配分機関は比較的成果の分かりやすい実用化研究などに比重を置いている様に見える。しかしながら、国際的な競争力を確保するためには、恒常的に優れた基礎研究を生み出す素地を固めることが重要である。適切な評価の元、チャレンジングな基礎研究を継続性を保ちつつ支援する体制づくりが重要である。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 279 科研費の当落は研究提案の挑戦性というよりは、実績に依存する面が大きいかと感じます。またその実績も、はやりの研究を行うことが有名雑誌に掲載されるうえで有利に働き、結果として多様な挑戦性が失われている感じがします。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 280 AMEDは本当に必要だったのであろうか。AMEDの設立によってJSTやNEDOで生命科学、バイオ、医療に関する予算配分を中止したが、現在のAMEDがJSTやNEDOでこれまでやっていた事業をカバーできているとは到底考えられない。厚労科研と似たような事業ばかり実施しており、そのような予算には臨床医の参加や臨床研究の実施を計画していない限り採択されない。これでは、基礎研究がイノベーションに繋がることは不可能である。設立の趣旨と事業内容を見つめ直し、事業内容を考え直していただきたい。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 281 資金配分機関(JST・AMED・NEDO等)による研究費支援は、すでに結果の出ている研究課題に追加で投資する形式のものが多く、研究の芽生え期には必要となる研究費支援が不十分であるように思う。また、課題実施に際して計画の変更に対する自由度が小さい。(大学,第3G,保健,研究員・助教クラス,女性)
- 282 研究者が汗をかいて研究環境を自分で変えていく姿勢が少なく、周りが整えてくれるのを待っているような状況である。環境的には“もう十分”という感じを持つ。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 283 自由な基礎研究を支える予算が不足している。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 284 若手教員・研究者の配置増が可能となるよう、基盤的経費の増加が望まれる。また、科学技術予算は国際競争にとって極めて重要であるので科研費等の競争的資金を確保いただきたい。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 285 基礎研究を推進するには、競争的資金ではなく基盤的研究費が重要である。独法化以来の交付金削減で、大学の研究者数と基盤的研究費を毎年削減せざるを得ない状況で、基礎研究を推進しながら、イノベーションも推進するという無い物ねだりは、研究者を追い詰め、研究者の精神を消耗するだけである。我が国の大学と産業界の連携の歴史は、欧米に比してあまりにも浅く、双方が懸命に努力し、拙速と言って良いくらいに進展しつつあるものの、双方が満足するレベルにはほど遠いというべきであろう。両者がもっと長い目で連携推進に取り組むことが必要であり、それが相互扶助というものではないだろうか。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 286 内在的な動機によって行われる学術研究の目標が、現時点での「現代的な要請」に従う必要があるのか？いささか疑問に思う。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 287 省庁の縦割りのため、多くの異なる研究助成が話題を集めている特定の優れた研究者に重複して措置される状況が改善されていない点は問題であり、早急に改善すべきである。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 288 学長などの裁量できる金額が少ない。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 289 競争的資金に関する研究費マネジメントそのものは、悪くないと思っているが、競争的資金と同時に必要不可欠な基盤経費の激減が、現在最も深刻な課題であり、この課題を解決しなければ、今後日本には研究の苗が育たず、イノベーションも枯渇するであろうと危惧している。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 290 我国における公募型研究費は大型のものをのぞき博士研究員を雇用できる額でないため、費用対効果が他の先進国に比べ見かけ上高いが、それが自立直後の若手研究者の育成を妨げている面がある。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 291 組織全体を考えて最適化により力と発揮するためのコーディネートは未だ不足している。兼任はとすれば我田引水につながる。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)

- 292 リサーチアドミニストレーター存在は、基礎研究をイノベーションや助成金申請につなげる上で重要だと考える。研究機関によって、整備する余裕がない。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 293 大学院生を中心とした研究マネジメントの必要性を感じている。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 294 基礎研究の重要性は大学で認識されある程度の対応ができています。イノベーションにつなげる研究者が少ない。それを指導できる人材の育成が必要だと思う。資金配分等は相変わらず古い体質を引きずりながら施行されているように思う。手続等はITを用いて負担は軽くなっている。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 295 今回の私立大学研究ブランディング事業では、事業内容の開示や申請募集時期などにおいて十全の配慮がなされているとは言いがたく、応募しようとする大学にとり懸念材料となっていた。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 296 基礎医学分野に所属する物としての個人的感想であるが、最近はずぐ実用的に役立つという観点に重点が置かれすぎていると感じている。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 297 我が国の基礎研究の多様性を保ち研究者人口を一定数確保することと、喫緊の課題を解決するため(あるいは近未来に重要と思われる学術領域)の重点的な研究費配分のバランスをどのように保つかが国家の科学技術戦略としては重要と思います。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 298 学術研究が現代的な要請に十分応えているかという点で十分とは言えないのは、学術研究側の問題というよりも、研究環境の問題の方が大きい。安心して自由に学術研究ができる環境が確保されていれば、優れた成果が出て、自ずと挑戦、融合、総合、国際性が高いものが出てくるのであろう。最近、日本のノーベル賞が多いことは、それが行われた過去の時点において、まさに、これらの要請に応える研究がなされていたことを示している。また、優れた学術研究を支援するには、多様性が最も重要であり、そのためには科研費のように少額ではあっても多数の課題に支援が行われることが重要と考える。この点からすると、最近の科研費の制度改正は、採択数の確保面を犠牲にしながら行われているところがあり、運営費交付金による研究費が枯渇する中で、科研費が果たすべき役割を再認識する必要がある。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 299 競争的資金の100/100の支援枠を文部のみならず関係省庁で増やすべき製品に左右されるだけでは学術・基礎研究の進歩はない(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 300 問3-01:そもそも研究者の内在的動機に基づく研究は、社会の要請を直接的な基礎としていないので、現代的な要請に十分に出来ないのは、むしろ当然のことであり、そのことを折り込んで見ておく必要がある。問3-04:我が国の基礎研究について、国際的に突出した成果が十分に、とは言えないかもしれないが、かなり生み出されていると思う。問3-06:サポートする分野がまだ十分広くないと思う。(大学,第4G,社長・学長等クラス,男性)
- 301 社会的にも所属機関においても、研究費としては科研費が中核的な役割をはたしているが、研究種目において基盤Cと基盤Bとの中間に位置する種目が必要と感じる(研究者を成長させるしくみとして、必要)。現状では、殆どの研究者で40代半ば頃から、得られる科研費種目の状況が固定する傾向があると感じており、ほぼランクが決まり、その後の変化や成長が全体に乏しいと感じる。だから若手中心に支援する、という方策ではなく、研究者人口の大半を占める中堅世代にも成長・変革の機会を与えるよう、世代を通じて変革させるしくみを創って頂きたい。(大学,第4G,社長・学長等クラス,女性)
- 302 基礎研究より応用研究に主眼を置いた支援の割合が極めて多いように感じる。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 303 短期的な成果を求める風潮が、逆に基礎研究の力を弱めてしまうことは否めない。科研費や官公庁の競争的資金についても、短期での成果が出やすい分野にばかり資金が流入することは、いつ成果がでるかかわからない基礎研究の発展にマイナスになる。研究機関の予算では賄いきれないところもあり、科研費や国の資金の配分に期待するところは大きく、基礎研究に十分資金が回るような施策を期待したい。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 304 PDを含めた若手研究者、60才以上のベテラン研究者についても中堅研究者と同様の資金へのアクセスチャンスを与えるべきと考えます(例:63才以上は研究代表として大型研究費を申請できる)。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 305 資金配分機関はその機能を果たしていないか、あるいは、不必要なほど自己の存在顕示を強く出しすぎているか、個々のケース毎に両極端で有るように感じる。この機関に求めるのは、事業管理よりも、いわゆる霞が関ができない(政権の変化、大臣・課長クラスの人事による)長期の戦略立案機能である。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 306 科研費は出口をきちんと精査した方がよい。いつまでも宝くじ感覚ではイノベーションなど起こりえない。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 307 超大型予算ではなく、中型予算の件数を増やすことが、国家の研究の地力を生み出すはず。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 308 公募型研究費は、頻繁に意味不明なペーパーワークを強いられる。資金配分機関の自己満足のために研究者の時間を浪費するのはやめていただきたい。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 309 フランスCNRSのような、国内を見渡した上での戦略的な研究連携が全くできていない。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 310 配分機関自体の使うお金(人件費、運営費)も問題にされるべきかと思う。(肥大化しているのではないかな?)NEDOプロなど、大きな研究組織を作って、その事務のために雇用しその人件費が膨大になっている例も多く、何のためなのかかわからないものも多い。またPJの建屋、施設、設備を入れたがために、その維持のために、半永続的にPJを無理に作って大きな資金を使っている例も多い。改善すべきである。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)

- 311 昔に比べ、申請や審査のインフラは整備され、やりやすくなっている。競争的資金は、大型予算が多く、少額・長期間といった地道な研究活動を支援する側面が軽視されているように思う。実際、数年間で数千万~1億円の予算より、数100万で10年間、といった予算の方がある種の基礎研究には適しているようにも思える。(大学,第4G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 312 競争的資金のテーマ設定が古い。NEDO等大型資金ではましになってきたが、地方の競争的資金は審査側の人材不足もあり、テーマが古い。(大学,第4G,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 313 国の施策を実施組織で適切に反映できるための「理念の移転」と、指針の徹底を可能にする「運用の統制と柔軟性」が組織に正しくもたらされるような仕組みを構築してほしい。(どんなに目標の高いプログラムでも、交付され組織に下されると、組織内の固着したルールに縛られて、ミッションの達成が難しくなることがある。) (ミッションとガバナンスの優先度が適切に調整されたい。)(大学,第4G,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 314 トップダウン的な研究費配分のやり方は、応用研究に偏重していると感じる。そのような研究でも大学のインフラ等に高度に依存していると思うが、そのようなインフラが脆弱になりつつある今、多くの応用研究まで成り立たなくなる危険があるのではないか。(大学,第4G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 315 JST・AMED・NEDO等の資金配分機関は、研究費規模が大きいにも関わらず、その役割を十分に果たしているようには感じない。もっと、小規模のプロジェクトを増やすべきではないだろうか。(大学,第4G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 316 学術研究・基礎研究と研究費マネジメントの状況とも、高い水準で確保されていると感じます。ただ採択件数においては、本来であれば採択されるであろう研究についても採択から漏れている場合もあるので、可能であれば採択件数を増やしていただきたいと思えます。(大学,第4G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 317 基盤的研究経費がほとんどない状況では、科学研究費等に頼る必要があるが、採択率が3割程度であり、科研費に採択されなかった年度は研究が行えない事態が生じており、特に基礎研究の沈滞化が始まるものと危惧している。(大学,第4G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 318 さまざまな助成事業が立ち上がっていることは評価するが、審査員が特定大学や研究機関に集中する傾向が見られ、フェアな審査が行われているとは言えない。学閥、研究閥にとらわれることなく、広く人材を発掘すべきだと思う。(大学,第4G,理学,部長・教授等クラス,男性)
- 319 研究費のマネジメントに労力がかかりすぎる。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 320 研究費マネジメントについて、共通機器や共同利用に関する経費が少ないために、大型の予算措置が行えずに、限られた範囲での研究活動に留まっている傾向がある。科研費の間接経費の使途については、事務方の裁量で決められていて、教員や研究員の意見が汲み取られていない点で体制の改善の余地があるであろう。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 321 将来的なイノベーションの源としての基礎研究の多様性を確保するために、成果を重要視しすぎないような研究費の配分を希望します。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 322 基礎研究は環境を整えばさらに突出した成果を出せると思う。そのためにも研究費の増額、適切な分配、研究施設の充実は重要であると思う。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 323 JSTのCRESTや、さきがけに問題があると思われる。特にこれらでは、特定の領域を決めているため、科研費の新学術領域のようになっている。○○○○先生が総括をされていたCRESTやさきがけのように、もっとダイバーシティーをもった分野を範囲としたCRESTやさきがけにしないと、特に若手は領域に合わせた研究しかできない方向にさせられている気がする。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 324 現在の資金配分機関からの研究助成に関しては、その採択課題の傾向が必ずしも将来を見据えたものとなっているとは思えず、”今流行っている研究”で目に見える成果がすぐに現れるようなテーマへの支援に偏っているように思われる。近年ノーベル賞の受賞が連発しているが、それは自由闊達に予算もおおよそ気にすることなく自由に研究を進めることができた年代に基盤が形成されたものばかりであり、数十年後に基盤となる研究がどれくらい国内で行われているかについては、ほとんど行われていないのではないかと疑わざるを得ない。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 325 競争的資金が増えました。さまざまな形のものがあります。そのさまざまな研究費を一つの研究室がとっていくような現象がみられます。競争的資金によって、お金の一極集中が起きています。たとえば、CRESTの研究室、さきがけ研究者、若手Aの研究者、基盤Aすべて持っている研究室があります。これだけの資金があれば、いくつもの研究室を運営できる予算です。過度な一極集中は考えものです。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 326 競争的資金だけでは駄目。競争的資金はよく機能している。別の話。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 327 環境省の推進費をいただけてきました。審査員はおおむねフェアでよいのですが、PO(環境省外郭団体に所属する、第1線をしりぞいた立場の方)などがうまく機能していないと思います。環境省の役人の方が負いきれないことはわかりますが、専門以外の方が、研究内容にまで口出しをすることもしばしばで、マネージメント、事務負担が増すだけです。(大学,第4G,理学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 328 予算の配分が適切でないため、予算のために簡単に実績が出る研究にながれている。研究とは、現在明らかになっていない事象を究明することが目的であり、予算を取ることは目的ではない。非常に問題であると思う。(大学,第4G,理学,研究員・助教クラス,男性)

- 329 科学研究費は基盤A,B,Cなど規模に応じて細分化されていますが、もう少し小規模の研究を支援する枠組みがあると個人的には助かります。研究が採用された年と採用されなかった年では大きな違いがあり、継続的に安定的に教育・研究する上では大きな調整が必要となります。(大学,第4G,理学,研究員・助教クラス,女性)
- 330 基礎研究費は十分に支給されているが、発展的なことを試すためには、まずファンドをどこからか取ってこなくてはならない。単記の年度払いが多く、中長期的な計画が立てにくい。(大学,第4G,工学,社長・学長等クラス,女性)
- 331 学術的な研究,基礎研究に関しては、特に、期限付きでの成果や具体的かつ詳細なノウハウの記載を求めることには、無理があると思われる。ともに、目標設定は、明確であるべきと思われるが、その具体的なノウハウまでの記述を要求することは、避けることが懸命を考える。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 332 どうしても短期的に成果が出る、役に立つ研究の方に研究費が流れているように思う。もう少し、そのような性格を持たない基礎研究に研究費を流しても良いように思う。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 333 地方大学にいて、JST,AMED,NEDOなどの大型予算は、旧帝大の方々が獲得し、そのおこぼれが地方に回ってくる、という感じになっています。地方大学の教員がチャレンジ精神に乏しいと誤解されるかもしれませんが、地方の場合研究ユニットが小さく、大型の予算を受けて仕事を体制にないというのが大きな理由です。その代り、地方では実に多様な個人的な研究があちこちで行われています。こういう広く種をまくような研究を支援して欲しいと思います。前にも書きましたが、科研費の基盤B,Cクラスの拡充を考えていただきたいと思います。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 334 大学における運営費交付金の減額は大学における研究活動をだめにする。JST,AMED,NEDOなどの短期的なプロジェクトへの資金集中より科研費が基礎研究には重要である。たとえば、JST,AMED,NEDOのプロジェクトの成果で、科研費と較べて本当に貢献したものがいいのか。競争的資金へのシフトは研究力を破壊する。提案書を書いた時間が無駄になる。その時間で生まれるはずだった研究成果は誰が補うのか。物理や宇宙の予算を少し減らすだけで多くの基礎研究が助かる。研究法人の大型プロジェクトと博士学生を一体化した研究プロジェクトを設計すべき。競争的資金、科研費は採択、不採択でなく点数による傾斜配分とすべき。そうすれば地方大学にも研究費が行く。補助人材より、研究人材、研究を実用につなげる人材を育成すべき。大学、教員の論文数、トップ論文による評価はやめる。教員の半分を異なる大学から採用する、あるいは、企業から採用する教員数の割合を決めてバランスを保つべき。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 335 今後の超高齢社会において、医療機器やヘルスケア機器の役割はますます重要となることは明らかである。しかし、これらの分野はJSTとAMEDの役割分担により、そのはざままで抜け落ちてしまっている。今後これらの境界分野への配慮は必要であろう。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 336 年1000万円程度の研究費を獲得すると、マネジメント作業に追われて、実際の研究活動を行う時間が大きく減ってしまう。書類作成も必要なのはわかるが、研究活動ができなくなるのは本末転倒である。これの対策が必要である。間接経費にマネジメントをするための人材確保のための費用を追加するようなことがあっても良いと思う。さらに大型の予算になると、間接経費も大きくなるため人件費の確保は可能であり、さほど問題にはならないかもしれない。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 337 将来の有望性だけを問うことが大事な研究だとは限らない。幅広い、自由な研究に取り組める研究環境が大事であり、話題性のある研究分野だけを強化するのはどうかと思う。研究費を獲得しやすい分野・領域だけが生き残るようでは、大学での研究教育は成り立たなくなってしまう恐れがある。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 338 前項でも述べましたが、学術研究に対する研究費の支援状況は現在の科研費だけでは不十分だと思います。また、学術研究に従事する大学院生の経済的な支援を可能にするような制度を整える必要があると思います。リーディング大学院などはその素晴らしい例だと思います。問題は、それらの制度が期間限定で有り、期間終了後に大学独自で維持出来るかどうかという点にあると思います。旧帝大はともかく、地方大学では維持することは困難であると思います。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 339 申請書の作成が多大な負担となっている。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 340 ・科研費の採択率を全体的に上げてもらいたい。特に、予算を少し下げても基盤Bの採択率を35～40%まで上げてもらいたい。・資金配分機関(JST・NEDO等)のプロジェクトにもっと多くの研究者が参画できるようにして欲しい。一部の有力な研究グループのみで進められている面が見受けられる。・当然ながら基礎研究は極めて重要だが、重箱の隅をつつくような研究を基礎研究とはき違えてはいけないと思う。・未来への展望が語れないような基礎研究は不要と思われる。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 341 資金配分機関の研究費は十分な額であることが多いが、科研費はその補てんに過ぎない。したがって、科研費をメインとする研究者がイノベーションを起こすことは難しい。(大学,第4G,工学,部長・教授等クラス,男性)
- 342 資金配分機関の役割分担が分かりにくい。科研費は基礎研究、NEDOは産学連携、のようにテーマによって分けられないものか。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 343 お金を取ってきた人だけが忙しい。制限付きの研究費では短期成果しか出せない。自由度を重視しない研究予算の充て方で10年後に芽生えるものが育つわけがない。そういう声が沢山あがっているのに一向に制度も何もかわらないのは、結局国がそのようなことを軽視しているからなのではないか。以前より定点調査で同じことを主張してもまるでそれが反映される兆しもない。このような調査に参加することに意義があるかすら疑わしい。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 344 一般的な話ですが、ピアレビューの資金投入は、公平性を担保するために、わかりやすい研究、論文の出版を主体とした研究に偏っていると聞きます。公的資金を投入している以上、研究の総括は必要で、論文化が後世にのこる一番いい方法だとはわかっていますが、ハイリスク・ハイリターンなチャレンジングな研究をサルベージする方法はないものかといつも考えます。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 345 特に基礎研究については「選択と集中」型の予算配分は弊害でしか無いと考える。研究者が自由に使える資金をある程度ばらまくことが重要である。一方で、ある程度出口が見えてきた研究については、寄附等を含め、民間資金を積極的に導入するための仕組みの強化(減税など)により、研究資金を確保すれば良いと思う。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 346 資金配分機関(JST・AMED・NEDO等)は、将来有望な研究開発テーマの発掘や戦略的な資金配分等、それぞれの役割に応じた機能を十分に果たしているといえるが、研究者が新たな課題を積極的に探索し、挑戦するなどの、研究の多様性確保に関しては寄与できていない。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 347 科研費に関しては、ここ10年ほどでものすごく改革が行われたと思っています。使い勝手も、審査に関しても、多くの研究者にとっては不満が随分と小さくなり、いい方向に進んでいるように思います。しかし、平成30年の改革には多少の疑問はあります。例えば、2段階審査かつ同審査員による合議制への変更というのは改悪だと思えます。重鎮の先生にまた資金が集中するようになってしまっています。せっかく、30年かけて、改革してきたにも関わらず、この変更によって逆行してしまうと思います。また、科研費以外にも我が国では、様々な政策が行われていると思っています。しかし、あまりに広範囲にわたっているため、ほとんどの研究者にとっては、どれがどれかとわからずに、申請も出来ないように思います。整理統合が必要ではないでしょうか。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 348 審査員が公表されていない科学研究費助成事業における採択課題は、全く新規なものや高い挑戦性のテーマはあまり採択されず、申請者本人および申請者が関与するグループの実績や名声で、選ばれていることが多いように思う。それに対して、審査員が公表されているJST等が行う大型事業や企業等の財団が行う助成事業では、全く新規なものや高い挑戦性のテーマが、多く採択されているように思う。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 349 科学研究は必ずしも現代的な要請に基づいている必要は無いと考えられる。短期的なアウトプットを大学の研究に求め過ぎると、研究を通じた学生の教育や研究者としての育成という大学としての最も重要な役割が十分に果たされなくなる。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 350 運営費交付金の削減により、大学教員は競争的研究資金無しでは研究活動が不可能な状況にある。その事情から競争的研究資金の獲得(申請)と維持(中間・成果報告)には膨大な労力と時間が費やされており、研究・教育の時間を奪っている。米国のようにそれらの提出時に作成時間を任意申告させる体制・制度を作り実態調査を行ってほしい。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 351 無駄な手間がかかる。研究費の申請ひとつをとっても、例えば「現在獲得している研究費の状況」などをいちいち記載する必要がわからない。情報を収集・統合し、必要に応じて取り出して編集できる仕組みが何故できないのか。研究成果の登録についてもいろいろなサイトに入力する、報告する必要がある、データベースとしての役割を果たしていない。類似研究の事例を探すにしても、データベースが一元化されておらず全体的なマネジメントに無駄があると感じる。(大学,第4G,工学,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 352 学術研究・基礎研究に対する研究費の支援の仕組みを実施いただいていると思いますが、我が国の発展、国際競争力の強化のため、可能な限りますますのご支援があれば幸いに思います。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 353 科研費やその他の競争的資金制度に対し、この10年でも改善がなされていることを実感している。しかしながら、大学内のローカルルールがそれに追従しておらず、十分に活かされていないと言えないと思う。本学の努力不足もあるが、複数の制度が乱立しており、ルールの統一が不十分である状態では、仕方がないところもある。制度をよりシンプルにしてほしいと感じている。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 354 一般的に、短期間に成果の見えやすい研究の方が研究費を獲得し易い傾向があるように実感している。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 355 繰り返しになるが、欧米での研究例がないことを理由に、研究提案が否定されることが少なくない。また、圧倒的優位性がないと評価されてしまったことで、非常に研究が進めにくくなり、実用化に非常に苦労した。基礎研究は結構だが、実用化を進めている研究者に不都合が多いのはなぜか？実際に実用化研究を進めてみると、まるで、国が実用化研究を拒んでいるかのような印象を受けることもある。実用化をやる風を装って、実際は実用化せず、特許も出さずに論文投稿する方が賢い選択で、実用化する研究者はバカを見ている感じがする。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 356 問3-08 申請時の申請者や審査員の負担及び課題実施に際しての手続・評価等にかかる研究者の負担については負担を低減する取り組みが必要であると思うが、審査するためにはより多くの情報があった方が好ましいため負担を低減することが良いことか分からない。信頼性の高い研究者には手続きを低減するといった部分的な軽減は良いかもしれない。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 357 外部資金という意味で研究費は年々使いやすくなっているの中で多様性も生まれてくると思う。ただ、プロジェクト型資金が多く、若手が自由な発想で申請できる予算が科研費しかないで、例えば以前存在したNEDO若手研究 Grant 等のような制度が復活すると良い。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 358 選択と集中が過度になっているように感じる。広く浅く皆さんにとまでは言わないが、集中しすぎているようにも感じられ、懸念される。数年前よりも集中の度合いが激しくなっている。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 359 多額の研究費を獲得できる研究は、基礎研究よりも応用研究や開発研究よりになってきていると感じる。基礎研究の申請ですら、応用先や実施例に関する言及を求められる。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)
- 360 新しい研究プログラムが乱立しており分かりにくいと感じる。科研費は基礎研究を支える最重要資金であるが、重複制限が多く継続性確保に課題がある。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,男性)

- 361 応用分野の研究者であるため、総合的な研究が対象であり、基礎研究の方からの意見とは異なるかと思われませんが、現状もしくは10年後の社会に対する研究に対して競争的資金の公募が出ているという印象でおります。ただ競争的資金の申請書はかなり難解であることが多く、様式に対応した希望予算額の計算や記載方法にかなり多くの時間を取られてしまうことが多々ありました。研究者が提案を行うことは重要な点で、それに伴った予算の提案は必ず行うべきだと思うのですが、書類の形式に合わせるために多くの時間を取られるのは本質ではないかと考えております。可能であれば特定の企業のように競争的資金対応の書類を精査する機関を大学・研究機関が持ち、各々の専門性に従事したほうが効率的ではないかと考えています。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,女性)
- 362 自身がやりたい研究はできているので、不満はない。ただ、研究費申請において、多くの場合は減額されるため、多めに研究費を申請するのが慣例になっているのは問題だと思う。本当に必要な経費を書き、その内容に価値があれば、その額を満額支給するのが、無駄の削減につながると思う。(大学,第4G,工学,研究員・助教クラス,女性)
- 363 短期的成果を求める傾向が強い感は否めない。これは、その下で育つ若手研究人材の質にも少なからず影響しているように思える。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 364 今まで公平性を保ち、最優先に取り組んで来たと思っていますが、もうちょっと自由な研究ができる、手続きが簡単で、資金運用の自由度を高めてほしい。個別な「公的資金の不正流用」ですべての良心がある研究者の研究と開発の自由を奪ってはならないし、すべての研究者に疑い目線で見えてはならない。良い研究は自由な発想から生まれるから、自由度をもう少し高めてほしい。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 365 特定の研究者・機関のみに集中しすぎている。定年が伸びて、老教授やほぼ引退している教員に大型の研究資金、科研費を申請することができないようにするべき。若手に回らず、研究の芽を摘んでいる。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 366 分野によるだろうが、人を中期的(3-5年)に雇用するための専門のプロジェクト型ファンドが欲しい(経費全体の95%以上が賃金という)。研究遂行上いちばん欠けているのは、高価な機器ではなくマンパワーであるケースも多い。その一方で、専門技術を持つ博士取得者で学振特別研究員を終えても職にあぶれている人が大勢いる。それらを雇用できれば研究が大きく進むのに、既存の科研費等では多くの場合金銭的に雇用が難しい(たとえば基盤(C)や萌芽では1年間の雇用は不可能)。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 367 基盤研究は重要であるが、地味な研究ほど評価が低くなってきているように感じる。科研費など、予算があまりかからない研究について、採択が厳しいと感じることもある。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 368 科研の採択率がいきなり下がった。これでは支援とは呼べない。(大学,第4G,農学,部長・教授等クラス,男性)
- 369 基礎研究については、その価値が認められるのは、かなり年数が経ってからのことも多く、評価が難しい。昨今のノーベル賞受賞が続いていることを鑑みると、それらの成果が出された年代での基礎研究の、国際的な突出性は高いと言える。(大学,第4G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 370 研究助成期間が終了すると、その後のサポートは何もない。(大学,第4G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 371 科研費は基礎研究を支える最後の切り札です。それだけでなく、先進国の中で日本は国家予算あたりの科学研究費が極端に低いので、米国のように医療など実学的な側面がなければ予算請求しにくい状況になると、基礎研究は崩壊するでしょう。また、大型予算をある特定の研究者あるいは研究グループに落とすトップダウン的なやり方の重要性もわかりますが(能力があり設備が整っているところでより成果はでるのは当たり前でしょう)、一方で零細な規模でも地方国立大などの研究者が長期間にわたって行なう草の根的な研究も大切にしなければ次世代のノーベル賞級の成果はでなくなると思えます。外部資金獲得の競争理念は賛成ですが、大学交付金を削りつつある現状では基盤の研究費そのものがなくなり、科研に挑戦していく土台そのものが崩壊してしまいます。研究の停滞は大学教育の停滞を意味しています。力のある大学と研究機関だけが研究できればよい印象を受けるのは私だけでしょうか？(Part IIの意見とかぶる点がありましたので、同じ文面をここに記入しました)(大学,第4G,農学,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 372 どのような研究費であれ、書類作成の手間が大きい。申請書作成だけで十数時間を浪費する。さらに、成果の報告書や経理事務も負担となっている。その労力を実験や論文作成に回せたら、塩漬けにされているアイデアの1つや2つは既に成果として社会に発表できていそうに思えてしまいます。(大学,第4G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 373 基礎研究に関して、ノーベル賞受賞に関係する秋の時期のみ取り上げ、他の時期にはほとんど顧みられないのは異常な現象と考えます。基礎と応用は紙一重の違いではほとんど違いはないと考えます。(大学,第4G,農学,研究員・助教クラス,男性)
- 374 優れた研究に対する評価は時代によって変化する。今、目の見ない研究が将来大化けする可能性も多々あるにもかかわらず、そのあたりに対する配慮が現在の研究費配分にまったく反映されていないと感じる。将来、日本からノーベル賞が出なくなると良く言われるが、そのとおりになるであろう。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 375 原資が税金なので仕方がないが、先にも記載したように、重大な発見をした場合(秘密保持をしっかりとした上で)その研究者が相談できる・研究費の配分を柔軟にできる組織の構築が必須と思われる。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 376 学術研究、基礎研究、応用研究の境界が定かではないので、名前が売れている先生が、基礎研究の領域で出すべき内容を、応用研究に言葉だけで見せかけて、応募することで、結局、名前が売れている先生に研究費が流れているような気がする。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 377 AMEDはあまりに実用化を言い過ぎる。報告書の締め切りも急、報告会・ヒアリングの設定も急であり、かつ、いとも簡単に予約をリリースしてくださいと言う。従来よりもかなり上から目線。それでいて、評価者が研究を理解しているかは、疑問に感じるときもある。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 378 個々の研究、特に基礎研究に「現代的な要請」を当てはめようとする発想自体に無理がある。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)

- 379 「国際的に突出した成果が十分に生み出されていると思いますか」国内外の動向を書くことがあるが、特にイノベティブな内容を期待するのであれば、研究内容やレベルを問わず新規の内容をすくい上げる頻度を増やしていただきたいと考えています。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,男性)
- 380 すぐに何かに役に立つこと,医学部でいえば,患者の治療に結びつくことばかりが優先されているような印象がある。「融合研究」にばかり研究費が配分されるので,無理に異分野と結びつけなければならず,自由な研究テーマの設定ができないと感じるときがある。(大学,第4G,保健,部長・教授等クラス,女性)
- 381 ステークホルダーに基礎研究の重要性を評価する能力がないし,長期的展望ができない。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 382 数ある基礎研究の中で実際に社会に実装されるのは僅かだと思います。しかし,そういった実装され役に立つ研究を生み出すためには沢山の基礎研究が必要だと思います。直ぐに役に立つ応用研究はもちろん大切で,これに研究費を配分して貰いたいと思いますが,役に立つ「種」「芽」である基礎研究にも予算を配して貰いたいと思います。また,数学や理論物理学のように,「それがわかるようになっても将来役に立つようにならない,直接に生活や人生を豊かにする訳ではない」研究もあります。寧ろ日本はそういった研究に強いところもあります。これらは,純粋に真理を追求学問なのだろうと思います。これらの研究が進むことは,単に人類のものの見え方の見晴らしがよくなるだけかもしれませんが,そういった自然科学のエッセンスだけ取り出したような学問も大事にして欲しいと願っております。それは知的好奇心だけに基ついた学問で,人がものを勉強したい,研究したい,という気持ちに最も近い学問だと思うからです。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 383 一部の研究者に研究資金が偏っていることに,不正使用が発生するようになると思います。少額でも幅広く補助ができる体制を整えて頂きたい。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 384 いつの時代にも面白いことを考える人はいると思います。そういう人に目を付けて,研究環境を与えてあげられるような力(研究費や裁量権)を持った偉い人が,ピラミッドの上の方だけにしかないような気がします。面白い人を見つけて引っ張り上げる立場の人材が決定的に不足しているように思われます。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 385 基礎研究と臨床研究(応用研究)について公募枠を分けたいと思います。たとえば,オーストラリアのARCとNHMRCのように Medical Research の定義づけを明確にし,公募できる資金源のすみわけはいずれ必要です。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 386 科研費については,基盤研究Cより採択額は低いが,その分採択率は高い研究種目があっても良いように思う。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 387 研究の自由度がなくなり,計画した研究しかできなくなっている。自由な方向転換が可能な柔軟な予算が必要かと思えます。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 388 資金配分機関等による資金の配分が,真にその研究内容を評価して振り分けられていないように思う。各研究内容をしっかりと評価し資金配分を行うことは大変困難な面もあると思うが,研究内容を問わず資金が配分されやすい施設が存在するように感じる。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 389 研究費の投入が,臨床応用に直結するものに偏っている。オートファジーのノーベル賞を契機に,もう少し基礎研究分野にも力を注いでほしい。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 390 私どものところは,大学で,研究に特化した施設ではありませんが,付属病院といった臨床の現場からの視点や,疾患について学生に教育を行う中での気付きなど,疾患に関する研究課題は見つけやすく,また特に臨床からの視点は特に重要であると感じます。話は大きくなりますが,このような環境の研究者が,研究に取り組みやすくなると,医学の進歩につながるように思います。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 391 競争的研究費の採否が研究の進度に影響を与えるため,短期間で業績の出る研究が増えて,結果として長期的展望にたった挑戦的研究がしづらくなっていると感じています。競争的研究費の採択率を上げるか,もしくは競争的でない研究費の拡大が必要だと思います。(大学,第4G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 392 研究資金の一極集中が見られる。日本における研究者の絶対数は,アメリカや欧州に比べると多くはないため,多数の競争的資金が乱立しそれぞれで審査が行われると,結果的にもっとも優秀な一部の研究者がすべてを持っていく状況が生じる。研究分野によって必要な資金の絶対額が異なるため一人当たりの研究資金の上限を設定するのは難しいが,資金が潤沢な研究室ほど無駄遣いが生じているのは事実であり,少なくとも公的資金に関しては複数の研究費の合計額の上限を定めるのが望ましい。もう少し少額(100万円/年程度)の研究資金が広く行き渡るシステムを構築する必要がある。そうしないと研究の多様性が生まれえない。(大学,第4G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 393 研究費が同一研究室に集まっているように感じている。個人で獲得しているのは事実だが,その時々流行りの研究をやっている教室にお金が集まっているように感じている。また,獲得に関しても,研究力より,文章作成力に左右されている感が否めない。事実,お金を払ってプロに添削してもらったとたん獲得できたという話も聞く。(大学,第4G,保健,研究員・助教クラス,男性)
- 394 往々にして,研究者の内在的動機と社会ニーズがかい離している。実用化研究においては,この点について改善が必要。例えば,政策や社会システムへの貢献が,プロジェクトマネジメントに含まれていないとそれは実現できない。基礎研究については,そういった社会要請から全く離れた次元で,自由にさせる仕組みも一方では重要である。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 395 学長ガバナンスにより,学内研究費が昨年から今年度にかけて約50%カットされたことにより,自由な研究活動ができなくなりました。大学では,学長裁量として一部の研究に流用しているようですが,その費用対効果は明らかにされません。研究費マネジメント状況として不透明な点が不十分だと判断します。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,女性)

- 396 研究とマネジメントが必ずしもマッチしているとは思えない。マネジメントというものの評価が、低い。より優れた研究を世の中に出す工夫をもっと積極的にすべきである。また他の分野との融合を図るべきである。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 397 プロジェクトマネージャ型の大型研究費に公募採用されたが、研究開始後、半年後に評価が行われ、「計画通りに研究が進んでいるが、それだけでは不十分。」という評価をうけ、他グループへの統合となった。マネジメント体制が評価される(合理的な統廃合がマネジメントだと評価される)ことをPMが気にしすぎているのではないか、他グループへの統合が決定したことによって、たった半年間の取り組みに対して報告書(公表はされないといわれた)を100ページ要求され、なんとか書いたが、半年間の研究に対して、100ページの要求はあまりにも多いのではないか、この報告書作成に1,2ヶ月かかり、多くの研究時間を奪われた。研究者に時間的なゆとりを与えて研究をさせなければイノベティブな研究はなかなかできない。(大学,第4G,部長・教授等クラス,男性)
- 398 問3-07につきまして、「研究の発展段階に応じ、継続性を保ちつつ支援する」のではなく、発展しようがしまいが、定められた期間の間は継続的に支援された方が、当該の研究をされる方々がその期間中は思い切り研究できて良いのではないかと思います。(大学,第4G,保健,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 399 学術研究・基礎研究について、我が国は高い水準にあるが、最近の大学等における研究費の減少は、将来、これらの水準を低下させることが懸念される。(大学,大学共同利用機関,社長・学長等クラス,男性)
- 400 戦略的な資金配分という名目で、流行りの研究(すでに流行っているので、多くは二流)に対する無駄な投資が多いように思われる。(大学,大学共同利用機関,社長・学長等クラス,男性)
- 401 研究結果に対するレビューが不十分である。ピアレビューは、時にその分野の保護やなれ合いになってしまうので、採択される研究者の分布や成果の国際比較などで分野の評価が必要特に科研費の分野間の配分については、透明性が必要である。(大学,大学共同利用機関,部長・教授等クラス,男性)
- 402 問3の意味がよく分からない。研究者の内在的動機とは、例えば次の時代の教科書を構成すべき基礎研究も含まれるわけで、その内容は様々である(だからこそ、内在的である)。それを現代の要請を満たすように測定することは不可能ではないか、問いそのものが矛盾している。またイノベーションの定義が不明だが、一般的には「社会的価値の創造」であって、基礎研究とはおおよそかけ離れたものではないのか。それが「十分につながっている」かどうかというのは、結果としてなら評価可能だが、基礎研究政策としては不適切である。(大学,大学共同利用機関,部長・教授等クラス,男性)
- 403 若手支援を目的として若手向けのグラントが増えており、ポストドクでも科研費等に応募できる。しかし、この制度は能力ある若手の育成に必ずしもつながっているとは思えない。2つの典型的な問題のケースを上げる。(実際に若手向けの科研費の審査員をつとめたことがある経験にもとづく)。ひとつは単に所属研究室のテーマの自分の担当箇所を申請するだけのケース。若手研究者の独創性の発揮や自立にまったくつながらない。単に所属研究室の予算を少しふやすことができるだけである。ふたつめのケースは、PIに与えられた研究と異なった研究テーマで自分の独自のテーマが採択された場合。これは研究者の独立につながる可能性があるが、一方で、米国のように、ポストドクはPIに与えられたテーマをしっかりと行ったほうが、長い研究者のキャリアのなかでの初期のトレーニングという意味では効果があるという見方もある。いずれにしても、若すぎるうちから、研究費の獲得するための申請書の書き方やだけが上手になって実力がともなわない若手研究者が増えている印象があり、現行の若手優遇制度には懸念を感じる。むしろ若手向けの支援で重要視すべきは、ポジションの確保である。(大学,大学共同利用機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 404 科研費に限って言えば、基金化の導入等、研究費マネジメントに関わる制度改革は徐々に進んでいると感じています。(公募種目等の改革については、進んでいるとは感じられません。)(大学,大学共同利用機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 405 基礎研究全体を広く尊重するような考え方になって欲しい。その結果として、応用研究へ繋がるもの、産業化されるものが生まれてくると考えている。(大学,大学共同利用機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 406 基盤整備的な予算で整備した実験装置を継続して使用できるような予算がない。(大学,大学共同利用機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 407 研究者の内在的動機に基づく研究の方が論文などの評価で結果が出しやすい分、学術研究への現代的要請に応える研究を推進するモチベーションが不足し、研究者のスタンスを変えていくのは難しいように思います。学術研究への現代的要請に応える研究を進めることが、研究者の評価(組織内外、ポジションや研究費確保など)に直結するような評価システムを進める必要があると感じます。(大学,大学共同利用機関,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 408 (1)若手研究者は、任期制のため長期的・挑戦的な研究を行えない状況である。生命科学の場合、3年の雇用期間では、研究の失敗から挽回するチャンスがない。したがって、短期で成果が得られるような保守的な研究課題を行う傾向にある。(2)JSTの研究は、近年出口志向の公募領域が目立ち、基礎研究者が応募しにくくなっている。(3)AMEDの公募は、研究者への通知が不十分である。(4)外部資金の研究では、研究成果の評価方法が適切ではないようだ。「共著論文」と「責任著書(筆頭論文含む)」の2種類を区別しなければならぬ。外部資金の研究では「共著論文」を過大に評価すべきではない。研究代表者や分担者の「責任著書」を業績として評価すべきである。外部資金で「共著論文」を「責任著書」と同等に評価してしまうと、研究成果を見誤るばかりか、ギフトオーサーの慣習を助長してしまう。(大学,大学共同利用機関,研究員・助教クラス,男性)
- 409 科研費の申請自体が大きな負担となり過ぎており、申請書や報告書の作成のために研究時間が損なわれるという現象が発生しつつある。これは限られた研究費用や人材を有効利用するという観点からみると本末転倒の事態である。科研費を取得するための書籍が販売され、説明会が開かれているが、研究レベルを上げることに研究者は邁進するべきであり、科研費獲得のための小手先の技術のために研究時間が損なわれている現象を危惧して行く。(大学,大学共同利用機関,研究員・助教クラス,男性)
- 410 基礎研究は好まれていない印象を受ける。産業化を過度に意識して、論理性が破たんする研究もいくらかある印象。(大学,大学共同利用機関,研究員・助教クラス,男性)

- 1411 科研費の審査について、各審査員が担当する申請書の数が多すぎるのではないかと感じています。申請書を精読することはほぼ不可能と言われており、それで十分な評価が行えるのかという疑問を持っています。例えば、若手研究者も含めて審査員資格を持つ研究者の全体数を増やすことはできないでしょうか。多くの人が審査員の立場を経験することは、申請書執筆力の向上にも繋がるのではないかと思います。(大学、大学共同利用機関、研究員・助教クラス、女性)
- 1412 特に基礎研究に対する支援が脆弱になっているように思われる。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1413 運営費が毎年削減されており、マネジメント人材を配置してガバナンスを利かせる事が困難である。実績に応じて、人材配置をお願いしたい。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1414 挑戦的な先端分野研究にはある配慮のもとに経費が用意されていると思うが、これからの芽を育成する基礎的な研究分野への配慮は不十分であると思う。新たな挑戦的分野の出現を可能にする学術基盤の整備の取り組みについて国全体としてのマネジメントが必要である。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1415 プログラム・ディレクターのような見聞き人材の充実に求められる。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1416 多数の申請書を作成する必要があり、研究時間が減少している。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1417 大型国プロに関して言えば、同一分野への多重の資金投入といわれるような状況が依然続いているように思う。現場では、国プロの「デマケ」なる表現が一般化しており、違和感を感じる。短期的な成果を求める傾向も顕著である。政策立案の立場からは、いくつかのシーズやニーズによる研究を何年かかけて社会実装するというストーリーを立て、それに合わせて、制度設計をしていくということとはよく理解できる。ただ、現状では、ある年代に生じたシーズを継続的に支援しているため、その結果、「デマケ」が問題になっているように見える。時々刻々と生じ変化するシーズやニーズに対応した研究支援体制(支援ポートフォリオ)などをさらに整備する必要があるように思う。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1418 *この設問について、学術研究と基礎研究を(言葉の上で)分けることはできないと思います。学術的な基礎研究については、企業等からの助成が受けにくいものの、(非学術的な成果も含め)応用研究のベースになっているので、外部資金を獲得するよう指導するのではなく、各研究機関でそれなりに確保すべきではないかと考えます。応用分野では、産官学と連携しながら、外部資金等の活用に重点を置くべきではないでしょうか。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1419 将来のイノベーションのために学術研究・基礎研究があるという意見が多いような印象を受けるが・・・学術研究・基礎研究はそれ自体で価値がある。イノベーションがあつて学術・基礎研究が発展し、また学術・基礎研究があつて、イノベーションが進んできたということは、歴史が示してきたことであり、両者は車の両輪である。国の予算のある割合を資金配分機関から適正に配分しようとするのであれば、マネジメント人材や審査員の数を増やすことが必要であろう。(研究者の負担を減らすためには、まずは数を増やすことが重要ではないか)(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1420 基礎研究には短期的成果を求めすぎず、おおらかな目で見守る態度が必要。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1421 研究者側に貴重な基礎研究成果を持ちながら、応用研究に繋げる姿勢に欠けている場合も多く見られる。基礎研究から特許出願へ、さらに応用研究に結び付ける意識を学生・院生の段階から付けさせることが重要で、かつ基礎から応用への研究展開を研究費申請や特許出願を含め、特に独立間もない若手研究者に対して、包括的にサポートするURAなどの体制を充分に構築する必要がある。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1422 大学独自の研究費が極端に減ってきているため、競争的外部資金に頼らざるを得なくなっており、相対的に学術研究・基礎研究は研究資金に困窮する傾向にある。大学独自の研究費を手厚く配分する必要があると感じるが、困難な状況である。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1423 JST CRESTは大変素晴らしい制度で、今後の成果が大いに期待できる。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1424 (* 基礎研究の多様性は科研費などで担保されているが、それでも、緊急性・話題性のある課題に偏りがちである。これは、申請者サイドだけでなく審査する側のメンタリティにも問題があると思われる。*) 例えば、我々の日常生活を変えるまでの道筋(科学技術成果の社会導入、推進、定着)を、現場の研究者やディレクターが考えているか？すぐに論文にできるメトリックのはっきりした観点からの研究に注力しながら、その周辺までの目配りができているか？目配りをサポートする人材・体制があるか？(*) 制度が増え、さまざまな局面に適した制度が整備されているとは思いますが、逆に、制度間に選択と集中が働き、多様な研究の進め方に制約がかかっているか？(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1425 役に立つテーマの重視を掲げているが、採択されたテーマが応用面への程度インパクトを与えられたかの評価が不十分で、本当に役に立っているのか、わからない。例えば、数十年前に実施された極限作業ロボットプロジェクトなど。(大学、社長・学長等クラス、男性)
- 1426 知的財産に対する支援などが短期あるいは単発的であり、短期間の成功を求めるなど長期支援型になっていない。我が国として支援すべきテーマはしっかりと支援しないと、研究成果の海外流出を止めることができない。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 1427 基礎研究の推進とイノベーションにつなげる役割を同じ研究グループに担わせることは得策ではない。発展の見込まれる基礎研究を行った研究者・グループの業績を評価し、その後発展した内容についても評価を加えて、別の研究テーマについて邁進することについて、たいして研究費を拠出しても良いのではないかと。イノベーションは別の考え方や技術が必要なので、その分野に長けた、研究者・グループに行わせることも良いのではないかと。要は、基礎研究、応用研究、イノベーションに役割分担があっても良いように思われる。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 1428 競争的研究費の申請により研究時間が削減されている(大学、部長・教授等クラス、男性)

- 429 「将来有望な研究開発テーマの発掘」は、大変難しく、それを評価することもそれほど簡単ではない。逆に外部資金獲得につながる研究テーマ(しかもそれが将来有望であるという保証も実績も無い)の方向に研究者を向かわせる弊害を生んでいる。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 430 長年産学連携などに関わってきているが、最近、基礎研究をイノベーションに結びつけようとするのは、意味が無い、不可能と感じている。本当の基礎研究が将来どの様に役立つかは、結局、誰にも分からない。目先の役立つことには気づいて、それを将来的なイノベーションと勘違いしている。あるいは、実際は、基礎研究でない、すぐに応用が利く研究を、応用に結びつけて、イノベーション出来たと自己満足している。あまたのプロジェクトや、集中的な研究費の配分は、目先のことに役立っても、日本の基礎研究の基盤向上には役立っていない。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 431 大型の公募型研究費については、それまでの研究実績にあまりに寄り過ぎている印象を受ける。新たなものを育てる体制の確立がないと、イノベーションを興すような研究は育たない。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 432 競争的資金の配分は結果として旧帝大偏重になってきており、特色ある研究の発掘はあまり機能していない(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 433 問3-01関連として多様性についてかなり心配である。多くの国ファンドにおいて、方向性やフェーズががちがちに縛られていてダイバーシティが欠如しているように感じられる。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 434 だから何だと云われるような研究成果を、公表して多くの研究者に知らせることで、応用を促す。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 435 小額で良いので、学術基礎研究を行いやすい研究費を御願ひできないであろうか、特定研究分野に集中させる研究費配分をもうすこし改めていただきたい。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 436 若手研究者向けの学術研究・基礎研究を支援する施策やセミナーがあると良いのではないか。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 437 資金配分機関による戦略的資金配分と、萌芽的基礎研究資金とのバランスが重要である。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 438 研究者ごとにサポートする体制については各機関まかせであるが、公的サポートがあってもよいと思います。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 439 有望なテーマを選択して支援するマネジメントは十分とはいえないが機能しているように見える一方で、有望になりうる萌芽的な研究のすそ野は狭まってきているように感じ、その方面の支援のマネジメントの難しさを感じる。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 440 研究費のマネジメント規則が毎年複雑化している。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 441 AMEDによる知財支援により、研究成果の活用が効率的になっていると感じている。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 442 いわゆるピアレビューのシステムは、それに変わる方策が見あたらないので、継続するしかないだろう。一方で、資金配分機関のプロジェクト(事務)担当者には、研究者とのパイプ役として明らかに不適合、あるいは能力不足と思われる人材が混ざっている(結構多いのでは)。これは、明らかに研究の阻害要因になっており、イノベーションを妨げている。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 443 研究費の多くがポストドク雇用費に回されている現状では、研究費の継続性が重要だが、十分考慮されているとはいえない。せめてAward Yearを設定して開始時期を調整する様な配慮を考えていただきたい。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 444 公募型研究費の申請・審査は厳格を期さなければならないと思います。しかし、申請時の研究者の負担は相当に大きく、もう少しその負担を軽減することも検討していただければと考えます。また、各省庁内局による予算管理等の取り組みは評価できますが、果たして十分な支援が実施されているか疑問です。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 445 科学技術に対する研究費が現実的な成果重視型となり、夢のある未来型の研究に対する予算が減少した。研究期間も短く、大きな発展的成果が期待できない。将来のこの分野の人材育成面でも危惧される。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 446 研究者の負担軽減があまり政策上考慮されていない。とりわけ、研究者は教員の側面もあり、学生への教育業務を持っている。また、学内の行政役職や教授会出席などもあり研究時間の確保が厳しい。研究費マネジメントを軽減させ、研究時間を確保する施策を検討すべきである。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 447 設問3-04の考え方、そのものが、極めて危険だと思います。研究初期の段階で、本当に優れた研究テーマかどうか判断は不可能です。その意味で、幅広いバラマキも必要と考えます。少なくとも、10年以上前の地方の国立大学の一研究室程度の予算は…(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 448 公募型研究費の配分に当たって、成果が確実に出るものへの配分比率が高過ぎると考えます。リスクがあり資金も掛かる研究に、日本全体として投資する部分を増やさないと、国としての課題のブレークスルーが困難になると思います。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 449 企業においては、課長、部長に昇進するとマネジメント研修を実施している。大学においても例えば教授になる段階で全員にマネジメント教育を実施する必要があると考える。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 450 各府省庁間でのプログラムの整合性は相変わらずとれていないように感じている。(大学,部長・教授等クラス,男性)
- 451 学術研究、基礎研究という言葉は定義が明確でない。例えば、同じ内容の研究でもA分野では基礎だと考えていることも、B分野では応用であるということもある。企業の製品化の中にも基礎研究は存在するはずである。(大学,部長・教授等クラス,男性)

- 452 競争的資金以外の大学予算が減っていることを考えると、競争的資金の割合が増え、評価者への予算も増えているため、JSTなどが執行する際の人材もレベル向上しているということではある。しかし、先進国と比べると戦略的な資金配分が十分とは言えない。戦略的資金配分に対する組織や研究者の(意識)対応、が十分出来ていないので、厳しい評価が出来ないというのが実情であろう。アウトプット(論文発表)、アウトカム(社会貢献)へ導けるような公正で厳しい評価手法の検討も分野横断で共有したい。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 453 審査員の評価が必ずしも基礎的な研究への評価につながっていない。審査員の選定方式を工夫する必要がある。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 454 成功した研究と失敗した研究の選別が不十分。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 455 ステークホルダーはイノベーションの正しい意味を理解しているのだろうか。目利きは必ずしも優れた研究者である必要はないが、研究を理解してはならない。現在多くのPDに就いている方々が目利きであるのか、大いに疑問がある。単に年齢順に押し上げられているのではないか、ハイリスク・ハイリターンの研究を取り上げて推進することも良いが、プロジェクト終了時の評価がきちんとなされているのだろうか、疑問である。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 456 米国と比較して、積み上げ型研究の予算と教育は概ね上手くいっている一方で、新しい概念の創出によるイノベーション型研究は著しくアクティビティが低い。これは研究予算と教育の縦割り構造による。学際的研究・異分野融合型研究が今後のトレンドになっている一方で、これを支援する体制がほとんど存在しない。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 457 企業のニーズを汲み取る施策がふえている点は良いと思う。一方で、純粋な基礎研究に対するサポートがジリ貧である。また、研究者側にも問題がある。本来ボトムアップ型であるべき科研費の大型研究で、企業との連携や応用への出口をアピールする風潮が強まっている。これを認めて評価することになると、基礎研究ですら実質的に実学指向研究によって占められることになる。評価基準にも、「企業との連携、社会イノベーションの可能性は一切考慮しない」と明記した科研費が必要であろう。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 458 優れた研究成果が得られるには、多くの場合長い時間がかかる。長期的視座での支援が重要である。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 459 研究費の間接経費や人件費をより柔軟に扱えるようすべき。大学そのものでなく現場の裁量でなされるべき(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 460 基礎研究から実用化までの連続性はまだまだ乏しい。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 461 単発でしか終わらない研究費が多いです。保健医療関係ではAMEDは厚生労働省の指示に従っていますが、時代の要請に応じているものの、息の長いプロジェクトが不得手だと思います。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 462 流行に流されやすい傾向があるように見受けられ、人気のなくなった分野でも気長に投資する粘り強さが足りない。また、どんなに時間が必要なプロジェクトでも「発展・継続」と言う形で継続的に予算が付くことは少なく、むりやり新機軸を出すような不自然な計画にせざるを得ない。研究助成事業の運営については次第に合理的なシステムになってきたのではないかと思います。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 463 公募でなく、基礎研究に充てる基盤的経費の配分が必要(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 464 大学のマネジメントがしっかりしているので助かっている。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 465 近年の基礎研究には複雑系科学分野も多いことから、大規模な研究グループの参画が必要な場合もある。しかし、基礎研究分野の予算はこぢんまりしていて、時代の趨勢に対応していない。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 466 資金配分機関やPD自身の評価のために、体裁の整った成果ありきの研究や、一部出来レース的な資金配分になってしまっています。マネジメントの名の下で研究者の裁量が大変低くあつかわれているような気がします。また雑務も大変多く、本来の研究に集中することが難しいです。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 467 研究費マネジメントのためのマネジメントにあまりにも労力が必要である(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 468 政府の公募型研究費の審査では特定の大学院大学が優遇されており、地方大学が獲得するには高いハードルがあるように感じる。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 469 研究評価者の待遇を改善すべき。競争的資金にむかない基礎研究を少額でもいいから支援すべき。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 470 研究費の配分機関からの要求において、応用に直結する研究が求められ過ぎて、今後我が国では基礎研究に立脚したノーベル賞級の研究成果をだすのが難しいと思われる。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 471 私は、独立して以来、自腹を切っても秘書を雇用しているので、予算管理や論文管理などは、他の研究者に比べて労力を使わなくても良い。我々の時給の1/3~1/5で雇用できる人が出来る仕事を研究者が行っている。研究に比べると簡単であるので、それを嬉々としてやる人も多い。結局は自分の時間がなくて、研究の展開が遅れ、その結果外部資金もとれず、となる。それを解決するのは、大学が間接経費で秘書を雇うことである。前述したが、間接経費は運営費交付金でないことを明確にしてもらいたい。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 472 一部の審査員は研究内容より申請者の所属を重視している傾向がある。(大学、部長・教授等クラス、男性)

- 研究者の負担(特に研究とは、直接関係の無い部分に対する負担)を減らす目的で、導入されたはずのURA制度も、中途半端な状態で置かれており、本当に研究者の負担削減のための機能が十分に発揮されていないと思われる。また、ステージゲート制が、研究者の自由な発想を圧迫している場合もあるのでは、と思う。(目の前のゲート突破だけのための近視眼的研究が増えることを懸念している。)(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 473
- 公募型研究費の審査員には多忙な研究者がなることが多く、審査は片手間に行われており、的確な審査が行われているとは言えない。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 474
- 基礎研究のすそ野を広げる研究費の確保が不十分である。先行投資する研究チームの科学的、リーダーの人物的評価を的確に行うシステムが出来ていないと思われる。特にAMEDに予算と権力が偏り過ぎている。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 475
- 研究費支援機関のマージメントについての改革は試みられているが、まだまだ研究マージメント人材のレベルが低く、また、そのような人材養成が十分ではない。既に目立っている研究分野や人材への集中は悪くはないが、我が国ではかなりレベルの高い若手や隠れた研究シーズがあるのに、それを見出す体制・制度となっていない。最近のPM制度など効果を生み出す制度が試みられているものの、支援機関は応募を処理することに追われ、優れたシーズを見出す人材構成とはなっていない。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 476
- 継続性を保ちつつ支援することは、例えばJSTのステージゲート制のようなものがあるが、研究予算の絶対額が少ないため、その機能を十分に発揮できていないように見える。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 477
- 基礎研究と産業界の今後を強化するための議論が不足していると思う。業界毎のCTOとの議論が必要と思う。学術研究、基礎研究は真理の追及を産業界を気にせずしていけばいいと思いつつながら既存ビジネスで成功していてもその技術基盤の原理原則が意外と究明されていない場合もありそういう不明瞭な分野にも光を当てるべきである。(大学、部長・教授等クラス、男性)
- 478
- 大学への交付金も国公立と私学(大規模校と小規模校)、都市・地方で大きく異なり、研究のしやすさも大きく異なっている。現状の研究資金配分方式のままでは、富む所は益々富み、清貧の所はますます清貧に陥る危険がある。もっと多くの研究者が応募しやすい体制を作り、多忙な(部下も院生もあまりおらず、担当学部学生と担当授業が過大な)研究者が応募を諦めたり見逃したりすることの無いような配慮が必要である。(大学、部長・教授等クラス、女性)
- 479
- 教育研究の広い分野において、教育研究そのものよりも付随する雑多な業務に時間を取られ過ぎるというのは、自分を含めて多くの研究者が感じていることですが、社会が成熟するにつれて付随する負担が増大することはあっても軽減されることは無いように思われます。(大学、部長・教授等クラス、女性)
- 480
- JSTでも科学技術コミュニケーション活動など、社会全体のすそ野を広げる活動にもう少し重点を良い。(大学、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 481
- 我が国では、科学技術を、特定の工学分野等に限定し狭く捉える傾向があり、競争的研究費の割合が増すにつれ、基礎研究の多様性が損なわれている。しかし、多様性を重んじるばかり、国際的な競争力のない分野や研究者にも平等に予算を配分すべきだとはならない。基礎研究に対し広く配分しつつも、国際的な水準で評価し、一定程度のフィードバックを行う必要がある。加えて、基礎研究をイノベーションに繋げる、イノベーションを見据えた基礎研究を行うためには、研究者のみならず、資金配分機関が自ら研究開発マネジメント・イノベーションマネジメントに関する研究開発を行い、体系的かつ卓越した知見を蓄積し、実務に反映していくことが必須であるが、原課も含めて、そのような取り組みや知見は極めて脆弱である。(大学、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 482
- 研究費のマネジメントの柔軟性が増してきており、進捗に応じた研究が進められるようになってきており、PDの目利きや采配によって新たなイノベーションが創出されていると感じる。一方で、資金配分機関によっては古い体制のマネジメントのままである。申請者らの負担については、電子手続きも増えて便利になってきたが、未だに入力項目や書式の数が多く、体裁重視のために入力がしにくくなっていることも多い。すべてをオンラインでできるようになることが望ましい。また、研究者でなくても記入できる内容も多く、マネジメント専任の人材やアシスタントの雇用のための支援が期待される。(大学、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 483
- 競争的資金の継続性には非常に疑問を感じる。基礎研究をじっくり継続する基盤があまりにも乏しい。(大学、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 484
- もっと間接経費と間接要員を増やして、研究者の負担を減らし、研究に打ち込めるようにすべき。(大学、その他、男性)
- 485
- 省庁縦割りのため、記述されているようなstep間でのつなぎはほとんど不可能。各省庁担当者の交替が頻繁で、立案者と実施者が異なるために、研究開発の方向が変えられてしまうケースが目立つ。(大学、その他、男性)
- 486
- ・PDの人脈と専門性により採択課題が決定されていると感じることがある。・短期的・短絡的な方向性により、課題採択が左右されると感じることがある。・公募の形態が多様すぎるだけでなく短期間での変更も多く、長期間を要する材料開発などのサポートが続かず製品化までたどり着けない。・申請書類のフォーマットがバラバラであるだけでなく、枠線の多用によりその調整にも負担がかかる。申請書は文字数、ページ数、余白サイズ等で制限し、枠線は最小限にとどめるべき。(大学、その他、女性)
- 487
- 「基礎」か「応用」かといった2項対立的発想は無益。産業技術として将来活用されるには根源的な「基礎」研究が必要。(公的研究機関、社長・学長等クラス、男性)
- 488
- 制度や仕組みが変わり過ぎる。5-10年程度の期間での継続性が必須。(公的研究機関、社長・学長等クラス、男性)
- 489
- 審査員を若手も含めて多様な人材から選ぶ方が大きな研究につながると思います。確立された研究のみでなく将来性のある研究も評価すべきと考えます。(公的研究機関、社長・学長等クラス、男性)
- 490
- 体制はある程度できつつあると思いますが、評価者を含めそれを運用する人員がまだまだ足りないと思われます。(公的研究機関、社長・学長等クラス、男性)
- 491

- 492 イノベーションは基礎研究の継続から生まれる。基礎研究に短期成果を求めるのでは、たいしたイノベーションを生まないだろう。基礎研究重視を徹底した上で、短期決戦型のイノベーションを進展させる仕組みとすべきである。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 男性)
- 493 前述のとおり、運営費交付金の多くが現有施設の維持等に使わざるを得ず、当機構が本来行うべき基礎的な研究が十分に実施できない状況にある。また、近年、外部資金の趣旨が、研究成果の社会実装をめざす開発段階に大きくシフトしており、基礎的な研究への資金獲得が大きな問題となる。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 男性)
- 494 研究費の審査員の確保に問題が生じている。多くの研究者が研究費をもらう立場に居たいため、評価者になりたがらない。その結果、老人が評価者に多くなり、現在の課題に対する評価が適切か？疑問が残るところでもある。一方で、流行りに流されない、という側面もあるが。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 男性)
- 495 より質の高い学術研究を行おうと考えるならば、研究申請について、一回のやり取りではなく、学術論文の採択のようにrevise制を敷くべきだと考えます。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 男性)
- 496 研究予算が例えばオリンピック開催や、政局に左右されて減ったり採択数が大きくそれに左右されることが多いので、支えている事務方も半ば諦めてしまっていることは残念である。未広がり予算とまでも行かなくても、いつ革新研究が生まれるか誰にも分からぬ訳だから最低保証の予算の確保をしたいものである。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 男性)
- 497 現在、基礎研究の成果としてノーベル賞につながっている研究は主として1990年代前後に研究予算が厚く配分された成果である。最近では実用化研究ばかりが叫ばれ、基礎研究をろくにしていないようなテーマを直ぐに実用化研究として多くの予算を配分する傾向が見られるが、基礎研究をせずに実用化研究ができる訳でないことを再認識する必要がある(中国は最近、どの分野でも基礎研究と実用化研究を並行して進めており、中国に追い越されている分野が多々ある)。公募型研究においても常にこの体制が重要で、基礎研究と実用化研究のバランスを取ることに、次の5年で実を結ぶもの、10年以降で実用化を目指すものをきちんと戦略を持って研究費を配分すべきである。また、基礎研究で成果が上がったものを実用化研究に継続するシステムも重要であり、そのシステムも十分とは言えない。特に社会インフラやエネルギー分野は研究開発に多くの時間を要することを認識していないと将来、日本がこの分野で中国の技術により席捲される可能性が大きく、危機感を持っていただきたい。PDや目利きは任期制にして多様性を重視することも重要である。(公的研究機関, 社長・学長等クラス, 女性)
- 498 理系の研究分野はJSPS, JST, AMEDなどそれぞれに特徴を持ったファンディングをして研究の発展段階に応じたファンディングが可能になってきているが、文系はどうだろうか。お寒い限りである。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 499 今後はPD(プログラム・ディレクター)間のばらつきをどう均てん化するのが課題ではないか。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 500 課題終了時の評価がまったくできていないのが現状である。AMEDの厚生労働科学研究に振り分けられている研究費は、展望もなく2次募集、3次募集をおこなっており、年末の工事(年度内消化)とまったく同じである。AMEDは政策にあわせるならその政策が明らかになっている期間に公募をして、1年だけの研究期間に数千万円もの研究費を助成するのはやめていただきたい。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 501 現状では、基礎研究の成果はある程度、生み出されているが、将来の発展のためには、基礎研究の多様性を十分に確保する必要があるのではないか。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 502 前述のとおり、運営費交付金の多くが現有施設の維持等に使わざるを得ず、当機構が本来行うべき基礎的な研究が十分に実施できない状況にある。また、近年、外部資金の趣旨が、研究成果の社会実装をめざす開発段階に大きくシフトしており、基礎的な研究への資金獲得が大きな問題となる。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 503 領域などにさらにきめ細やかなスポットを当てる配慮が欲しい。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 504 学術的研究を推進するべき資金配分機関が、比較的短期間での成果を求め社会展開の可能性を提案段階から書かせるようなやり方は、基礎研究の多様性を著しく損なう結果につながる。将来のイノベーションの種を芽にもならない段階で摘み取るような資金配分の仕方はすぐにでもやめるべき。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 505 説明責任や経費の透明性確保の必要性は認めるものの、それらへの対応要求が過度であり、結果として最も本質である研究成果を生み出すことを阻害しているように感じられる。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 506 基礎研究とイノベーションは別物で、基礎研究を強化したからといって、産業力が強くなるわけではない。基礎研究を支えるコミットメントに加え、イノベーションにつながる工学研究を同じ土俵で評価しても意味がない。基礎研究はhigh impactな雑誌への掲載を目指すことが目的であるが、工学研究は産業界に貢献できる基礎研究・イノベーション・人材育成を目指しているため、high impactな雑誌等への投稿で競争させる必要はない。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 507 様々の研究費が〇大, 〇〇などの一部の研究者に集中しすぎる。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 508 すべての学術研究・基礎研究がイノベーションにつながる必要があるのか、非常に疑問である。その意味で、科研費がいい受け皿になっていると思う。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 509 基礎的な研究への公的資金の投入の必要性は、従来から言われているが、未だ短期に成果が期待できる提案に資金が流れやすい傾向にあると感じる。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)

- 510 少なくとも私の周辺では、文科省に顔が利く一部の研究者の意見が尊重され、お金を配る側の自らの調査に基いた予算配算が必ずしも行われているとは思えない。海外等で話題になっているテーマに予算配算をしようとするような如何にも日本的なやり方である。これだけで独自のイノベーションというのはたして生まれるのであろうか？ 予算を配る側に対しては、真に、トップを目指すプロの研究者を選び出す目をもってほしい。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 511 資源配分機関の採択テーマについては、偏りが見られる時がある。その時々で注目される分野はあるものの、分野の隔たり無く内容を精査すべき。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 512 領域を問わず一定の採択率を確保している日本の科学研究費は良いシステムであり、維持し、さらに拡充してよい。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 513 難しい問題ではあるが、ある程度の無駄が成果を出すためには必ず必要である。全てがうまくいくという話はない。失敗を繰り返して、その経験が成功に繋がっていく。そういう長期的な視点を失わない資金の回し方が必要である。そういう点では、昔のゆとりあるマネジメントの方が、スケールの大きな研究を生み出し得たのではないか。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 514 嘘をついてまで関連付けをして、自分の好きな研究を進めている例を見ることがある。その意味では”自由に”研究できている。科研費や外部資金の獲得について、申請作業が膨大すぎる。その割には専門性の嘘を見抜けず、採択している場合が少なからずあるようである。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 515 問305に関しては、すぐに基礎研究に関してすぐに成果を求めすぎる風潮があると思います。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 516 研究の基盤となる運営費交付金は削られ、研究費は公募の外部資金に頼っているのが現状。しかし、公募による研究費はひも付き予算のため、自由度がなく、結果、研究費用の無駄が生じてる。フレキシブルに費用を使えるような仕組みが重要だが、その仕組みを決めているのが役所の役人であるため、改善を望むのは絶望的。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 517 資金配分機関によっては、研究分野や実施機関に制限が設けられており、公募する機関が制限されている。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 518 研究費の資金配分機関およびその審査員に対する評価が十分に行われていない。資金配分機関や審査員には、助成する研究課題を選んだ責任がある。提案された研究課題を公平適正に審査する者がいないと感じる場合もある。審査員は職位や経歴だけではなく、本当にその分野の将来を見通すことができる人が担うことが望ましい。そして固定化しないほうがよい。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 519 基礎研究の充実が不可欠にあるにも関わらず、それに対するサポートが不十分。また、臨床研究は、それを施工するインフラに対する投資が不十分。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 520 研究費配分側が、十分な経験と知識を持って戦略的に配分する必要がある。また、その配分した結果の研究成果について、配分決定側が評価されるシステム(良い結果であれば、良い選択眼を持って配分したことになり、そうでなければ逆である)が必要である。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 521 予算管理など研究者本人がしなくてはいけない事務仕事が多すぎると思います。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 522 政府の公募型研究費は研究者の負担をますます増加させる傾向になってきている。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 523 基礎研究も応用・開発研究も重要であるが、大学と公的機関(産業省傘下等)との合理的な仕分けが不十分であり、基礎研究の発展と、イノベーション創出のいずれにも中途半端になっている感がある。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 524 研究マネジメント力と研究展開能力を十分見極めることができるプログラムディレクターは必要と思うが、一方で基礎研究の成果を正當に評価するシステムも併せて必要だと思う。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 525 学術研究・基礎研究に供する予算が確保できない状況にあり、新たな研究シーズの獲得が困難な状況にある。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 526 一部の省庁が管理する研究費は応用につながる成果のみに配分されるために、該当する分野の研究の衰退が危惧される。応用研究についても社会情勢に合わない目的が設定されている。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 527 ニーズに基づいた研究、役立つ研究、社会実装が明確な研究が重要視され、こうした説明が明確にできない学術的な基礎研究の実施は非常に困難な状況となっている。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 528 省庁予算は、当初に想定されていた予算が突然大幅に減額されることが多く、このため、必要な課題を無理に途中で中断したり、研究計画を大幅に縮小せざるを得なくなる。また、予算配分が遅く、研究開始が大幅に遅れることが常態化している。科研費のように年度を超えた予算繰り越しが認められるような制度に変更すべき。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 529 公募型研究費等の予算については、時々の流行に流された政策判断によって予算が傾斜的に配分されているように思われる。流動的部分と固定的部分を明確にすることが、長期的な研究人材確保のためにも必要では無いだろうか。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)

- 530 長期(例えば5年を超えるような)に渡るプログラムが無い場合、目先の技術開発もしくはすぐに結果がでる研究提案になりがち。あるいは長期のプログラムや制度(10年)を作っても、5年目の第三者による中間評価を待たずして予算を切られる事例もある。JST, JSPS, NEDOの横断的な整理が必要。文部科学省系でしっかり基礎をやって、経済産業省系で実用化領域に集中することが必要。現在は、文科省系でも実用化を促しているのは、将来の日本の科学技術にとって良くないのでは。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 531 選択と集中の母数となる裾野を広げる努力を怠らないことが重要。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 532 研究成果として、形のあるものを求めすぎているように思われる。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 533 個別となるが、SIPでは利害関係の扱いが雑であり、PDの所属機関研究者提案課題が採択、途中で研究実施側がサブPD側を兼務する等、が起きている。いずれも、利害関係審査の時のみ審査から外れれば良しとしているが、ライバル関係にある提案への評価を低くする危険性があり、基本的に利害関係者を極力排除するという基本原則が崩れている。一つの原因は民間人の登用であり、研究者倫理をきちんと教育されていない層が問題を引き起こしている。〇〇等、会社ぐるみの不正を行っていた企業からの登用にも注意を払うべきと思う。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 534 昨今の科学技術に関する研究環境に置いて、基礎研究にかかる予算が小さすぎると、研究成果を急ぎ過ぎるきらいがある。研究成果を出すのに時間がかかる基礎研究分野に必要な予算が配算されていないと考える。このままでは、基礎研究が衰退し、日本の将来にとって全く良くない状況であると考え。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 535 中長期的な視点が国の政策としてかけている。欧米各国には分野に応じた予算配分機関があり、長期的視点にたった行政を行っている。その裁量は研究経験のある第一線で活躍した人材が担っており、研究現場と動向に精通している。日本にはそのようなエージェンシーがなく、短期的な個別的な政策しか行われていない。政府予算が限界を迎えているなかで、個々の専門性を伸ばすとともにこれらをつなげることも非常に重要となっており、コヒーレントなコラボレーションベースの研究に転換していく必要がある。コラボレーションを促進するための調整役が必要だが現状ではこのような機能は日本の行政機構にはない。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 536 私が研究代表者を務めている研究開発課題に関しては、4年間の研究開発期間の間にPOが3回も変わった。研究開発内容を貫してマネジメントするためにも、同一課題は同じPOが責任を持ってマネジメントするべきと考える。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 537 若手の基礎研究を定常的に少額でもサポートできるシステムがあればよいと思う。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 538 科学技術や教育は迂遠な投資。費用対効果をあまり成果主義が出すぎではないか。テーマや人材育成、マネジメントなど研究環境は縮んできているのではないか。ノーベル賞が続いているのは過去の投資の成果であって、この先は厳しくなっていくと思う。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 539 我が国では、すぐに成果が出る、社会に役立つ研究のみが優先されているため、将来的なイノベーションの源としての基礎研究の多様性は、確保されていないと思います。目先の成果にばかり目を奪われてい、基礎研究には研究費がほとんど付いてないと思います。10年以上後を見据えた長期にわたる基礎研究というものがあるのもいいと思います。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 540 いろいろな取り組みは行われているが、強烈にマネジメントができる人も何人か雇ってみるのも必要か。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 541 個々の研究費の額が少ないため、必ずしも厚くない申請書を多数書いて複数の研究費を獲得しないといけないのが現状であり、マネジメントコストがかかる。間接費をしっかりと措置すること、資金規模を拡大するとともに2段階審査を行い申請負担を軽減すること、申請時期を単年度会計の弊害から放ち常に申請可能とすることが必要。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 男性)
- 542 課題実施手続きや評価にかかわる研究者の負担が大きいため、早急に低減が必要である。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 女性)
- 543 政府公募型研究(特に文科省委託事業やSIPなど)プログラムディレクターのイニシアチブにより、イノベーションにつながる研究開発が加速している。PDの実行力により異分野研究者や現場利用者との交流をもとにした継続的な学術基礎研究も、この数年生まれてきている。一方研究費マネージメントに占める時間は膨大であり、半期ごとの報告などPDや管理機関の判断により、現場ごとの温度差を反映した、フレキシブルな報告の形態にしてほしい。研究費マネージメントに割く時間が数年前に比べて膨大化しており、現場研究者は疲弊しきっている。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 女性)
- 544 研究機関の外部評価委員の顔ぶれによって基礎研究の実施率が上下する。特に基礎研究の重要性を理解しない高齢者の評価委員が多い。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 女性)
- 545 学術研究・基礎研究の促進や研究費のマネジメントにおいても、国際的評価の視点が不足していると感じる。評価の過程に、国外研究者をもう少し導入してはどうか。(公的研究機関, 部長・教授等クラス, 女性)
- 546 固定的に配分されていた昔と異なり、かなり資金の流動性が高まったと思う。(公的研究機関, 主任研究員・准教授クラス, 男性)
- 547 まとまったお金は、JSTや内閣府などからトップダウン的に出ているが、これらを減らして、科研費等のボトムアップの予算を増やすべき。(公的研究機関, 主任研究員・准教授クラス, 男性)
- 548 特定の社会的問題を解決するための研究であるべきという論点が強調されすぎていると感じる。問題を解決するための出口イメージからスタートして帰納的に「今やるべき研究」を設定すること自体に異論はないが、このトレンドが行き過ぎると「そのカテゴリーに含まれない研究はやる意味がない」となり、研究者の自主性やモチベーションを大きく削ぐことになる。これでは本当に新しいもの、研究成果は生まれてこないのではないかと。(公的研究機関, 主任研究員・准教授クラス, 男性)

- 549 ■「研究者の負担を低減するような取組」どころか、実情は、書類作りばかりさせられて「負担が増加することばかり」させられている。
■資金配分機関の役割に応じたPD(プログラム・ディレクター)等の目利きは、結局、いつもの研究者ばかりが選ばれている。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 550 科学と技術,基礎と応用の区別が全くなされていないと感じます。突出した基礎研究に関してそれなりの予算を準備することはもちろん重要ですが、一方で基礎が応用に直結することはまずないことを認識した上で予算配分を行うべきと考えます。実際,ある程度の基礎研究の期間をすぎると応用研究のフェーズとなりますが,その際,実現不可能な応用を提示し,それに対して多くの研究予算が割かれていることについては違和感を感じます。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 551 公募への申請およびその審査に多大な労力が費やされている。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 552 本当の意味で基礎研究が尊重されているとは思えない。その時々流行に乗った研究が採択される傾向が強いと思われる。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 553 科学研究費助成事業は,基礎研究の推進に,大きな貢献を果たしております。一方で,基礎研究で得られた成果がイノベーションに繋がらないことを,問題と感じております。JST・AMED・NEDO等は,実用化研究に研究テーマが集中しているため,基礎研究から実用化研究への橋渡しとなる,挑戦的研究をサポートする新たな制度が必要と感じます。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 554 日本の研究者の英語力が弱すぎるため現代的な要請に十分に答えられていない。INBREEDINGな内部候補の採用がいまだにならず,外部(三日留学ではない)を経験した視野の広い研究者が少ない。この2大欠点は強くリンクしている。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 555 基礎研究の成果は,研究の基礎体力のようなイメージを持っています。基礎体力を持つことはイノベーションを生み出すことの必要条件だとは思いますが,十分条件ではないように思います。従って,基礎研究の充実がイノベーションの創出に直結するとは考えにくいです。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 556 イノベーション・応用研究に重点が置かれており,基礎研究の予算配分が少ないように感じる。成果がすぐ目に見えそうなもの,インパクトが大きそうなものに偏り過ぎている感がある。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 557 研究費の使用に対してコンプライアンスを重視しすぎるあまり,購入までかなりの時間を要することが多い。また,全ての予算について次年度繰越を認めて欲しい。単年度予算で購入できないような高価な分析装置などの購入ができるような工夫を認めて欲しい。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 558 学術研究・基礎研究について,大型予算よりも低予算で実施できる幅広い研究テーマの支援を充実していただきたい。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 559 政府の公募型研究については得られた成果がどのように蓄積され,どのように日本の発展に反映されているかが不透明。成果の羅列だけではなく,公募型研究で得られた成果をどのように政府が活用しているかを示すべきと考える。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 560 資金配分機関は従来のような省庁間での資金配分の縦割りを無くす目的で設立されているが,十分に機能しているとは言えない。特に,申請者への手続き負担低減への取り組みがすこぶ遅れている。資金配分機関の手間を省くことのみ優先されている感が強い。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 561 単年度会計をなくし,余った金額を簡単に国庫に返せるような仕組みを作るとよいと思います。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 562 我が国においては,膨大な基礎研究が実施されているが,それらの融合性や学際性については発展段階にあると感じます。学術分野が細分化している点,基礎科学と応用科学がかい離している点を埋め合わせる研究が活発に登場するような状況を作る必要があると感じます。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 563 農林水産省の競争的資金に関連する書類は多すぎる。同じような内容の膨大な書類を作製しなければならず,研究に支障をきたしている。また,5年計画のプロジェクトが3年で打ち切りになったり,大幅な減額が提示されたりとモチベーションの大きな低下を招いている。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 564 目先の技術開発に向けた応用研究が優先されて,イノベーションに繋がる基礎研究がやりにくい状況にあると思う。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 565 研究費配分において,研究分野や研究者の所属機関あるいは出身大学による偏りがあると思う。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 566 科学研究費助成事業について,報告書の公開が早すぎるので成果の公表が追いつかず,詳細を記せないため,全体的に内容がないことばかり記載しているように思う。公開のタイミングはもっと延ばしても良いと思う。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 567 政府系の公募研究費については,計画変更時における支出の変更や消耗品の上限額など融通がきかない面が多々あると感じる。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)
- 568 研究マネジメントを高度化するための予算があってもよい。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,男性)

- 569 政府の研究マネジメントは、うまくいっているような気がしない。考え方としては「戦略的な研究助成」という概念はわかるが、想像上の産物のような気がする。自分自身の経験では、研究の中身をわかっていない役人があれこれ予算をかき回して、それに研究者が振り回されているだけ、という印象を受ける。結局のところ、千に三つも当たらない研究で、「選択と集中」はうまくいかないのではないかと、それよりも、科研のように「薄く広く」やらせてみて、芽の出、それが育つのを待つのが最善の戦略だと思う。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 570 よく言われることだが、応用研究や奇をてらった研究に資金を配分しがち。地味だけど継続的で重要な研究も支援すべき。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 571 イノベーションを目標に挙げた研究予算公募を多く見かけるが、実際はソリューションに重点を置いたものであり短期的成果を望まれるケースが多いと感じる。ソリューションを突き進めてもイノベーションへは辿り着かず、イノベーションを行うためには短期的成果を求めず基礎研究に集中できるような環境作りが必要不可欠であると考え。一方で、研究プロジェクトのマネジメントは必須であり、プロジェクトの本質を理解した有識者による進捗評価は課すべきである。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 572 研究費を獲得する際、目先の成果の出やすい、挑戦的ではない課題が採択されている傾向が強い。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 573 政府の公募型研究や研究機関の外部評価などで、短い時間スケールで研究の進捗状況をチェックされる場合があるが、評価を受ける準備に時間を取られるので、逆に研究の進展を阻害されている。評価が悪いと打ち切られるので、研究を進展させる事よりも、評価をしのぐための作業に重点が置かれてしまうので、逆に成果を出せなくなっていることを理解して欲しい。社会的な要請はほとんど短期的なものなので、それを気にしては真に革新的な発想は出てこない。基礎研究は社会的な要請とは切り離すべきである。もしイノベーションが欲しいのなら、研究者に余裕を与えるべきである。研究者を締め上げてもねつ造が増えるだけで何も生み出さない。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 574 科研費がもっとも利用しやすく、提案研究に集中しやすくと感じている。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 575 研究費の配分が目先の研究(実用化、産業活性化、国土強靱化に絡めたなど)に偏りすぎている。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 576 競争的資金や政府の公募型研究費など、役人が過剰に関与・差配する予算が研究費に占める割合が増大している。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 577 新しい分析装置など時代に合ったものが常に購入(レンタル)されて最新分析ができるように、組織内予算にて環境が整えられるようにしてほしい。予算が、施設内の古い装置の維持に使われてしまい、新しい装置購入ができない状況である。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 578 資金配分機関は管轄省庁の意向が強く反映されたテーマに基づいてプロジェクトを設定することが少なからずある。挑戦的な研究を行うにはPDにより大きい裁量権を与えるべきである。基礎的な部分を含む研究に関しては、3-5年たって初めて方向性が見えてくるものであり、5年間のうちに1-2回のステージゲートがある、というのは無理がある。申請や審査に関しては、いまだに機械判読性の低いExcelシートや、同じ事項を何度も記入させる書類など、負担が大きい。研究費によっては大部の印刷資料を審査時に要求するものもあり、負担が低減されているとは言えない。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 579 前項と同様、対極的な知的資産(=基礎研究の発展)の形成と、イノベーションへの活用などに関するポリシーが描けていない。したがって支援などがすべてスタンドアロンとなっている。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 580 ・JSTやNEDOの産学連携(特に個別型支援)については競争率が高く、ステージに応じた継続的支援が難しい状況。医療系については、AMEDに応募することになるが、同様に競争率が高く、また、初期段階の研究シーズの育成制度(フィージビリティ、マッチング)が少ないため、やむを得ず、JSTの制度に応募せざるを得ない状況。審査、評価に関しては申請者、評価者とも負担を軽減すべきで、規模、ステージ等によってメリハリを付けるべき。第3者評価にこだわらず、例えば、事後評価については自己評価のみとすることも検討すべき。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 581 AMED、NEDOおよびJSTの多くの部分については、学術研究・基礎研究に対する研究費ではなく、技術開発に近いように見受けられる。これでは、長期的には研究能力が衰退すると思う。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 582 基礎研究の多様性の確保、多様性の中での競争的制度的確保、評価システムといったものを組み合わせることが必要。我が国の場合、まだまだ不十分ではないか。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 583 大型資金の場合、研究費のマネジメント(申請-ヒアリング含む)に関わる労力が膨大なため、研究者の貴重な時間が割かれて無駄な状況と思う。能力の高い研究者はもはや公的研究費を利用していないように思う。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 584 年齢制限付きの公募を見直して欲しい。現状だと、留学や出産などの経験が不利になる場合がある。他にも、社会人を経て教育・研究の世界に入ってくるような経歴も「多様性」と考え、広く受けれる制度へ変えるべきである。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 585 出口寄りの課題に対する競争的資金の配分は多いが、基礎研究に関するものは少なく、運営交付金が減少している現況では、基礎研究が行いにくい環境にある。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 586 資金配分機関から配分される予算と研究機関運営費交付金予算で行う研究のスムーズなリンクや協働について、研究機関経営者の理解や、経営者側方針の研究現場へのフィードバックが不足している。(公的研究機関、主任研究員・准教授クラス、女性)

- 587 他人の研究の目利きやマネジメントのできる人間はたいして多くないのに、PMが適切に目利きできることが前提の予算制度が多い。結果、「必ず成功する」ことが求められるのでPMも冒険ができず、一度大きな予算をとった人のところにばかり予算がいつている(自分の力で目利きせず、他人の評価を参照して勝ち馬に乗ろうとしているように見える)。将来化ける研究ネタも、小さな予算があれば生まれるのだから、そういう意味で運営費交付金のような基礎研究資金をもっと潤沢にした方が、結局は将来の日本のためだと思う。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 588 幅広い分野において、基礎研究を重視する土台を作られることを望みます。資金配分機関が行っている大型予算枠において、研究費を集中することが必ずしも得策では無いと思います。特に若手研究者に対して、すぐ役に立つ、イノベーションに繋がる等を皆に強いることが独創性を低下しているように思います。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 589 チャレンジングな学術研究にたいして助成資金を直接得ることは一部の業績が著しく良い研究者を除けば難しい。そこで、多くの研究者は要請研究または開発研究の費用で得た装置等を利用してチャレンジングなテーマを並行して行ってきた。しかし、近年の政府の公募型研究費は、大型測定器等をレンタルすることを義務化し、研究資源を極力受託者に残さないようなルールになっており、現場としては苦しい状況に置かれている。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 590 医療分野を一元化するために、AMEDができたのは画期的と思われるが、たとえば、JSTとAMEDの狭間グレーゾーンに入ってる研究が出てきて、その分野の教員等、数人から、相談があった。提案できない状態にあるのは、実に勿体無い。また、健康器具、義手、義足等についてはJSTでも提案できるなど・・・内外共にわかりにくくなってる現状があるため、一度、外部へ、AMEDが出せる提案エリアをアピールしたいと思う。(公的研究機関,主任研究員・准教授クラス,女性)
- 591 科学研究費は基本的に採択後にきちんと結果が出せるものに対して、採択されている印象がある。それも重要なことだと思うが、必ずしも検討が不十分であったても良い発想、アイデア、熱意があればとりあえず研究費を出してみるという風潮(あるいは制度)があつていいと思う。(公的研究機関,研究員・助教クラス,男性)
- 592 近年は特に応用研究・開発研究が重要視され、基礎研究に向けられる意識が薄くなっていると感じている。また、このような傾向から、十分な基礎検討を経ないままに、応用研究・開発研究に向けた大型予算を組むことが必ずしも社会の利益にはならないのではないのかと思う。(公的研究機関,研究員・助教クラス,男性)
- 593 我が国では基礎研究に対して一定の理解はあると思うが、基礎研究に対しても成果の橋渡しやイノベーション等があまりにも強調されており、真の意味で自由で独創的な発想を育む環境ではなくなっていると感じる。今までわからなかったことが明らかになるという点だけでもその研究は尊いはずであるが、その具体的な応用方法が提示されていないと否定的に捉えられる風潮がある。それは「知の蓄積」には大きなマイナスである。(公的研究機関,研究員・助教クラス,男性)
- 594 マネジメントの状況についてはやや満足です。しかし、若手研究者に興味を持ってもらうため、学術研究等について大学・研究機関がもっと積極的にアピールすべきだと思います。(公的研究機関,研究員・助教クラス,男性)
- 595 近年は様々な研究資金制度が整備されてきており外部資金等の獲得に幅ができてきたと思うが、その一方で外部資金を獲得できる機関・部署とそうでない機関・部署における差が発生する恐れもある。真に研究活動の質によって取捨選択されるのであればやむを得ないと思うが、研究活動の分野や規模によってそのような差が発生することは、特に基礎研究の衰退を招いてしまうように思い、留意が必要だと感じる。(公的研究機関,研究員・助教クラス,男性)
- 596 学術研究・基礎研究であっても、いずれ製品化される見込みがあるもの、高いTRLが望めるものでなければ実施できなくなってきました。無論そういった点も重要ではありますが、研究の裾野が狭まることを懸念しています。(公的研究機関,研究員・助教クラス,女性)
- 597 前項の自由記載欄にも書いたが、若手への資金配分が少なく、また委託事業などにおいても現場重視の期間の短い課題が多く、スパンの長い基礎研究がしづらい状況にあり、挑戦的な課題を遂行し難い環境であると思う。(公的研究機関,研究員・助教クラス,女性)
- 598 政府の公募型研究費において、申請時の申請者や審査員の負担及び課題実施に際しての手続・評価等にかかる研究者の負担を低減するような取組がまったくといっていいほど行われていないか、かなり不十分だと感じる。(公的研究機関,研究員・助教クラス,女性)
- 599 主に産学官連携の業務に携わっているが、基礎研究に関する研究費が若干少ないように思う。また、諸手続きの簡略化が可能となれば、研究者の研究以外の負担軽減にも繋がる。(公的研究機関,その他,男性)
- 600 基礎研究、学術研究への支援については、資金的にも、サポートする人的資源においても満足できる水準ではない。(公的研究機関,その他,男性)
- 601 PDも含め広域に公正に判断できる人材は希少で、現状のプログラム数に合う目利き人材は不足している。そのため偏った判断で選定されているケースが非常に目立つ。これにより研究の多様性と、イノベーションの創出が妨げられていると感じている。(公的研究機関,その他,男性)
- 602 採択率は問わないが、若手等が挑みやすかったり、ちょっとした気付きから兆しを得るための研究費として、100万前後の公募型研究費が現場から求められている声をよく聞きます。(公的研究機関,その他,男性)
- 603 ・基礎研究、独創研究、実用研究のバランスが悪い(評価基準を明確した環境を整備すべき)。各領域とも客観的かつ本質的な有意・有用(優位)性の科学的検証をより意識したマネジメントが必要。基礎研究においても当初から実用化を意識することは重要だが、本質を見極め全体を俯瞰する力を充分養う必要がある。・申請時の手続・評価等の負担はやむを得ないが課題実施中のマネジメントに課題。双方、従来通りの報告形式は煩雑なだけ。本質的な進捗(課題解決の検証、マイルストーン)、新たな課題と解決計画、体制強化の必要性、現時点での有意性再検証と継続可否などを明確にした報告及び中間評価とすべき。産学連携の場合、個別報告ではなく出口側が全体を俯瞰し報告書とすべき。(公的研究機関,その他,男性)
- 604 問3-06: 手続き申請などが煩雑および複雑すぎます。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)

- 1005 学術・基礎研究とビジネス間のマネジメントが理解できていないと感じます。イスラエルなどと比べると、研究者がビジネスに研究開発の種をブルーフォブ・コンセプトから開発のIPにするところで、ビジネスサイドのCTO候補の人にバトンして次のテーマに移っていくのに対し、日本ではひとつのテーマを持ち続けて、ビジネス側に影響力を行使する志向が高く、結果としてビジネスで研究の種を刈り取ることにに対してネガティブに働いているように感じます。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1006 多様なチャレンジを促すボトムアップ的なシーズを活かす仕組みと資金が不足している目利き重視のマネジメントでは多様なチャレンジを生まない(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1007 研究者自身の事務的負担が大きい。基礎研究のみならず、そもそも大学レベルの研究は時間がかかるものであるにもかかわらず、一定期間(例えば3年とか)を過ぎた場合、追加研究を同じテーマではやりづらい傾向がある。したがって研究者の多くは、テーマ名やキーワードを変更し、その時代その時代に研究費の折りやすい中身に変更するという、自転車操業的・その場しのぎ的な内容になっている。これではレベルアップも継続した意識も生まれない。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1008 JSTはじめNEDOなどの評価委員、アドバイザーを務めているが、そもそも絶対的な予算額が少ない。厳しい批評も研究成果には必要だが、各プロジェクトで活躍する若手研究者への人件費は確保はできていない。研究は装置がやるものではなく、人がやるものである。日本はまだこの常識が政府レベルにも理解されていない。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1009 ・ある金額以上の研究装置/設備の購入時の国際入札制度は、研究者の手続き負担も大きく、また購入までの期間がかかり過ぎであり、貴重な研究開始を時期を遅らせているのでその改善策が必要と思う。・基礎研究がイノベーションに繋がるためには、産学連携によるシーズ/ニーズのマッチング機会を定期的に設定した方がいいと思う。・大学の法人化等による学術研究/基礎研究自身に充てられる時間が相対的に減少していることに対策が必要と思う。・将来の少子化を踏まえ、全国の国公立私立大学全体を大きく再編し、文科省からの減少していく運営費交付金等を有効に分配していくべきだと思う。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1010 ・国全体として、技術の発展レベル<基礎研究, 可能性検証, 動作実証, 信頼性実証, 事業性実証>に応じた研究開発のロードマップ、マイルストーン、技術移転のタイミングが無く、似たようなロードマップがあったとしても、関係府省、資金配分機関で共有されてなく、有機的な中長期な研究費のマネジメントは、まだ不十分であると思います。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1011 公募型研究では最近特に「役にたつこと」「実用になること」が求められるようになってきているので、これらの要請にそぐわない萌芽的、あるいは成果の見通しが明瞭ではないテーマは見向きもされなくなっている。これを打破するには大学や国研で自由裁量で配分できる予算枠を増やす必要がある。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1012 資金配分機関において各種制度は設けられていますが、研究テーマが特定分野に限定されがちであること、そもそもの予算額が十分でなく、また、制度の使い勝手を考えますと、改善の余地があるのではないかと思います。景気対策の一環としても、財政出動は必須と考えますが、将来の重要な投資として科研費などに大胆な資金配分を行っても良いのではないかと思います。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1013 あまりに近視眼的なマネジメントが多すぎる。もっとゆとりが必要である。また自由な発想による革新的発想が出るような努力も不足している。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1014 ディレクター等の思考の自由度が低く、また、イノベーションを起す要素としてノーベル賞クラスの新規性を求めているは、産業化につながらない。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1015 研究のマネジメントはその道に実績がある人しかできないような気がする。現在の就任者は地位や肩書で選ばれ、本当に評価できる人材が就任していないような気がする。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1016 ・助成金の運営方法は難しいと思います。がしかし、大企業が自社の事しか考えない、余裕が無くなってしまった現在の日本においては、政府系こうした活動の重要性は益々大切になってきていると思います。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1017 審査員が、定期的に資金をとる機関と癒着していて、テーマの内容を度外視して、いつも資金をもらっている機関が有利になるような仕組みになっている。とにかく、テーマよりも、今までもらっている機関だけしか研究費は回ってこない。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1018 どんなに社会的に重要な研究項目でも、名もないベンチャー企業には見向きもしない、体質がうかがえます。もう、自己資金も底を尽き、学会費用も出せないほどひっ迫しています。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1019 ノーベル賞を受賞された大隅教授の基礎研究に関するコメントが全てを言い尽くしていると感じた。一方で、限られた予算の中で賄う限り、成果が見えた、あるいは成果が見え易い研究・開発に資金が優先的に回る現状も資金配分の評価に携わった身としては熟知している。成果を問わない、あるいは投機的な研究への資金配分を、評価者の採点で決めるのではなく、予算枠の1割をこのような分野に充てると宣言して募集する案は如何か? 今の成果優先の閉塞的な研究資金配分を変えたいと念ずる老人のたわごとです。なお、現在の若手研究者の枠をこのような投機的な研究・開発に充てることは論外です(念のため)。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1020 不要なこと、例えば、文章表現の些細な変更を要求するプログラムディレクター(PD)がいる。天下りポストとしてのPDは廃止すべきである。その人件費を本来の研究費に充てるべきである。英国の科研費相当申請書の審査を依頼されたことがあるが、日本の科研費申請に比べて分量、内容がはるかに多い、年度進行に関する報告の妥当性の評価ももとめられた。現在の科研費の審査員は大学教員がほとんどであり、年末・年度末の多忙な時期に集中するので、審査員の負担を軽減する必要がある。例えば、工学系では、企業の技術担当役員相当の人達にA4で2ページ程度の要約申請書に基づき、予審査をしてもらい、将来性が高いと判断された申請についてだけ、大学教員による詳細審査をすることも考えてよいと思う。申請者が申請書作成に費やす負担を削減する必要はない。税金で研究させてもらうのであるから、それ相当の努力をすべきである。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)
- 1021 研究費の使い方についての裁量権を広げる必要がある。研究目的に合っておれば、申請した装置をより良いものに変更することを認めることなど。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

622 多くの場合、責任の先送り、失敗の回避のため、思い切った施策が機能していないように思える。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

623 基礎研究から実用化・実証研究へと開発ステージが進むにつれて研究費用が大型化するのが一般的であるが、成果が順調に出ている、予算等の制約で、途中で公的支援が続かない場合がある。一度研究が中断すると、研究グループが解体されたりして再開が困難な場合も多く、何らかの対策が望まれる。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

624 資金配分機関(背景にある省庁)により、マネジメントの実効性が異なっています。JSTやNEDOは非常に良いと感じています。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

625 学術研究・基礎研究について産の立場から、特にベンチャーは、研究費の余裕も少なく、実用化研究の一環として基礎研究・技術開発研究を行うことはあっても、技術力養成や研究者育成のための研究資金を独自に捻出するのは至難です。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

626 研究の評価が妥当とは思えないことがあります。特に審査に関しては不透明であると感じます。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

627 膨大な申請を評価されている先生方に謝意を表したいと思います。専門的な知識と理解を持ちながらこれらのことを実施できる人材を確保するための取り組みが継続されているかについて、私には知見が十分にありません。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

628 資金配分機関の研究資金は制約が多く、経営基盤がないベンチャー企業には獲得が難しい評価制度である。特に、当初想定していたビジネスモデルの技術課題が解決できないことや、想定外の課題発生などの障害が開発が進むと、次々に発生して売上が立たないことは、ものづくりでは当たり前の話である。そのステージを乗り越える努力を繰り返して改善するまで粘ってこそ、初めて世界で通用する商品が生まれると考える。独創的な成果を求めらるるのであれば10年サイクルでの支援は必須であると思う。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

629 申請と報告書作成のための負担がまだ大きい。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

630 まんべんなくというのはバラマキと同じになるのですが、何を以て優先させるかはなかなか困難と思うので、そのあたりは、適切レベルかどうか不明な点はあるが、それなりの応募の評価は実施されていると思う。しかし、重要度のレベルの判定ミスがあるものが出ると思えることがある。新規・画期的であるほど、その影響を受ける業界とか関連分野の評価者は正当な評価はしにくいのではと思う。突出すべきさせるべきことだが、どういふわけかて予算割り当てがないことがある。政策的な部分などもあると思うが、どうも正しい判断がなされて決められているか疑問に思うことがある。優先順位があって仕方がないと思えることでもあるが。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

631 提案が上手な教員に補助金が集中する。手続きの簡素化が必要。もっと大きな事は目に見えない人脈が大きく資金獲得に影響する。特定の大学の学閥などが依然大きな影響力を持つ。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

632 公募型研究は、その審査において専門家の評価の他に、広く国民に意見を聞いて採択する仕組みを取るようにすると良いと思います。特にイノベーションを重視する公募や、将来的にその研究成果を実用化して広く国民のために普及させることを目的とする公募の場合、専用のサイト等を立ち上げてインターネット投票を行う仕組みを取り入れると良いと思います。むしろ専門家の意見を重視すると、これまでになかった新しいイノベーションのようなものを起こしにくく、無難な提案のみ採択されると思います。これまでの仕組みのままなら、これまでになかった新しいイノベーションを起こせません。それを評価する審査員も、これまでにならなかつた専門家でない方に、評価してもらい仕組みも取り入れる等新しい取り組みを行うべきです。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

633 基礎研究だからなんでも良いというわけではない。ガリバー旅行記のラガード大学の研究に多く配分されていると危惧している。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

634 資金配分機関は、これまでの柵があるせいか動いていない風に見える。特に、窓口になっている下っ端の方々。動きたくても動けなそう。ステージゲート制はうまく機能していないように思える。進捗の段階ごとに成果を確認しつつ発展、とあるが成果の有無は判断できても、どの段階でどの程度か、ちゃんと判断できているのであろうか。有識者の先生は、事業立ち上げ(技術ノウハウ、コスト計算など)の経験がないと判断は難しいはず。個別の専門家を呼んでも、その連携は？ 各個人の持ち点制で評価しきれぬのか？ 愚痴だが、NEDOのステージゲート制の助成事業で弊社は不採用になったことがある。その2次面接では、技術の専門家がとして無機系太陽電池の専門家が招聘されていたようだが、提案したのは有機系太陽電池である。太陽電池つながりだからOKか？ そんなことはない。必要とされる技術は大きく違うのだから、質問の内容からして、ちゃんと判断できてたとは思えない。具体的には総額1000万円の助成事業なのに、1度の試作・評価で100万円近くの費用が掛かる検証を、検証不足だからちゃんと再現性まで確認してから出直せ、とは業界の金銭感覚のないが故の判断としか思えない。中小企業、特に小企業の開発研究費がどの程度か分かっているのだろうか？ 数億円の売り上げ規模であれば、数百万円がせいぜいだと知っている方に審査員を任せたいもの。売り上げが上がり、利益が上がらず、その研究費すらでない小企業が、その数百万の予算を得るために申し込んでいるのだから、事業化できるテーマが優先。それは分かるが、そのため川下の大企業との繋がりが重要視され、川下企業の念書(技術への太鼓判や購入約束など)があれば加点される。中小企業が大企業と念書を貰えるだけの繋がりがそうあるはずもなく、営業力やコネがあるだけの出願企業が優遇されるとなればどうだろうか？ 提案の技術の良しあしや事業新規性などには関係がないところで落とされることになり、お蔵入りするのはもったいなくはないか。少なくとも有識者は専門家であるべきだが、そのような方はとても忙しかつていて、技術的な判断であれば、教授に拘らず、准教授や助教でも判断できるのでは。教授に推薦させ、他の誘惑に負けぬようきつちりと報酬を支払うのがいい。ボランティアはダメ。報酬があれば時間は掛けられるはずだし、へたな教授よりもよく知っている(教授は政治、実働は准教、助教)の方は多い。あと、企業出身者もちゃんと判断できそう。そのような方は、特任教授など特殊な肩書が多いのでそれも可としては？ ステージゲートの初期ステップ(〜2000万円)に限り、中小の小企業の採択基準を緩め、優先的に採用しては？ ただ、ものづくり補助金のような失敗があるから、成果の確認は1,2ヶ月おきに行い、進捗が無かったり、不正流用などが発覚すれば即返金などの厳しい対応が直ぐに取れるようにすべき。海外の大学みたいに、入りやすいが卒業は難しい、みたいな？ 審査員は、ポストドクや助教の金のないところ2人と、暇を持って余している技術出身の60代が一人のチーム、とか、何組も作ってじゃんじゃん訪問させる。雇用も生まれるし、研究者の結婚も増えるかもだし、何よりもものづくり補助金で多かった研究には一部成功したが、事業化までには至らなかった、みないなもの減ると思われる。(民間企業等, 社長・学長等クラス, 男性)

- 635 部分最適を目指しているようで、全体としての方向の整合性をもっと図るべきと思う。いわゆる有識者による評価ということが正しい方法かどうか疑問あり。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 636 自分の関係する、企業への研究資金の状況に関して述べる。金額や種類についてはかなり満足ができるが、その資金を生かす取り組みに大きな問題を感じる。きわめて使いづらいというのがそのポイントである。研究内容を全く理解できない官僚が取り仕切る為、枝葉末節の形式上の締め付けだけに關心があり、内容や成果の評価は2の次になっているのは全くの本末転倒としか言いようがない。官僚の理科教育を根本的に考え直し、科学的知識と思考のできるように再教育するか、その力を持った人材を研究資金配分分野に配置するべきであり、単なる事務屋は研究開発を阻害するだけで何の役にも立たないと思う。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 637 基礎研究の再賦活化は喫緊の課題である。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 638 イノベーションの定義はそれぞれの組織毎に異なるので、ここで考えるイノベーションは何であるかを明確にする必要があると思います。たとえば、民間企業であればStanford Research Instituteの定義は良くあてはまりますが、アカデミアからみれば違います。また、イノベーションの多くは既存の要素技術の組合せで生み出されており、問3-01～問3-03は基礎研究がイノベーションを生み出すと言うアカデミアからみた視点で書かれているので、設問にある「大きく捉えて」とは少しずれている印象を受けます。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 639 分野においては、日本が国際的にリードしているものもあるので、そこに対しては集中的な投資が重要です。また、日本の戦略分野に対しても、さらに積極的な中長期の視点での研究費の確保が必須です。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 640 研究開発が基礎研究・実証研究・事業化研究などステージ変わる中で、JST・NEDOなど予算枠だけでなく、他の予算枠や制度を活用したパッケージ型の研究開発制度(開発課題と既存技術を組合わせたシステム化など)の構築も容易になると実用化が進むと思われる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 641 SIPなど府省横断的なプロジェクトが推進されているが、その研究費マネジメントは従来の縦割り行政に強い影響を受けているように見える。PDに権限を集中するなどのマネジメントの改革が必要に思われる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 642 政府の公募型研究費に関する出納事務作業の煩雑さ、使途に関する制限規定等の不明瞭さが目立つ。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 643 基礎研究の不足に加え、基礎と応用をつなぐ研究が不足しておりイノベーションを阻害している。そんな中であって、JST・AMED・NEDOに関しては一定の役割を果たしており、更なるスケールアップが望まれる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 644 ・国レベルの施策では、より長期的な研究サポートを重視することが重要と感じる。・一定レベルの研究費マネジメントは行われていると思われるが、手続き等の煩雑さは課題ではないか。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 645 どの研究開発テーマに資金配分するかという目利き、なんと言ってもこれが一番重要だと思いますが、資金配分機関が機能を十分果たしているかどうかなど状況を把握できていません。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 646 大学や公的機関においてもシステム化や研究成果の早期刈取りを求める傾向が強まっているように感じるが、これら機関においては、長期的な研究開発が必要な、基礎技術/要素技術(キーデバイス)に重点をおいた研究が行なえる環境構築及び投資が重要と考える。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 647 資金配分機関は、少ない予算の中で配分を頑張っていると思うが、一部のテーマを除いて海外研究の後追いとなっている点は否めない。独自の国家戦略に基づくもっとアグレッシブな予算配分なども検討できるようにすべき。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 648 官の注力先が世界的な流行に流されており本質的でない表面的なものが散見される。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 649 基礎研究の大切さは、誰もが認識を持っているが、具体的な展開は見えないが、基礎研究に対する取り組みは、不十分に感じる。従って、優秀な研究者が海外に流出している。もっと政府として、豊富な資金提供は必要なのではないか?と思われる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 650 集中的な資金配分がなされ、その分野では成果も出つつあるが、多様性という面では十分と言えない。論文や報告書を書いたらそこで終了と言う傾向がまだ強く、応用研究、実用化開発→イノベーションへと繋がりにくい。基礎研究からのイノベーションへと繋がる全体のマネジメント施策を強化する必要がある。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 651 大企業にとっては間接業務を負担しやすいが、中小企業にとっては研究員自らが間接業務を行わなければならない場合がある。人件費をそちらに割くと研究が遅れがちになるので頭が痛いところである。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 652 ノーベル賞受賞を一つの学術及び基礎研究の評価の指標とした場合は、2000年代に8名、2010年代に9名を輩出している。ノーベル賞は過去の業績の反映であり20年～30年前の研究・教育環境、進め方がよかったという証でもある。そういう意味で教育改革・大学改革以降のゆとり教育を受けてきた若手技術者の今後の成果に対して若干疑問が生じる。今一度、日本の将来のあるべき姿を設定し教育や研究制度の見直し・充実を検討すべきではないか。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 653 先端と称する開発テーマに研究費が集中し、基礎的(継続して開発し続ける必要がある)テーマへの配分が少ない。研究の中には、無理やり先端研究のような或いは先端研究に連携させたようなテーマ申請が見受けられる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 654 世界の急速な技術革新に遅れをとらないためには、研究成果の早期事業化が必要だが、研究費として投資する段階から、大学発ベンチャーを育成するための資金調達への展開のマネジメントが上手く行っていない。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)

- 655 研究に直接関与するものとマネジメントするもの間で状況がかけ離れている感があります。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 656 近年の状況は基礎研究分野においては十分とは言えない,またその成果を応用研究,実用化につなげる仕組みが無いと思われる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 657 政府の研究費の配分,将来につながるが,成果を一部でも出していない段階で,大学等の研究費にしか使われない傾向がある。初期の想定で,実用化のための研究とそうでない研究をジャッジできる人員がいないのであろうが,研究費を稼ぐ公募へ資金が使われすぎている。はじめから,実用化の可能性を認めるのは難しいでしょうが,研究として解決されていない課題を解決するための研究費であることを,正しく認識できれば,どの研究への資金配分が必要か,ジャッジ可能と思われる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 658 医療機器分野に於いて,非臨床,臨床に関する研究費が不十分で,企業に橋渡し判断可能なレベルのエビデンスが確保できず実用化に至らないケースが多いように感じる(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 659 先ず,申請時の資料作成の負担軽減をお願いしたい。又,支給対象に偏りがあるので正願いたい。基礎研究段階に於いて「結果」を求める点に関しての改善を望む。今のままでは,「結果が見えている」テーマしか,提案出来ない。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 660 基礎研究は短期間に成果に結び付けるようなテーマは極めて少ないと思われる。これに対して研究費の配分は,近い将来の成果に重きを置いての配分になっておりこの辺にギャップがあると感じる。長い目で見て効果が出るテーマをいかに見分け,資源配分を行うかが肝要であるが難しい。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 661 一流と呼ばれる大学・産業においては世界トップレベルの基礎研究,研究開発が十分に行われていると感じる一方,2流,3流,中小企業,町工場などでは,独自性や差別化,イノベーションを起こせるだけの人材育成,投資等が十分に行われていないと感じる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 662 大企業が申請して研究費を受けることは間々あると思われるが,中小企業クラスの場合,アイデアがあっても具体的な研究に移行するためのリソースも開発費も持ち合わせていない。このような部分に対して補助の手を差し伸べる政策を打出してほしい。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 663 ・イノベーションに繋がる基礎研究の評価は非常に難しい。イノベーションは先端学問から生まれるだけではなく,企業や実業との関わりで生まれてくるものである。大学での基礎研究だけではなく,産官学を上手くつなげるイノベーションの実現に繋がるよいプラットフォームを形成すべきだろう。単なるマッチングではなく,戦略的なプラットフォームを。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 664 工学的に成果を上げやすい研究課題へ,研究費配分の重心が偏っていないか。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 665 基礎研究の多様性は素晴らしいと思いますが,イノベーションに入れる力は,アメリカや中国と比べて,弱すぎると思う。基礎研究の最終目的としては,創新,製造ではないだろうか。最終目的にねらわないと,ただの研究すれば,素晴らしい研究結果を得ても,論文発表は勿論重要ですが,しかし,国に戦略としては,論文発表の段階で終わると非常に無駄と考えている。巨大な研究費用を使って,最初の段階だけに資金と力を入れるのは足りなくて,本場に社会へ貢献まで資金と力で支援していただければと思います。後半に成功すれば,本番の成功じゃないだろうか。(民間企業等,社長・学長等クラス,女性)
- 666 なにに比べて,十分なのか,というところが不明確なため,比較対象がわかるとうれしいと思います。(民間企業等,社長・学長等クラス,女性)
- 667 JST,AMED,NEDOのそれぞれの機関によって,進め方や対応が違っている事は必要だと思いますが,横軸でみて,情報や仕組みなどで共通できるところは共通化して頂いた方が,私たちにとっては進め易くなると思います。また,それぞれの機関で有識者の方々が沢山おられますが,各機関で担当して頂ける方の個性で進め易い場合も沢山ありますが,進めにくい場合もあります。(民間企業等,社長・学長等クラス,女性)
- 668 申請やプロジェクト遂行において,もう少し申請者の負担が下げられると良い。準備のワークロードは半端ではない。これと相反するようではあるが,プロジェクト終了後に,関連するステークホルダーに対して,実際にどれだけその研究が役に立ったか,貢献したか,事後評価はあったほうがよい。(民間企業等,社長・学長等クラス,女性)
- 669 研究資金は投資と同じで,国民に対するリターンが期待できる場所へ必要箇所へ,必要かつ十分な予算配分をすることが重要であるが,研究資金の配分を決める機能が十分果たされているとは思えない。基礎研究,応用研究,技術開発のステージに応じて適切に処理されているとは言えない。産業界の技術開発の仕組みをもう少し上手に取り入れるべきである。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 670 研究のための研究に埋没していると考える。これは我が国がお手本としてきた先進国もかつて経験し克服してきた内容であると考えて。従って,我が国も好例をベンチマーキングして改善することが可能と考える。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 671 ステージゲート制などの進捗評価は良いシステムと考えるが,長期的な取り組みがなかなか評価されない,審査対応などで研究担当者にはかなりの負担となっているなど,課題もあると考えている。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 672 基礎研究分野に関しては長期間にわたって実施するものも多くあるため,そういった長期プロジェクトに対応できる枠組みが重要になってくると感じています。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 673 基礎研究に関しては,時間がかかるので,継続的な支援が必要だと思う(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)

- 674 公的研究費にかかる手続きが煩雑で、その管理に非常な労力を要していると感じます。省庁ごとにルールの詳細が統一されていないのも大きな負担と感じます。研究意欲を削ぐ要因にもなりかねず、柔軟な運用の枠組みが求められます。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 675 それぞれ専門の費用管理者が必要と思います。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 676 研究の発展段階に応じ、継続性を保ちつつ支援する姿勢は大変感じられますが、苦勞しているように思われます。公募から申請までの期間が短いので、企業では通常の稟議の時間が十分にとれず、苦勞しております。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 677 研究費の公的ファンドが実用化によりすぎており、基礎研究への配分が十分でない。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 678 資金配分機関は、その時の、政府の意向に従って、研究に必要な期間と比較すると非常に短期的に重点項目を変更している。そのため、特に若手研究者がある重点項目に携わった時に、数年後に、別の項目が重点項目となっている場合がある。つまり、必要に応じて重点項目を変更するという考えは大局的には重要ではあるが、将来の研究開発に重要な若手の研究者の育成の面からは非常に不向きである。若手の研究者育成についての評価も「後で評価項目に入れる」施策もあるようであるが、その点をもっと基本計画時点から明記すべきであると考えます。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 679 継続性は重要であるが、新規のテーマのくみ上げが仕組みが必要。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 680 問2-06にも書いた通り、大学の運営費交付金削減によって、研究者の自由な発想に基づく野心的な研究を保証する基盤的な研究費が枯渇している。競争的資金の採択率低下を招き、成果が確実に上がりそうな、見通しのほぼついた研究計画ばかりが増えている。大学院重点化を進めたにもかかわらず、修士や博士の社会全体での活用につながってこなかったため、研究者を志す日本人が減少。大学院生を安い研究助手として使う従来型の研究室運営もできなくなっている。競争的資金を確保できなかった研究室は、大学院生の研究指導さえ十分にできない状況に陥っている。ごく一部の研究者、研究室への資金集中も目に余り、競争的資金偏重の弊害が極まっている。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 681 ・JST,AMED,NEDOは「将来有望な研究開発テーマ」を発掘していない。既にめどが立っていて誰でも知っているようなテーマに投資しているにすぎない。例えばJSTは、かつて全く芽が出なかった〇〇〇氏の〇〇〇〇〇〇研究を支援したが、同じようなものが今のJSTにあるだろうか。・基礎研究への支援が全く不足している。運営費交付金を増やすとともに、科研費総額をもっと増やすべきだ。財源がないならJSTやNEDO,AMEDを廃止してその分を回せばいい。・運営費交付金は基礎研究の多様性確保だけでなく、博士の就職先確保という意味でも研究振興の効果は大きい。・AMEDは現場で評判が悪い。提出書類が膨大でサイトビジットも多く、研究者の負担が大きすぎるからであり、早急な改善が必要だ。・日本の臨床研究が駄目なのは、エビデンスを出すのに必要な疫学が大学教育できちんと教えられていないことが大きな原因だ。医学部教育の改革を支援する必要がある。臨床研究に疫学が不可欠だという世界の常識が日本でも常識にならない限り、いくら投資しても臨床研究で世界に伍するようものは出てこない。・厚生労働科研費も抜本的な見直しが必要だ。どうでもいい研究が多く、政策に使うには質が低すぎる研究も少なくない。研究結果が国際学術誌に載ったことがどれだけあるだろうか。役所に協力的な学者に与える「えさ」としかみられていない。税金の無駄であり、少なくとも評価システムがあると思われるAMEDに全てを移管してはどうか。・「目利き」は自分の専門分野を担当するのでバイアスがかかっているのでは、欧米の「目利き」は自分の専門とは違う分野でも良い研究を育てている。目利きが本当に機能しているのか評価する必要がある。・SBIRは、米国では博士号を持つ若手の力を伸ばすために使われているが、日本では単なる中小企業支援策にすぎず、成果に乏しい。制度を廃止するか、米国と同じ制度にするか、どちらかにすべきだ。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 682 まだ海のものとも山のものとも判らないテーマにこそ公的な支援が必要と思います。その点で言えば、いわゆる「目利き」の圧倒的な不足を痛感します。現状、基礎研究は、研究者の自己犠牲と献身によって成り立っているようにしか思えません。実用化研究に偏向している現状の予算配分は、早急に是正すべきです。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 683 ・地道な基礎研究への配分が得づらい昨今の現状は、将来的な科学レベルの低下につながりかねない。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 684 公募型研究費への応募、管理、報告、関連する調査などの業務が煩雑であることが、応募を断念する理由のひとつになることがあります。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 685 最近の公募型研究費は、OUTPUTを明確に求める方向が強くなっており、独創的な研究やリスクの高い研究が敬遠され、わかりやすい結果が得られやすい研究に偏る傾向にあると感じられます。「このままでは、日本からノーベル賞候補の研究が出てくる」という指摘は、その通りだと感じます。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 686 研究者の事務手続きは、軽減することが好ましいが、研究及び研究費マネジメントについては、研究者自身も、今まで以上に精査して説明する努力は必要。曖昧な計画のまま研究して、成果につながらない事例も多いと推察する。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 687 科学技術分野ノーベル賞受賞者数がアジアで突出しているのを見ても、日本の学術・基礎研究は客観的に見て成功していると考えられます。一方で受賞者が出た成果は、戦後高度成長期～21世紀初頭頃のもので最近の競争的資金やPDCAサイクル下のものではないため、将来も成果を出し続けるか不透明です。個人的には、公募型は機会均等には役立つが、審査・評価・実用化フォローアップ等に関係者へ多大な負担を強いて逆に研究に専念しにくくしている面があると思います。本来、科学技術は研究結果が失敗であっても良いのに、成功しか許さない(次の公募で落選する可能性を増すかもしれない)制度は、ほどほどに運用しないと両刃となります。現状の制度は明らかに管理過剰と思われる。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 688 研究費の申請、使用には手間がかかる(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 689 大学の独立法人化以降大学が短視野な成果を求める傾向が強まり、基礎研究を重要と認めつつもその本来の基礎研究能力を自由に発揮できる環境が狭められている。また、大学の研究資源とそれを活用する産業界との橋渡しを担うべき人材も大学側や官側(AMED)に不足しており、結果的に研究費マネジメントが適正に運営されていない。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)

- 690 ベンチャーやスタートアップに対しても技術の多様性を評価するような資金があつてよいと思う。基礎研究と同様に、初期の事業化でも多様性は必要である。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 691 公募大型ファンドの経費の使い道の多くが,人件費(ポストクの雇用)にあてられているが,それが正しい姿か再考の余地あり。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 692 研究費の選択の幅と自由度が少ない様を感じる。特に基礎研究の場合は,裾野が広がることのできるよう自由度を拡大しても良いと考える。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 693 政府の公募型研究費に関しては,原資が税金であることを理由に,合理性に欠けるほどの書類の提出や修正が求められており,改善すべき状態にある。資金配分機関は,研究開発テーマの発掘や政府戦略に基づく資金配分は概ね実施できていると認識するが,そもそも政府戦略の戦略性がまだ低い状態にあるため,十分な機能を果たしているとは言えない。さらに,マイルストンの設定とその達成に係る評価やステージゲート制度の導入による進捗管理などが不十分であるため,十分にPDCAを回しているとも言えない。戦略性を高めるためには,研究領域における定員制の廃止(社会的要請を反映した原資の確保と,その原資に応じた研究経営)が求められる。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 694 JST・NEDOに比較してAMEDの立ち位置は明確化されているが,事務部門の不慣れもあり期待通りの状況ではない。ライフサイエンス予算の一括一本化による意義ある運用がなされて,本当に科学イノベーションに貢献することを期待する。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 695 資金の使途が明確であれば,調達などの自由度を改善するようしていただきたい。大型の共同研究を産業界に求められ,それに応じて研究費を用意しても調達に時間がかかりスピード感ある研究は行えない。海外とはそのスピード感が違う。国内大学との共同研究では制限,制約が多いと感じることがあるのではないか。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 696 適切な評価がなされるべきであるが,手続き・評価対象となる書類作成の手間が非常に大きい。量を確保することに形骸化してきていないか。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 697 イノベーションを生み出せる教育への注力をお願いします。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 698 選択と集中はかなり進んでいるが,一方で多様化の面では懸念もあり,将来に向けてのリスクある研究分野の遅れが懸念される。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 699 たとえばiPS細胞など一部の分野に偏った配分がなされている。また選択と集中の名の下に,一部には使い切れないほどの資金を投じていながら,継続的な研究費は減っているため,多くの研究者は競争的研究費の獲得に奔走せざるを得ない。さらに多くの競争的資金は流行の分野の研究を多く採用する傾向にある。そのため基礎研究の多様性は十分に確保できていない。また国立大学の事務員の数が少なく,また事務員の多くは事務サポート能力・レベルが低いため,研究者でもある教員の多くが事務的な仕事に多くの時間と労力を使わざるを得ず,独創的な研究テーマを発想する余裕が無くなっているように思う。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 700 科学技術基本計画もあるが,この日本という国が世界のリーダーとなるための科学技術,将来における日本が持つ個別課題の解決のための科学技術,技術が個別にもつ課題を解決するためにあるならば,20年,30年を見越しての基礎研究があるはず。そのために今開始すべき基礎研究であるならば,そこにフォーカスし研究費ウェートを高めた基礎研究は必要と考える。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 701 人工知能技術やIoTを普及される整備や取り組みはなされているが,これらの分野を扱う人材が日本では不足している。ものづくり主導で人材育成をおこなっており概念形成や新しいコンセプトを生み出す人材育成が不十分なこと,無形なことへの理解が産・官・学で不足しているのでイノベーションのスピードが国際競争では劣る。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 702 表面的な世の中の状況変化の影響を受け,継続性が担保されない場合がある。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 703 公的資金で研究開発を行った場合の経費について,帳票等の提出が求められるが,必ずしも効率的な手法であるとは思えない。逆に手間がかかるなど,応募するのを躊躇する原因にもなっている。また,AMED,NEDO,JST等で審査のやり方やその基準,経費の考えなどが統一されておらず,現場での対応が負担になっている。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 704 学術研究・基礎研究に対する資金配分が不足していると考え。JSTは,学術研究・基礎研究に多くの資金を配分し,応用研究は,NEDOが担当するという役割を明確にすべきと考える。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 705 研究の成果をイノベーションにつなげるには,それにかかる投資リスクを軽減する仕組みがあると,なお良いと思います。日本人はただでさえリスクをとらないので,そのような仕組みがないとリスクをとることをなんとも思わない国民に負けてしまいます。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 706 基礎研究によるイノベーションとそれを産業化に結びつけるべきイノベーションマネジメントを切り分ける必要があると思う(そのような試みはなされているようだが不十分である)。イノベーション活動に関しては,企業側にも大きな問題がある。最近では利益創出だけを追求する傾向が強くなり,社会価値創出を追求することができない経営環境になっていることも大きな負の要因である。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 707 10年前などと比較して,ずいぶんしっかりとしたマネジメントをされている印象を持っております。基礎研究を含めた研究開発の成果の評価については,産業応用の短期的視点だけに偏ることなく,慎重に評価していただきたく思います。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)

- 708 ・(質的側面)成功させる事を前提とした報告や成果構築をしてしまう傾向がある。100発100中の研究開発は存在しないし、そのような報告は必要ないと思う。結果、使えるか使えないか、あるいは時期尚早、といった観点が抜けるため中途半端な成果になっているようにも思う。・(期間的側面)年度の区切りで動く形が主であるが、キャッチアップや多様性が求められている今、ある程度、都度受付可能な枠組みが必要。・事務手続きや報告事項含め、負担が大きい。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 709 学術研究と基礎研究については特にコメントはありません。研究費についてですが、公募型の申請書類の作成が非常に煩雑で少々辟易します。もう少し簡略化できないものではないでしょうか。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 710 企業研究所が足踏みする基礎科学領域の充実をもっと図るべきである。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 711 ・各大学における研究費用の調達力の差は、調達する側が持つ人的ネットワークとポジション、発言力によるところもあると聞く。信頼性の上で成立しているのであれば問題無いが、潜在的なイノベーションを持つ新しい考えに対しての、チャレンジングな支援も望みたい。・昨今の研究開発には、マーケティングの要素も需要となっているようだが、資金分配を行う側は、その判断をどう行っているのかを知りたい。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 712 研究費を獲得しやすい目の研究に、応募が偏っていると思われる(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 713 基礎研究分野についての長期ビジョンが示されていないか、5年単位で変わっているように感じる。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 714 (1)2年以上の事業で1年毎の予算申請は不満ですが仕方ないとしても、計画そのものが1年づつ完結するようにするのは改善の余地ありと思います。以前の補助事業では、1台目の装置を製作・運転により明確になった問題を解決して2台目の装置を組み立てる計画を提出したら、初年度に2台とも製作する必要があるとのことで、多年度事業の意味がないのでは？と感じました。(2)不祥事等があるためと思われるが、ほとんどの機関が真面目に事業を遂行していると思いますので、予算消化の検査をもっと簡素化してもらえたらと思います。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 715 審査員に対してですが、大学教授・公的研究機関の研究管理者が主になっているが、実用化分野に関しては企業の研究者を審査員として積極的に活用するのよよいと思います。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 716 公募型研究費の利用について、下記の課題を感じております。1.産業応用研究の場合における、利益還元の妥当性(公的研究費を活用するメリットが出ない)。2.申請者、審査員の負担以外に、期間中の管理に関する事務的な負担が大きい(手続きの煩雑化)。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 717 研究には、失敗することも多くあると思います。研究費マネジメントとして、きちんと失敗点を書き、それを次のマネジメントにつなげていく必要があると考えています。継続のことだけを考え、常に一定の成果が出ているような報告もあるような気がしています。失敗しても、その失敗をバネに次の研究ができるようなしくみを構築出来るようになればと考えています。(民間企業等、部長・教授等クラス、男性)
- 718 身近な分野はおおよそわかりますが、日本全体のマネジメントの状況がわかりません。知りたいです。(民間企業等、部長・教授等クラス、女性)
- 719 研究費申請時のコミットメント、考え方、体制などが変更になる際に、引き継いでいないことが多いと感じています。特に大学においては、学長選の前後には研究そのものが政治的に動かされていると見えることもありました。(民間企業等、部長・教授等クラス、女性)
- 720 大学・公的研究機関・企業といった各機関を横断的に行う研究開発や先がある程度見通せて比較的大きな開発費用がかかる研究開発は、効率的な研究開発を進めるためにも、国際的な競争力を高めるためにも管理法人の役目は非常に重要かと思えます。ただ、より基礎的な研究開発は、事前にどの程度の成果が出るのかを判断することは難しいです。研究開発も多くはかからないことが多いので、各研究機関にある程度比率を決めて配分して、自由に使えるようにするのがいいと思います。研究者にかかる研究費の管理の負担は、できる限り減らせられるシステムにできればと思います。知財についてですが、大学での特許出願も増えてきていますが、製品化した利益で回収することができません。特許は維持費用もかかるので、その費用を研究費がどう捻出していくのか、大学にそれを継続してできるのか疑問です。また、特許を出すということは、当然、研究発表は特許出願後になります。これは、基礎研究にあまりなじまないと思います。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 721 基礎研究や挑戦的な研究においては、複数年度での継続的な投資が必要。最低限度のリーソースと年度毎にダイナミックに変動する費用立ての考え方があっても良いのではないかと。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 722 産業界の将来に有益な学術研究・基礎研究を学術界にて担うには、魅力を感じるテーマ設定、研究体制および設備・施設の提案が必要。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 723 研究費を年度単位で決めない方がよいと思います。年度またぎでの繰越し等の仕組みがあれば、もっと研究に注力できるのではないかと思います。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 724 民間企業が取り組む中長期的な開発テーマに関する基礎研究開発費に関する助成事業が不足している。FSの後に研究開発、その後に実証フェーズとなる助成事業が多く見られるが、FSの前の基礎研究に対する補助を広く補填すべきであると感じる。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、男性)
- 725 公募型研究の手続きなどは異常に手がかかり研究者の負担が大きいと思われる(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、女性)
- 726 研究の発展段階に応じたシームレスな評価は、複数府省(分野)にまたがるのが条件である支援策もでき、大分行われるようになってきたが、まだ府省間・資金配分機関間の壁は高い。基礎研究の成果は、必ずしもイノベーションにつながらなくてもよいのではないかと。(民間企業等、主任研究員・准教授クラス、女性)

- 727 マネジメントについては、研究を監督する教授では無く、財務に長けた人材が上手く活用されると良い(民間企業等,その他,男性)
- 728 文部科学省の科学研究費を拡大すべき。印象ですが、JST・AMED・NEDOの大型の競争的資金は、余り成果が上がっていないような気がする。一度精査してください。(民間企業等,その他,男性)
- 729 教授と話をすると、申請などの業務が結構、大変ということをお聞きすることが多い。とはいえ、税金を使うのですから、ある程度はやむを得ないと思います。(民間企業等,その他,男性)
- 730 多くが将来を見据えた分野に注がれていると感じる。(民間企業等,その他,男性)
- 731 ノーベル賞受賞などが示すように、国際的に突出した日本発の基礎研究は多い。領域において状況が異なるかどうかは不明。(民間企業等,その他,男性)
- 732 マネジメントと言う点で見ると研究開発とそれに応じた成果が十分とは言えない。(民間企業等,その他,男性)
- 733 ノーベル賞をこれだけ取れていることから、基礎研究の成果はあると考えられる。しかしわが国での産業化は十分とは全くいえない。基礎研究を生かす仕組みに問題があると思われる。成果が出た研究成果に対して、事業化、産業化に向けて継続的な支援が必要です。特に量産化に向けての企業努力は新規分野への参入の場合非常に大きい。この支援がないと国の資金が段階で開発が止まってしまふ。産業育成を考えるならば、市場で受け入れられるまでの支援は必要です。もちろん企業としても資金注入も必要です。基礎研究から応用研究、量産研究、産業化の研究と切れ目のない研究開発の支援が必要です。重点分野では是非お願いしたい。このままではドイツや中国に負けてしまふ。本当に必要な研究や参加メンバーでない体制で行っていることがあると思われます。有名な先生の名前を出すことで通り易くなっているようなケースが無い様な評価メンバーの選定や構成を考えていただきたい。(民間企業等,その他,男性)
- 734 学術・基礎研究についてはそれほどではないが、大型予算については未だに、内容より名前に依存したマネジメントが見受けられる。蓬莱展望を描くことができるようなマネージャーの質向上が必至である。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 735 最近では、政府の大型研究申請の審査員に、多くの民間マネジメントの方々が参加している。内閣府にも多くの民間出身者が集まっている。残念なことに、それらの方の中には公平な評価の在り方について、十分な見識をお持ちでない方も居られ、あるキーワードが流行すればそれを無批判に選定基準に選ぶなど、後のチェックに耐えない評価を行う方が居られる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 736 大学人の意識改革を進めると同時に、基礎的研究へのサポートも必要と思われます。すなわち、いくら基礎的研究と言えども、しっかりと出口を明確にしたうえで取り組むことが必要です。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 737 研究者個人に依存しているのではないか？組織的なマネジメントが望まれる。(民間企業等,社長・学長等クラス,男性)
- 738 成果が直ちに産業応用につながることの少ない基礎研究には支援が不足している(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 739 大型チームとなる研究組織では、個々の研究評価が正確にできず、資金のバラマキと全体評価の甘さ、希薄さにつながっている。しっかりと研究マネジメント体制の確立と成果の評価システムの確立が必要。相対評価ができる自己評価システムの導入も一つの方法である。研究評価や良いマネジメント人材を見出すことは、重要である。学より産の研究開発担当者に、人材を求める方がよいと感じている。(民間企業等,部長・教授等クラス,男性)
- 740 事情としてはやむを得ない部分があると思いますが、短期間での成果を見せることが重要になっており、成果を見せることに負荷がかかっていると感じています。長期的な計画に沿って研究成果の社会還元環境整備をしていただけるとありがたいです。(民間企業等,主任研究員・准教授クラス,男性)